

# 蓼喰う虫

谷崎潤一郎

青空文庫



## その一

美佐子は今朝からときどき夫に「どうなさる？ やっぱりいらっしやる？」ときいてみるのだが、夫は例の執方<sup>どつち</sup>つかずなあいまいな返辞をするばかりだし、彼女自身もそれならどうと云う心持もきまらないので、ついぐずぐずと昼過ぎになってしまった。一時ごろに彼女は先へ風呂に這入<sup>はい</sup>つて、どっちになつてもいいように身支度だけはしておいてから、まだ寝ころんで新聞を読んでいる夫のそばへ「さあ」と云うように据<sup>す</sup>わつてみたけれど、それでも夫は何とも云い出さないのである。

「とにかくお風呂へお這入りにならない？」

「うむ、……………」

座布団<sup>ざぶとん</sup>を二枚腹の下へ敷いて畳の上に頬杖<sup>ほおづえ</sup>をついていた要<sup>かなめ</sup>は、着飾<sup>かざ</sup>つた妻の化粧<sup>けしょう</sup>の匂<sup>にお</sup>いが身近にただよふのを感じると、それを避けるような風にかすかに顔をうしろへ引きながら、彼女の姿を、と云うよりも衣裳<sup>いしやう</sup>の好みを、成るべく視線を合わせないようにして眺<sup>なが</sup>めた。彼は妻がどんな着物を選択したか、その工合で自分の氣持も定<sup>さだ</sup>まるだろうと思つた。

のだが、生憎あいにくなことにはこの頃妻の持ち物や衣類などに注意したことがないのだから、

——ずいぶん衣裳道楽の方で、月々何のかのと拵こしらえるらしいのだけれども、いつも相談あずかに与ったこともなければ、何を買ったか気をつけたこともないのだから、——今日の装いも、ただ花やかな、或る一人の当世風の奥様と云う感じより外には何とも判断の下しようもなかった。

「お前は、しかし、どうする気なんだ」

「あたしは執方でも、……あなたがいらつしやれば行きますし、……でなければ須磨すまへ行つてもいいんです」

「須磨の方にも約束があるのかね？」

「いいえ、別に。……彼方あつちは明日あしただつていいんですから」

美佐子はいつの間にかマニキュールの道具を出して、膝ひざの上でセッセと爪つめを磨みがきながら、首は真つすぐに、夫の顔からわざと一二尺上の方の空間に眼を据えていた。

出かけるとか出かけないとか、なかなか話つかないのは今日に限ったことではないのだが、そう云う時に夫も妻も進んで決定しようとはせず、相手の心の動きようで自分の心をきめようと云う受け身な態度を守るので、ちょうど夫婦が両方から水盤みづの縁ふちをささえて、

平らな水が自然と孰方かへ傾くのを待っているようなものであった。そんなふうにしてとうとう何もきまらない内に日が暮れてしまうこともあり、或る時間が来ると急に夫婦の心持がびつたり合うこともあるのだけれど、要には今日は予覚があつて、結局二人で出かけるようになるだろうことは分つていた。が、分つていながら矢張受動的に、或る偶然がそうしてくれるのを待つていと云うのは、あながち彼が横着なせいばかりではなかった。

第一に彼は妻と二人きりで外を歩く場合の、——此処から道頓堀までのほんの一時間ばかりではあるが、お互の氣づまりな道中が思いやられた。それに、「須磨へ行くのは明日でもいい」と妻はそう云つてゐるものの、多分約束がしてあるのであろうし、そうでないまでも、彼女に取つては面白くもない人形芝居を見せられるより、阿曾あその所へ行つた方がいいにきまつてゐることを察してやらないのも氣が済まなかつた。

ゆうべ京都の妻の父から、「明日都合がよかつたら夫婦で弁天座へ来るように」と云う電話があつたとき、一往妻に相談すべきであつたのだが、折あしく彼女が留守だったので、

「大概ならばお伺いいたします」と、要はうつかり答えてしまった。それと云うのが、

「僕は長いこと文楽の人形を見たことがありますので、今度おいでになる時には是非誘つていただきたい」と、いつぞや老人の機嫌きげんを取るために心にもないおあいそを云つたの

を、老人の方ではよく覚えていてわざわざ知らしてくれたのであるから、彼としては断りにくい場合でもあったし、それに人形芝居はとにかく、あの老人に付き合つてゆっくり話をするような機会が、ひよつとしたらもうこれつきり来ないであろうとも思えたからだつた。鹿ヶ谷ししたにの方に隠居所を作つて茶人じみた生活をしている六十近い年寄りとは、もちろん趣味が合う訳もなし、何かにつけてうるさく通つうを振りまかれるのにはいつも閉口するのだけれど、若い時に散々遊んだ人だけあつて何処か洒落しゃらくな、からつとしたところのあるのが、もうその人とも親子の縁が切れるかと思えばさすがになつかしく、少し皮肉な云い方をすれば、妻よりもむしろこの老人に名残りなごが惜しまれて、せめて夫婦でいる間に一ぺんぐらいは親孝行をしておいてもと、柄にないことを考えたのだが、しかし独断で承知したのは手落ちと云えば手落ちである。いつもの彼なら妻の都合と云うことに気が廻らない筈はずはないのである。ゆうべも勿論もちろんそれを思いはしたけれども、実は夕方、「ちよつと神戸まで買い物に」といつて彼女が出かけて行つたのを、恐らく阿曾に会いに行つたものと推すしていた。ちようど老人から電話がかかった時分には、妻と阿曾とが腕を組み合つて須磨の海岸をぶらついている影絵が彼の脳裡のうりに描かれていたので、「今夜会っているのなら明日は差支さしつかえないであろう」と、ふとそう思つた訳なのであつた。妻は従来かくし立て

をしたことはなかったから、ゆうべは事実買い物に行ったのかも知れない。それをそうでなく取ったのは彼の邪推であつたかも知れない。彼女はうそをつくことは嫌きらいであるし、又うそをつく必要はないにきまつているのだから。が、夫に取つて決して愉快でない筈のことをそうハツキリと云うまでもないから、「神戸へ買い物に行く」という言葉の裏に「阿曾に会いに行く」と云う意味が含まれていたものと解釈したのは、彼の立ち場からは自然であつて、悪く感ぐつた訳ではなかった。妻の方でも要が邪推や意地悪をしたのでないことは分つてゐるに違いなかつた。或あるは彼女は、ゆうべも会うことは会つてゐるのだが、今日も会いたいののであるかも知れない。最初は十日置き、一週間置きぐらいたつたのが、近頃はひんぱん頻繁になつて、二日も三日もつづけて会うことが珍しくないのであるから。

「あなたはどうかの、御覧になりたいの？」

要は妻が這入つたあとの風呂へ漬つかつて、湯上りの肌はだへバスローブを引っかけながら十分ばかりで戻つて来たが、美佐子はその時もぼんやり空くうを見張つたまま機械的に爪をこすつていた。彼女は縁側に立ちながら手鏡で髪をさばいてゐる夫の方へは眼をやらずに、三角に切られた左の拇おやゆび指の爪の、ぴかぴか光る尖せん端を間近く鼻先へ寄せながら云つた。

「僕もあんまり見たくはないんだが、見たいツて云つちまつたんでね。………」

「いつ？」

「いつだったか、そう云ったことがあるんだよ。ひどく熱心に人形芝居を讃美するもんだから、つい老人を喜ばすつもりで合い槌づちを打ってしまったんだ」

「ふふ」

と彼女は、あかの他人に対するようなあいそ笑いを笑った。

「そんなことを仰おつしやるから悪いんじゃないの。いつもお父さんに付き合ったことなんかない癖に」

「まあとにかく、ちょっとだけでも行つた方がいいんだけれどな」

「文樂座つて一体どこなの？」

「文樂座じゃあないんだよ。文樂座は焼けちまつたんで、道頓堀の弁天座という小屋なんだそうだ」

「それじゃどうせ据わるんでしよう？ 敵かなわないわ、あたし、——あとで膝が痛くなつちまうわ」

「そりやあ茶人の行くところだから仕方がないやね。——お前のお父さんも先せんにはあんなじゃあなかったし、活動写真が好きだった時代もあったんだが、だんだん年を取るに連

れて趣味が皮肉になつて行くんだね。この間或る所で聞いたんだが、若い時分に女遊びをした人間ほど、老人になるときまつて骨董好きになる。書画だの茶器だのをいじくるのはつまり性慾<sup>せいよく</sup>の変形だと云うんだ」

「でもお父さんは性慾の方もまだ変形していないんじゃないの。今日だつてお久が附いているでしょう」

「ああ云う女を好くというのがやつぱりいくらか骨董趣味だよ。あれはまるで人形のような女だからな」

「行けばきつとアテられてよ」

「仕方がない、それも親孝行だと思つて、一時間か二時間アテられに行くさ」

ふと要は、妻が何となく出洩るのは外に理由があるんじゃないのかな、とその時感じたが、「では今日は和服になさる？」

と、彼女は立つて、箆<sup>たんす</sup>の抽出<sup>ひきだ</sup>しから、たとうに包まつた幾組かの夫の衣類を取り出すのであつた。

着物にかけては要も妻に負けない程の贅<sup>ぜいたく</sup>沢屋で、この羽織にはこの着物にこの帯と云う風に幾通りとなく揃<sup>そろ</sup>えてあつて、それが細かい物にまでも、——時計とか、鎖とか、羽

織の紐ひもとか、シガーケースとか、財布とか、そんな物にまでおよんでいた。それを一々呑み込んでいて、「あれ」と云えば直ぐその一と紐を揃えることの出来るものは美佐子より外にないのであるから、この頃のように夫を置いて一人で外へ出がちの彼女は、出かける時に夫のために衣類を揃えて行くことが多かった。要に取って現在の妻が實際妻らしい役目をし、彼女でなければならぬ必要を覚えるのは、ただこの場合だけであるので、そう云う時にいつでも彼は変にちぐはぐな思いをした。殊ことに今日のように、うしろから襦じゆばん袢はんを着せてくれたり、襟えりを直してくれたりと、自分たち夫婦と云うものの随分不思議な矛盾した関係が、はつきり感ぜられるのであった。誰がこう云う場面を見たら、自分たちを夫婦でないと思うであろう。現に家にいる小間使にしても下女にしても、夢にも疑つてはいないであろう。彼自身ですら、こうして下着や足袋たびの面倒までも見て貰もらっている自分を顧みれば、これでどうして夫婦でないのかと云うような気がする。何も閨房けいぼうの語らばかりが夫婦を成り立たせているのではない。一夜妻ならば要は過去に多くの女を知っている。が、こういう細かい身の周りの世話や心づくしの間にこそ夫婦らしさが存するのではないか。これが夫婦の本来の姿ではないのか。そうしてみれば、彼は彼女に不足を感じる何ものもないのである。……………

両手を腰の上へ廻してつづれの帯を結びながら、彼はしゃがんでいる妻の襟足を見た。妻の膝の上には彼が好んで着るところの黒八丈の無双の羽織がひろがっていた。妻はその羽織へ刀の下げ緒の模様に染めた平打ちの紐を着けようとして、毛ピンの脚を乳へ通しているのである。彼女の白いてのひらは、それが握っている細い毛ピンをひとすじの黒さにくつきりと際立たせていた。研ぎ立ての光沢のいい爪が、指頭と指頭のカチ合う毎に尖った先をキキと甲斐絹のように鳴らした。長い間の習慣で夫の気持を鋭く反射する彼女は、自分も同じ感傷に惹き込まれるのを恐れるかのように殊更隙間なく身を動かして、妻たるもののなすべき仕事をさつさと手際よく、事務的に運んでいるのであるが、それだけに要は、彼女と視線を合わせることなく余所ながら名残りを惜しむ心で偷み視ることが出来るのであった。立っている彼には襟足の奥の背すじが見えた。肌襦袢の蔭に包まれている豊かな肩のふくらみが見えた。畳の上を膝でずっている裾さばきの袴の下から、東京好みの木型のような堅い白足袋をぴちりと簞めた足頸が一寸ばかり見えた。そう云う風にちらと眼に触れる肉体のところどころは、三十に近い歳のわりには若くもあり水々しくもあり、これが他人の妻であつたら彼とても美しいと感ずるであらう。今でも彼はこの肉体を嘗て夜な夜なそうしたように抱きしめてやりたい親切はある。ただ悲しいのは、彼に取つては

それが殆ど結婚の最初から性慾的に何等の魅力もないことだった。そうして今の水々しさも若々しさも、実は彼女に数年の間後家と同じ生活をさせた必然の結果であることを思うと、哀れと云うよりは不思議な寒気を覚えるのであった。

「ほんとうに今日は——」

そう云いながら美佐子は立つて、羽織を着せるために夫の背中の方へ廻った。

「——いいお天気じゃありませんか。芝居なんぞには勿体ないくらいだわ」

要は二三度彼女の指が項のあたりをかすめたのを感じたが、その肌触りにはまるで理髪師の指のような職業的な冷めたさしかなかった。

「お前、電話をかけて置かなくってもいいのかね？」

と、彼は妻の言葉の裏を尋ねた。

「ええ、………」

「かけてお置きよ、でないと僕も気が済まないから、………」

「それにも及ばないんだけれど、………」

「しかし、………待っていると悪いじゃないか」

「そうね、——」

彼女はちよつとためらつてから云つた。

「——何時頃に帰れますかしら？」

「今から行けば、仮りに一と幕だけとしても五時か六時にはなるだろうな」

「それからじゃあんまり遅いでしょうか？」

「そんなことは差支えないが、何しろ今日はお父さんの都合でどうなるか分りやしないぜ。一緒に晩飯を付き合えとでも云われたら断る訳にも行かないし、……ま、明日にした方が間違いないよ」

そう云っている時、小間使いのお小夜さよが襖ふすまを開けた。

「あもう、須磨から奥様にお電話でございます」

## その二

電話口の話は三十分もかかったけれども、それでも漸ようやく須磨の方は明日にすると云うことになって、一層浮かぬ顔つきをしながら、彼女が夫と珍しく連れ立って出たのは、もう二時半を過ぎた頃だった。

たまに日曜の折などに、小学校の四年へ行っている弘ひろしを中に挟はさみながら、親子三人で出かけることはないでもないが、それは近頃、うすうす父と母との間に何事かが醸かもされつつあるのを感じたいらしい子供の恐怖を取り除のけるためで、今日のように夫婦が二人で出歩くことはほんとうにもう幾月ぶりか分らなかつた。弘が学校から歸つて来て、父と母とが手を携えて出たことを聞いたなら、自分が置いて行かれたのを淋さびしがるよりも、実はどんなに喜ぶであろう。——しかし要かなめは、それが子供にいい事だか悪い事だか判断に迷つた。ぜんたい「子供々々」と云うが、既に十歳以上になれば、氣の廻り方は格別大人と變つたこととはないのである。彼は美佐子が、「外の者は氣が附かないのに、弘は知っているらしいんですよ、とても敏感なんですから」と云つたりするのを、「そんなことは子供としては当り前だよ。それを感じするなんかは親馬鹿と云うもんだ」と、そう云つて笑うのが常であつた。それ故ゆゑ彼は、いざと云う時は大人に対すると同じように、すべての事情を子供に打ち明ける覺悟をしていた。父も母も、孰どっち方が悪いと云うのではない、もしも悪いと云う者があれば、それは現代に通用しない古い道德に囚とらわれた見方だ、これからの子供はそんなことを耻はじてはいけない、父と母とがどうなろうともお前は永久に二人の子だ、そうしていつでも好きな時に父の家へも母の家へも行くことが出来る、——彼はそう云う風に

話して子供の理性に訴えるつもりでいた。それを子供が聴き分けない筈はないと思った。子供だからと云つていい加減なうそをつくのは、大人を欺くあざむのと同じ罪悪だと考えていた。ただ万一にも別れないで済む場合が想像せられるし、別れるとしてもまだその時機がきまつたと云う訳ではないので、成るべくならば余計な心配をさせたくない、話はいつでも出来るのだからと、そう思い思いつい延び延びになっている結果は、やはり子供を安心させたさに惹き擦ひずられて、喜ぶ顔が見たいために妻と馴れ合ないで睦むつましい風を装うこともあるのである。しかし子供は子供の方で、二人が馴れ合ないで芝居をしていることまでも感づいていて、なかなか気を許してはいないらしい。うわべはいかにも嬉しそうにして見せるけれども、それも事に依ると親たちの苦慮を察して、子供の方があべこべに二人を安心させようと努めているのかも知れない。子供の本能と云うものはそう云う時に案外深い洞察力を働かすもののように思える。だから要は親子三人で散策に出ると、父は父、母は母、子は子と云う風に、三人が三人ながらバラバラな氣持を隠しつつ心にもない笑顔を作っている状態に、我から慄りっぜん然とすることがあった。つまり三人はもうお互に欺かれぬ、夫婦の馴れ合いが今では親子の馴れ合いになり、三人で世間を欺いている。——なんで子供にまでそんな真似まねをさせなければならぬのか、それが彼にはひとしお罪深く、不憫ふびんに感ぜ

られるのであった。

彼はもちろん自分たちの夫婦関係を新道德の先驅者のような態度を以て社会へ触れ廻る勇氣はなかつた。自分の行っていることには多少の恃むところもあり、良心に耻じる点はないのであるから、まさかの場合は敢然として反抗しないものでもないが、そうかと云つて、強いて自分を不利な立ち場に置きたくはなかつた。父の代ほどではないにもせよまだ幾らかの資産もあり、名義だけでも会社の重役という地位もあり、かつかつながら有閑階級の一員として暮して行くことの出来る身として、なるべくならば社会の隅に小さく、つつましく、あまり人目に立たないように、そして先祖の位牌にも傷をつけないようにして安穩に生きて行きたかつた。仮りに自分は親戚なぞの干渉を恐れるところはないにしても、自分より一層誤解され易い妻の立ち場を庇つてやらなければ、結局夫婦は身動きが取れなくなる。たとえばこの頃の妻の行為があまりのままに京都の父親にでも知れたら、いかに物分りのいい老人でも世間の手まえ娘の不埒を許しては置けないであろう。もしそうなれば彼女は要と別れたとしても、思い通りに阿曾の所へ行けるかどうか疑問である。「親や親類の圧迫なんかあたしちつとも恐くはないわ、みんなに義絶されたって構わない積りであるんですから」と、いつもはそう云っているけれども、事実そんなことが出来るかどうか

か。彼女について事前に悪い噂<sup>うわさ</sup>が立てば、阿曾の方にも親や兄弟がある以上、そう云う方面からの故障も予想せられた。そればかりでなく、母が日蔭者のようになっては、それが子供の将来に及ぼす影響も考えなければならない。要はいろいろの事情を思うと、別れた後にも互が幸福に行けるようにするには、余程上手に周囲の人たちの理解を求める必要がある。平素から用心深く世間に気取られないようにしていた。夫婦はそのために少しずつ交際の範囲を狭くし、努めて牆<sup>かき</sup>の内を覗<sup>のぞ</sup>かれないようににさえした。が、それでも矢張対社会的に夫婦らしさを装わなければならない場合が生じて来ると、いつもあんまり好い心持はしなかったのであった。

思うに美佐子がさつきから変に出洩<sup>い</sup>つていたのも、一つはそれが厭<sup>いや</sup>なのであろう。気の弱い性質なのではあるが、何処か奥の方に力チリと堅<sup>しん</sup>い芯<sup>しん</sup>を持っている彼女は、古い習慣とか、義理とか、情実とか、そう云うものに対してはむしろ要よりも勇敢であつた。彼女は夫と子供のために出来るだけ慎<sup>しん</sup>んではいるものの、しかも今日のような時に進んで人の前へ出てまで芝居をするには及ばないと云う風な、かすかな不平を抱<sup>いだ</sup>いているに違いなかった。なぜなら彼女にしてみれば己<sup>おのれ</sup>を欺<sup>おご</sup>き世を欺<sup>おご</sup>くのが不愉快であるばかりでなく、阿曾の感情をも考えなければならぬからだった。阿曾も事情は認めているにしろ、彼女が夫

と道頓堀へ出かけたと聞いたらとにかく愉快である筈はない。真しんに己やむを得ない場合の外は、そう云うことは遠慮して欲しいに違いない。夫はそこまでの思いやりがないのか、察していてもそんなことにまで気がねをしてはいられないと云う腹なのか、そうとはつきり口へ出しては云えないだけに彼女はもどかしく感ずるのであつた。夫は何故に今ごろになつて老人の機嫌を取ろうとするのか。彼女の父が夫に取つても永久に父であり得るならば知らぬこと、もう近ちか々ぢかに「父」と呼ぶことも出来なくなるのに、それを今更附き合つたところで無益ではないか。なまじ孝行の真似などをすれば後で事実が知れた時に一層怒らせるようなものではないか。

夫婦はそんなふうに別々の心を抱いて阪急の豊中から梅田行きの電車に乗った。三月末の彼岸ひがんがほころびがくらくが綻ほころびそめる時分のこと、きらきらしい日ざしの底にまだ何処となく肌寒さを感じられたが、要はうすい春外がいとう套たもとの袂の外へこぼれている黒八丈の羽織きじの生地が、窓の明りで干潟ひがたの沙すなのように光るのを見た。和服の時は寒中でもシャツを着けないのを身だしなみの一つにしている彼は、長襦袢の裏と皮膚とのあわいに清涼な風の孕はらむのを覚えながら内ぶところへ両手を入れていた。車の中は時間が半ばであるせいか疎まばらな客がめいめいゆつくりと席を取り、真新しい白ペンキの天井の下は空気が隅まで透き徹とおつていて、並

んでいる人たちの顔までが皆健康そうに、朗らかに明るい。美佐子はそれらの顔の中にわざと夫と向い側にかけて鼻のあたまを毛皮の襟巻のふかふかとした中へ埋める程にして、縮刷本の水沫集みなわを読んでいるのである。買い立ての白クロースの、ブリキのようにピンと尖った表紙の背を掴つかんでいる指には綱目に編んだサファイア色の絹の手袋が簾はまっていて、こまかい網の目の隙間すきまから、研みがかれた爪がチラチラと覗のぞいていた。

電車の中で彼女がこう云う位置を取るのは、それが殆ど二人で外出する時の習慣のようになつていた。子供がいればその右左へかけるけれども、そうでなかったら大概の場合、一人が腰をおろすのを待つて一人が反対の側の方へ席を求める。夫婦は互に衣きぬを隔はてて体温を感じ合うことが窮屈であるばかりでなく、今では寧ろむししてはならないことのように、不道德なようにさえ思ふのである。そして一つの車室のうちに向い合つて置かれるだけでも相手の顔が邪魔になるので、美佐子はいつも眼の向けどころを作るために何かしら読む物を用意していて、席がきまると直ぐに自分の鼻先へ屏風びょうぶを立ててしまうのである。二人は梅田の終点で降りて別々に持つている回数券を渡して、申し合わせたように二三歩離れて歩きながら駅の前の広場へ出ると、夫が先に、妻がその後から黙つてタキシーの箱の中へ収まつて、始めて夫婦らしく肩を並べた。もし第三者が四つのガラス窓の中に閉じ込め

られた彼等を見たなら、二つの横顔が額と額と、鼻と鼻と、頤あごと頤とを押絵のように重なり合わせて双方が脇眼をふることなく、じつと正面を切ったままで車に揺られつつ行くさまに氣づいたであろう。

「何をやっているんですの、一体？」

「ゆうべの電話では小春治兵衛こはるじへえと、それから何だとか云っていたつけが、……」

互に長い沈黙に押し出されたような工合に、一と言ずつ口をきいた。けれども矢張正面を切ったままだった。妻には夫の、夫には妻の、鼻の頭あたまだけが灰白ほのしろく映った。

弁天座のありかを知らない美佐子は、戎橋えびすばしで乗り物を捨ててから再び黙って附いて行

くより外はなかったが、夫は電話で委くわしく教わったものと見えて、道頓堀のとある芝居茶屋を訪ねて、そこから仲居に送られて行くのである。いよいよ父の前へ出て妻の役目をしなければならぬ、そう思うと彼女は一層気が重くなった。土間へ陣取って娘よりも若いお久を相手に、杯のふちをなめては舞台の方を見入っている年寄りの姿が眼に浮かんだ。

父もうつとうしいけれども、それよりお久がいやであった。京都生れの、おっとりとした、何を云われても「へいへい」云っている魂のないような女であるのが、東京ッ児の彼女と肌が合わないせいもあるであろう。が、お久と云うものを傍そばへ置くとき、父が何だか父ら

しくなく、浅ましい爺じいのように見えて来るのがこの上もなく不愉快なのである。

「あたし一と幕だけ見たら帰るわよ」

と、彼女は木戸口を這入はいりながら、そこまでびんびんと響いて来る時代後おくれな太棹ふしざおの余韻に反抗するような氣持で云った。

茶屋の女に送られて芝居小屋へ来ると云うことが、既に何年ぶりであろう。要は下駄を脱ぎ捨てて足袋の底に冷めたい廊下のすべすべした板を踏ふんだとき、一瞬間遠い昔の母のおもかげが心をかすめた。蔵前くらまえの家から俤くるまの上を母の膝に乗せられて木挽町こびきちやうへ行つた五つか六つの頃、茶屋から母に手を曳ひかれて福草履を突っかけながら、歌舞伎座の廊下へ上るときがちようどこんな工合であつた。子供の彼は矢張足袋の底に冷めたい板の間を踏んだ。そう云えば旧式の芝居小屋は木戸口をくぐつた時の空氣が妙に肌寒い。いつも晴れ着の裾たもとや袂たもとからすうツと風が薄荷はつかのように体へ沁しみたのを未だに記憶いましているが、その肌寒さはあたかも梅見頃の陽氣の爽さわやかさに似てぞくぞくしながらもこちよく、「もう幕が開いているんですよ」と母に促がされて小さな胸をときめかせつつ走つて行つたものであつた。

けれども今日の寒さばかりは廊下よりも客席の方がひとしおで、夫婦は花道を伝つて行く

ときに何とは知らずに手足が引き締まるような気がした。見わたしたところ、小屋は相当の広さであるのに四分通りしか入りがないので、場内の空気は街頭を流れるすうすうした風と変りがなく、舞台に動いている人形までが首をちぢめて、淋しく、あじきなく、見るから哀れに、それが太夫の沈んだ声と三絃の音色とに不思議な調和を保っていた。殆ど平土間の三分の二まではガラ空きになつていてほんの舞台に近い方に人がかたまっている中に、顚頂部の禿げた老人の頭とつやつやしいお久の円髻とが遠くの方から眼についていたが、渡りを渡つて降りて来る二人にお久はそれと心づくつと、

「お越しやす」

と小声で云いながら居ずまいを直して、場を塞いでいる蒔絵の提げ重を、一つ一つ丁寧に積み重ねて自分の膝の前に寄せた。

「お越しやすたえ」

美佐子のために老人の右の席をあけて、自分ほうに畏まつているお久は、そう云つて耳打ちをしたけれども、老人はちよつと振り返つて、

「やあ」

と云つたきり、一心に舞台の方へ首を伸べていた。何と云う色か、緑系統には違いないが、

ちようど人形の衣裳のように派手で渋いところのある色合いの、昔の人が十徳にでも着  
 そうな石摺りの羽織をぼつてりと着込んで、風通大嶋の衿の下に黄八丈の下着を見せ、  
 袂の中から升のしきりへ肘をついている左の腕をそのまま背中へ廻しているのです、自然と  
 抜き衣紋になつてゐるためか猫背が一層円々と見える、——着附と云い、姿勢と云い、  
 そう云う爺臭い風をするのがこの老人の好みであつて、「老人は老人らしく」と云うの  
 を口癖のようにしてゐるのである。思うにこの羽織の色合いなども「五十を過ぎたら派手  
 なものを着る方が却つてふけて見える」と云う信条を、実行してゐるつもりなのであらう。  
 要が常に滑稽に感じるのは、「老人々々」と云うもののこの父親はまだそれほど歳で  
 はない、二十五とかに結婚して、今は亡くなつたその連れ合いが長女の美佐子を生んだと  
 すると、恐らく五十六より取つてはいない筈である。父の性慾はまだ変形してゐないと  
 云う美佐子の観察はそれを裏書きするもので、「お前のお父さんの老人ぶるのは、あれは  
 一つの趣味なんだよ」と、彼もかねがね云つてゐるのである。

「奥様、おみあが痛いことおへんか？　どうぞ此方へお出しやして、……」

気のいいお久は窮屈な升の中でまめまめしく茶を入れたり、菓子をすすめたり、何を云つ  
 ても振り向きもしない美佐子を相手にときどき話しかけたりして、その合い間には、うし

ろへ右の腕を伸ばして煙草盆の角に載せられた杯のふちへ手をかけている老人に、なくなる頃を見はからつてはそうつと酒を注いでやっている。老人は近頃「酒は塗り物に限る」と云い出して、その杯も朱塗りに東海道五十三次の蒔絵のある三つ組のうちの一つであった。御殿女中が花見にでも行くようにこう云うものを研ぎ出しの提げ重の抽出しへ入れて、飲み物から摘まみ物までわざわざ京都から運んで来るのでは、茶屋に取っても有り難くない客であろうが、お久もずいぶん氣骨が折れるに違いあるまい。

「お一つどうぞす？」

そう云つて彼女は、新たに抽出しから出した杯を要にさした。

「有り難う、僕は昼間は飲まないんだが、………外套を脱いだら何だかうすら寒いから、少うしばかり戴きましよう」

髪のおか、何か分らないが、忍びやかな丁子ちようじのにおいに似たものが、彼女の鬢びんの毛と共にかすかに彼の頬ほおにさわった。彼は己れの手の中にある杯の、なみなみと湛たたえた液体の底に金色に盛り上っている富士の絵を視詰めた。富士の下には広重ひろしげ風の町の景色の密画があつて、横に「沼津」と記してある。

「これで飲んだら、品ひんが好すぎて頼りないような気がしますね」

「そうどすやろ」

彼女が笑うと、京都の女が愛らしいものの一つに数える茄子なすび歯が見えた。二枚の門歯の根の方が鉄漿かたねを染めたやうに黒く、右の犬歯の上に八重歯が一つ、上唇うわくちびるの裏へ引つかかるほどに尖つていて、それをあどけないと云う人もあろうが、公平に云えば決して美しい口もとではない。不潔で野蛮な感じがすると云う美佐子の批評も酷だけれども、そう云う非衛生的な歯を治療しようもしないところに無智な女の哀れさがあつた。

「この御馳走は家から拵こしらえて来るんですか」

要は彼女が小皿の上へ取つてくれる玉子焼の海苔巻のりまきをつまみながら云つた。

「そうどす」

「こんな重箱を提げて来るんじや大変だな、又帰りにはこいつを持って行くんですか」

「そうどす、芝居のものは味のうてよう食べんお云やすよって、……………」

美佐子がちらと二人の方を振り返つたが、すぐまた顔を舞台に向けた。

要はさつきから、彼女がときどき足を伸ばしては、足袋の先が夫の膝頭に触れると急いでそれを引っ込めるのに気が付いて、こう云う狭い升の中に入れられた自分たち夫婦の目を忍ぶ心づかいを、ひそかに自ら苦笑しないではいられなかった。彼はその氣持まぎを紛らす

ために、

「どうだい、面白いかい？」

と、うしろから妻に声をかけた。

「いつつも面白いものをたんと見ておいでやすよって、たまには人形もよろしおすやろ」  
 「あたしさつきから義太夫語りの顔つきばかり見ているの、あの方がよっぽど面白いわ」  
 その話ごえが耳につくらしく、

「えへん」

と、老人が咳せき払いばらした。そして眼だけは舞台から放さずに、手さぐりで膝の下敷きになつた猿手さるでの金唐革きんからかわの煙草入れを捜しあてたが、煙管きせるのありが分らないでしきりにその辺を間さぐつてゐるのを、気がついたお久が座布団ざぶとんの下から見つけ出して、火をつけてから手のひらの上へ載せてやつて、自分も思い出したように帯の間にある紅い琥珀こはくの吠かますを抜き取ると、こはぜの附いた蓋ふたの下へ白い小さな手の甲を入れた。

成るほど、人形浄瑠璃じようるりと云うものは妾めかけの傍そばで酒を飲みながら見るもんだな。——要はみんなが黙り込んでしまったあと、ひとりそんなことを考えながら仕様ことなしに舞台上の上の「河庄」の場へ、ほんのりと微醺びくんを帯びた眼を向けていた。普通の猪口ちよくよりやや大ぶ

りな杯に一杯傾けたのが利<sup>き</sup>いて来て、少しちらちらするせいか、舞台がずっと遠いところ  
 にあるように感ぜられ、人形の顔や衣裳の柄を見定めるのに骨が折れる。彼はじい<sup>ひとみ</sup>つと瞳  
 を凝らして、上手にすわっている小春を眺めた。治兵衛の顔にも能の面に似た一種の味わ  
 いはあるけれども、立って動いている人形は、長い胴の下に両脚がぶらんぶらんしている  
 のが見馴れない者には親しみにくく、何もしないでうつむいている小春の姿が一番うつく  
 しい。不釣<sup>ふつり</sup>合いに太<sup>ふ</sup>に着物の袖<sup>そで</sup>が、すわっていながら膝の前へ垂れているのが不自然であ  
 るが、それは間もなく忘れられた。老人はこの人形をダークの操<sup>あやつ</sup>りに比較して、西洋のや  
 り方は宙に吊<sup>つ</sup>っているのだから腰がきまらない、手足が動くことは動いても生きた人間の  
 それらしい弾力やねばりがなく、従って着物の下に筋肉が張り切っている感じがない。文  
 楽の方のは、人形使いの手がそのまま人形の胴へ這<sup>はい</sup>入っているのです、真に人間の筋肉が衣  
 裳の中で生きて波打っているのである。これは日本の着物の様式を巧みに利用したもので、  
 西洋でこのやり方を真<sup>ま</sup>似<sup>ね</sup>ようにも洋服の人形では応用の道がない。だから文楽のは独得で  
 あって、このくらいよく考えてあるものはないと云うのだが、そう云えばそうに違いない。  
 立って激しく活動をする人形がへんに不恰<sup>ぶかつこう</sup>好<sup>こう</sup>なのは、そうすると下半身が宙に浮くこと  
 を防ぎきれないで、いくらかダークの操りの弊に陥るからであろう。老人の議論を押し詰

めて行くと、矢張据わっている時の方がねばりの感じが表わせる訳で、動くとしても肩でかすかな息をするとか、ほのかなしなを作るとか、ほんの僅かに動くしぐさが却って不気味なくらいにまで生き生きとしている。要は番附けを手にとって、小春を使っている人形使いの名を搜した。そうしてこれがその道の人に名人と云われている文五郎であるのを知った。そう思つて見ると、いかにも柔和な、品のいい、名人らしい相をしている。絶えず落ち着きのあるほほえみを浮かべて、我が児をいつくしむような慈愛のこもったまなざしを手を抱いている人形の髪かたちに送りながら、自分の芸を楽しんでいる風があるのは、そぞろにこの老芸人の境涯の羨ましさを覚えさせる。要はふとピーターパンの映画の中で見たフェアリーを想い出した。小春はちようど、人間の姿を備えて人間よりはずっと小さいあのフェアリーの一種で、それが肩衣を着た文五郎の腕に留まっているのであつた。「僕には義太夫は分らないが、小春の形はいいですな」

——半分ひとりごつのように云つたのが、お久には聞えた筈だけれど、誰も合い槌を打つ者もない。視力をはつきりさせるために要はたびたび眼ばたきをしたが、一としきり身の内のぬくまった酔いがだんだん醒めて来るにつれて、小春の顔が次第に刻明な輪廓を取つて映つた。彼女は左の手を内ぶところへ、右の手を火鉢にかざしながら、襟の間へ頤

を落して物思いに沈んだ姿のまま、もうさつきからかなりの時間をじつと身動きもしないのである。それを根気よく視つめてみると、人形使いもしまいには眼に入らなくなつて、小春は今や文五郎の手に抱かれてゐるフェアリーではなく、すっかり畳に腰を据えて生きていた。だがそれにしても、俳優が扮<sup>ふん</sup>する感じとも違う。梅幸や福助のはいくら巧くても「梅幸だな」「福助だな」と云う氣がするのに、この小春は純粹に小春以外の何者でもない。俳優のような表情のないのが物足りないと言えば云うものの、思うに昔の遊里の女は芝居でやるような著しい喜怒哀樂を色に出しはしなかつたであらう。元<sup>げん</sup>禄<sup>ろく</sup>の時代に生きていた小春は恐らく「人形のような女」であつたらう。事實はそうでないとしても、とにかく浄瑠璃を聴きに來る人たちの夢みる小春は梅幸や福助のそれではなくて、この人形の姿である。昔の人の理想とする美人は、容易に個性をあらわさない、慎しみ深い女であつたのに違いないから、この人形でいい訳なので、これ以上に特長があつては寧ろ<sup>むし</sup>妨げになるかも知れない。昔の人は小春も梅<sup>うめ</sup>川<sup>がわ</sup>も三<sup>さん</sup>勝<sup>かつ</sup>もおしゆんも皆同じ顔に考えていたかも知れない。つまりこの人形の小春こそ日本人の伝統の中にある「永遠女性」のおもかげではないのか。……………

十年ほど前に御<sup>ご</sup>霊<sup>りょう</sup>の文樂座を覗いた時には何の興味も湧<sup>わ</sup>かなかつた要は、ただその折に

ひどく退屈した記憶ばかりが残っていたので、今日は始めから期待するところもなく義理で見物に來たのであるのに、知らず識<sup>し</sup>らず舞台の世界へ惹き込まれて行く自分を見ることは意外であつた。十年のあいだにやつぱり歳を取つたんだなど、思はずにはいられなかつた。この調子だと京都の老人の茶人ぶりも馬鹿には出来ない。更に十年も立つうちには自分もそつくりこの老人の歩んだ道を辿<sup>たど</sup>るようになるのではないか。そしてお久のような妾を置いて、腰に金<sup>きん</sup>唐<sup>から</sup>革<sup>かわ</sup>の煙草入れを提げ、蒔絵の弁当箱を持つて芝居見物に來るようなふうに、……いや事に依ると十年を待たないかも知れない。自分は若い時分から老成ぶる癖があつたから、人一倍早く年を取る傾向があるのだ。——要は下<sup>しも</sup>膨<sup>も</sup>れ<sup>ぶく</sup>の頬を見せているお久の横<sup>よこ</sup>鬢<sup>びん</sup>と、舞台の小春とを等分に眺めた。いつもは眠いような、ものうげな顔の持ち主であるお久の何処やらに小春と共通なもののあるのが感ぜられた。同時に彼の胸の中に矛盾した二つの情緒がせめいだ、——老境に入ることは必ずしも悲しくはない、老境には老境でおのずからなる楽しみがある、と云う氣持と、そんなことを考えるのが既に老境に入ろうとする兆<sup>きざし</sup>だ、夫婦別れをしようと云うのは、自分も美佐子ももう一度自由に復<sup>かえ</sup>つて、青春を生きようためではないのか、今の自分は妻への意地でも年を取つてはならない場合だ、と云う氣持と。——

## その三

「ゆうべはわざわざ電話を戴きまして有り難う存じました。……………」

幕あいになるとぐると此方こつちへ向きを変えた老人に、要は改めて挨拶あいさつしながら、

「お蔭さまで今日はまことに面白うございます。全くお世辞でなく、いい所がありますな」

「私が人形使いじゃあないからお世辞を云われる事はないがね」

と、老人は女物の古裂こぎれで作った色のさめたお納戸なんどちりめん縮緬えりまきの襟えりまき卷の中へ寒そうに首をちぢ

めて、やに下った形で云った。

「まあ、あなたがたを誘つてもどうせ退屈だろうけれど、しかし一遍は見えて置くといいと思つたんで、……………」

「いいえ、なかなか面白いですよ、この前見た時とはまるで感じが違うんで、非常に思いの外なんです」

「もうお前さん、今あの治兵衛だの小春だのを使った大頭株おおあたまかぶの人形使いがいなくなつたら、どうなるか分りやしないんだから、……………」

美佐子はそろそろお談義が初まったと云うように下唇で薄笑いを嚙みしめながら、てのひらの間にコムパクトを隠してパツフで鼻をたたいていた。

「こう入りがないのは気の毒なようですが、日曜や土曜にはまさかこんなでもないんでしょうか」

「なあに、いつでもこんなもん、………これで今日きょうらは来ている方です。ぜんたいこの小屋じゃあ広過ぎるんで、先の文楽座せんぐらいの方が、小ぢんまりしていいんだけど、………

………」

「あれは再築を許可されないらしいですね、新聞で見ますと」

「それより何より、この客足じゃあ引き合わないから松竹が金を出しやあしない。こんな物こそむずかしく云うと大阪の郷土芸術なんだから、誰か篤志家が出て来なけりやあならないんだが」

「どう、お父さんがお出しになったら？」

と、横あいから美佐子が交まぜつ返した。老人は真顔で受けながら、

「私は大阪人じゃあないから、………これはやつぱり大阪人の義務だと思うよ」

「でも大阪の芸術に感心していらつしやるんじゃないの？ まあ大阪に降参しちやつたよ

うなもんだわ」

「お前はそうすると西洋音楽に降参の口かね？」

「そうとも限らないんだけど、あたし義太夫と云うものはイヤなの、騒々しくつて。――」

「騒々しいと云やあこの間或る所で聴いたんだが、あのジャズ・バンドと云うものは、あ  
りやあ何だい？　まるで西洋の馬鹿ばや囃しだが、あんなものが流行はやるなんて、あれなら昔か  
ら日本にもある。――テケレッテ、テットンドンと云う、つまりあれだ」

「きつと低級な活動小屋のジャズでもお聴きになったんじゃないの」

「あれにも高級があるのかい？」

「あるわ、そりやあ、……ジャズだつて馬鹿になりやしないわ」

「どうも今時の若い者のすることは分らんよ。第一女が身だしなみの法を知らない。たと  
えばお前のその手の中にあるのは、そりやあ何というもんだね」

「これ？　これはコムパクトというもんよ」

「近頃それが流行はやるのはいいが、人中でも何でも構わずそれを開けて見ては顔を直すんだ  
から、ちつとも奥床しさというものがない、お久もそいつを持っていたんでこの間叱しかつて

やったんだがね」

「でもこれは便利なもんよ」

と美佐子はわざと悠々<sup>ゆうゆう</sup>と明るい方へ小さな鏡を向けながら、キッス・プルーフを唇へあてて丹念に紅を引いた。

「それ、その恰好がよくないよ。堅儀な娘や女房はそう云う形を人前で見せなかったものだがね」

「今は誰でも見せるんだから仕方がないわ。わたしの知っている奥様で、会の時にテーブルへ着いてからきつとコムパクトを持ち出すんで有名な人があるくらいだわ。お皿が眼の前に出ているのを其方<sup>そっちの</sup>除けにして顔を直しているもんだから、その人のお蔭でコースがちつとも<sup>はかど</sup>捗らないの、あんなられても極端だけれど」

「誰だい、それは？」

と、要がきいた。

「中川さんの奥様、——あなたの知らない方」

「お久、ちよつとこの火を見ておくれ。——」

と、老人は下腹から懷炉<sup>かいろ</sup>の包みを取り出して、

「小屋が広いのに入りがないせいかな、どうも冷えてかなわない」

と、つぶやくように云った。お久が懐炉灰の火を直すので、手が塞がっている隙に、要は氣を利かして、

「いかがです、胃袋の方へもう少し懐炉をお入れになったら」

と、これも御持参の錫すずの銚ちようし子を取り上げて云った。

舞台の方ではもう次の幕が開きそうないなのに、夫がのんきらしく、キツカケを作ってくれないので、美佐子はさつきからじりじりしてゐた。出がけに須磨から電話があつたとき、彼女は実は「自分はちつとも氣が進まないのだから、芝居の方は成るだけ早く切り上げる。そして出来たら七時頃までに会いに行くようにする」と云つて置いたのである。尤も都合で分らないから、アテにしないでいてくれるとは云つたけれども、……

「明日あした一日、きつと此処ここが痛いだろうと思うわ」

彼女は膝頭もを揉んで見せた。

「幕が開くまでそこに腰かけていたらいい」

そう云いながら夫が眼交ぜで、「まあ、今直ぐ帰るとも云いかねるから」と訴えているらしいのが分ると、それが何がなしに癩かんに触れてならなかった。

「廊下をひと廻り運動して来たらどうかね」

と、老人が云った。

「廊下に何か面白いものでもあつて？」

半分皮肉に云いかけてから、彼女は冗談に紛らしながら、

「あたしも大阪の芸術には降参しちゃったわ。たったひと幕だけでお父さん以上に降参したわ」

「ふふ」

と、お久が鼻の奥で笑った。

「どうなさる？ あなた、——」

「さあ、僕は執方どっちでもいいんだが、……」

要の方は要の方で、例のあいまいな返辞をしながら、今日に限ってそうしつこく「帰る帰らない」を問題にする妻の態度に、淡い不満を蔽おおい隠すことが出来なかった。自分も彼女が長居をしたくないことは知っている、云われないでも潮時を見て器用に切り上げるつもりだけれども、折角呼ばれて来ているものを、せめて父親の手前だけは機嫌きげんよくして、夫の処置に任せてくれたら、——それくらいは夫婦らしく、気を揃そろえてくれたらいいの

に。

「今からだ、ちようど時間の都合もいいし、——」

彼女は夫の顔色には頓とんじやく着なく、七宝しつぽう入りの両りようぶた蓋の時計をキラリと胸のところで開いた。

「来たついでだから、松竹へ行つて御覧にならない？」

「まあお前、要さんは面白いと云うんだから、——」

と、老人は何処どこかだだッ児じみた感じの現れる気短かそうな眉まゆを寄せた。

「——そう云わないでもう少し附き合つたらいいだろうに。松竹なんか又出直しても済むんだから」

「ええ、要が見たいつて云うのなら見てもいいんですけど」

「それにお前、お久がゆうべからかかつて弁当こしらへを拵えて来たんだから、そいつをたべて行つておくれ。こんなにあつちやあ私たちじゃあたべ切れやしない」

「何お云やす、わざわざ上つていただくほどおいしいことおへんえ」

三人の言葉の取りやりを子供が大人の傍にいるように無関係に聞き過していたお久は、そう云つてきまり悪そうに、はすかに載つていた組重の蓋を直して、四角な入れ物へモザ

イクのように詰まっている色どりを隠した。が、高野豆腐を一つ煮るのにもなかなか面倒な講釈をする老人は、この歳の若い妾を仕込むのに煮焚きの道をやかましく云つて、今ではお久の料理でなければ口に合わないと言うほどなので、それを二人に是非ともたべさせたいのであった。

「松竹はもう遅いだろう。明日におしよ」

と、要は「松竹」と言う中へ「須磨」を含ませて云つた。

「まあもう一と幕見て、お久さんの心づくしを戴いてからの都合にしようよ」

けれども妙に間が合わなくなつた夫婦の気持は、二た幕目の「治兵衛内の場」を見ている内に一層変にさせられてしまった。たとい人形の演ずる劇であり、奇怪な誇張に充ちている浄瑠璃の物語であるとは云え、治兵衛とおさんの夫婦関係には、二人がそつと相顧みて苦笑を余儀なくするものがあつた。要は、「女房のふところには鬼が栖むか蛇が栖むか」と云う文句を聞くと、それがいかにも性慾的にかき離れてしまった女夫の秘事を婉曲ながら適切に現わしているのに気づいて、暫く胸の奥の方が疼くのを感じた。彼は義太夫の「天の網島」は巢林子の原作でなく、半二か誰かの改作であるのをぼんやり記憶していたが、きつとこの文句は原作の方にあるのだろう、老人が浄瑠璃の文章を褒めて「今

の小説なんかとても及ばない」と云っているのは、こう云うところを指すのだろうと思うと、ふと又気がかりなことが浮かんた。今にこの幕が済んだあとで、老人がこの文句を持ち出しはしないか。「鬼が栖むか蛇が栖むかとは、昔の人は実にうまいことを云ったものだね」と、例の口調で皆に同感を求めはしないか。この場合を想像すると居たたまらないような気がして、やつぱり妻の云うことを聴いておけばよかったと思った。

しかし一方、ややともするとその不愉快を打ち忘れて、再び舞台の表現にうつとりさせられる瞬間があつた。前の幕ではひとり小春の姿にばかり心を惹かれたのに、今度の幕では治兵衛もよし、おさんもいい。紅殻塗りの框を見せた二重の上で定規を枕に炬燵に足を入れながら、おさんの口説きをじつと聞き入っている間の治兵衛。——若い男には誰

しもある、黄昏時の色町の灯を恋いしたうそこはかとなない心もち。——太夫の語る文

句の中に夕暮の描写はないようだけれども、要は何がなしに夕暮に違いないような気がして、格子の外の宵闇に蝙蝠の飛ぶ町のありさまを、——昔の大阪の商人町を胸に

えがいた。風通か小紋ちりめんのようなものらしい着附を着ているおさんの顔だちが、

人形ながら何処か小春に比べると淋しみが勝つてあでやかさに乏しいのも、そう云う男にうとまれる堅儀な町女房の感じがある。そのほか舞台一杯に暴れ廻る太兵衛も善六も、見

馴れたせいか両脚のぶらんぶらんするのが前の幕ほど眼ざわりでなく、だんだん自然に見えて来るのも不思議であつた。そしてこれだけの人間が、罵りののし、喚きわめ、唾みいが、嘲るあざけのが、

——太兵衛の如きは大声を上げてわいわいと泣いたりするのが、——みんな一人の小春を中心にしていて、その女の美しさが異様に高められていた。成るほど義太夫の騒々しさも使い方に依つて下品ではない。騒々しいのが却つて悲劇を高揚させる効果を挙げている。……

要が義太夫を好まないのは、何を措おいてもその語り口の下品なのが厭いやなのであつた。義太夫を通じて現れる大阪人の、へんにずうずうしい、臆面のない、目的のためには思う存分な事をする流儀が、妻と同じく東京の生れである彼には、鼻持ちがならない気がしていた。ぜんたい東京の人間は皆少しずつはにかみ屋である。電車や汽車の中などで知らない人に無遠慮に話しかけ、甚はなはだしきはその人の持ち物の値段を聞いたり、買った店を尋ねたりするような大阪人の心やすさを、東京人は持ち合わせない。東京の人間はそう云うやり方を不作法であり、無ぶしつけ躰であるとする。それだけ東京の方がよく云えば常識が円満に発達しているのだが、しかしあまり円満に過ぎて見えとか外聞とかに囚とらわれる結果は、いきおい引つ込み思案になり消極的になることは免れられない。とにかく義太夫の語り口には、こ

の東京人の最も厭<sup>いと</sup>う無駄なところが露骨に発揮されている。いかに感情の激越を表現する  
 のでも、ああまでぶざまに顔を引き歪<sup>ゆが</sup>めたり、唇を曲げたり、仰<sup>の</sup>け反<sup>ぞ</sup>ったり、もがいたり  
 しないでもいい。ああまでにしないと表わすことが出来ないような感情なら、東京人はむ  
 しろそんなものは表わさないで、あつさり洒落<sup>しゃれ</sup>にしてしまう。要は妻が長<sup>なが</sup>唄<sup>うた</sup>仕込みで、  
 この頃もよく人知れぬ憂さを紛らすために弾<sup>ひ</sup>いているのが耳にあるせいか、まだあの冴<sup>さ</sup>え  
 た撥<sup>ばち</sup>の音の方が淡いながらもなつかしく聞いていられた。老人に云わせると長唄の三味線  
 は余程の名人が弾かない限り、撥が皮に打<sup>ぶ</sup>つかる音ばかりカチャカチャ響いて、かんじん  
 の絃の音色が消されてしまう。そこへ行くと上方の方は浄瑠璃でも地唄でも東京のように  
 撥を激しく打つけない。だから余韻と円みがあると云うのだが、要も美佐子もこれには反  
 対で、日本の楽器はどうせ単純なのだから、軽快を主とする江戸流の方が悪く毒々しい力  
 がないだけ、邪魔にならないと云うのであった。そして夫婦は音<sup>おん</sup>曲<sup>きょく</sup>のことで老人を向  
 うへ廻す時は、いつでも趣味が一致していた。

老人は二た言目には「今の若い者は」を口にして、西洋かぶれのしたものは何に限らずダ  
 ークのあやつりと同じように腰がきまらない、うすつぺらだと云ってしまふ。尤も老人の  
 言い草には常に多少の掛け値があつて、一と昔前はそう云う御自身が齒の浮くようなハイ

カラ振りに身を窶<sup>やつ</sup>していた時代もあるのだが、日本の楽器は単純だなどと云おうものなら躍起になって得意のお談義が始まるのである。そうなると要はつい面倒で好い加減に引き退つてしまふけれども、心のうちでは一概にうすつぱら扱いされるのに平らかでないものがあつた。彼は自分のハイカラは、今の日本趣味の大部分を占めている徳川時代の趣味と云うものが何となく氣に食わないで、その反感から来ていることは自分にはよく分つていながら、それを老人に納得させる段になると、何と説明したらいいか云い現わしように困るのであつた。彼の頭の中にある漠然とした物足らなさは、つづめて云えば徳川時代の文明は調子が低い、町人が生んだものであるから、何処まで行つても下町情調が抜け切れない、と云うところにあるかも知れない。東京の下町に育つた彼が下町の氣分を嫌<sup>きら</sup>う筈<sup>はず</sup>はなく、思い出としてはなつかしいものに違いないが、一面には又、下町ツ児であるが故<sup>ゆえ</sup>に土地の空氣が鼻に附いて卑俗な感じがする訳でもある。そう云う彼は反動的に、下町趣味とは遠くかけ離れた宗教的なもの、理想的なものを思慕する癖がついていた。美しいもの、愛らしいもの、可憐<sup>かれん</sup>なものである以上に、何かしら光りかがやかしい精神、崇高な感激を与えられるものでなければ、——自分がその前に跪<sup>ひざまず</sup>いて礼拝するような心持になれるか、高く空の上へ引き上げられるような興奮を覚えるものでなければ飽き足らなかつた。これ

は芸術ばかりでなく、異性に対してもそうであつて、その点に於いて彼は一種の女性崇拜者であると云える。もちろん彼は今までにそう云う恋愛なり芸術的感興なりを味つたことはなく、ただぼんやりした夢を抱<sup>いだ</sup>ているだけけれども、それだけひとしお眼に見えぬものに憧<sup>あこが</sup>れの心を寄せていた。そして西洋の小説や音楽や映画などに接すると、まだいくらかはその憧<sup>あこが</sup>れが満たされるような気がした。と云うのは西洋には昔から女性崇拜の精神がある。西洋の男は己<sup>おの</sup>れの恋する女人の姿に希臘<sup>ギリシヤ</sup>神話の女神を見、聖母の像を空想する。この心持が広くいろいろな習慣に附<sup>ま</sup>き纏<sup>まと</sup>つて、芸術の中にも反映しているせいである。と、要はそんなふうを考え、その心持の欠けている日本人の人情風俗に云いようのない淋しさを覚えた。それでも仏教を背景にしていた中古のものや能楽などには古典的ないかめしさに伴う崇高な感じがないでもないが、徳川時代に降つて来て仏教の影響を離れれば離れるほど、だんだん低調になるばかりである。西<sup>さい</sup>鶴<sup>かく</sup>や近松の描く女性は、いじらしく、やさしく、男の膝に泣きくずおれる女であつても、男の方から膝を屈して仰ぎ視るような女ではない。だから要は歌舞伎芝居を見るよりも、ロス・アンジェル<sup>ロサンゼルス</sup>スで拵<sup>こしら</sup>えるフィルムの方が好きであつた。絶えず新しい女性の美を創造し、女性に媚<sup>こ</sup>びることばかりを考えているアメリカの絵の世界の方が、俗悪ながら彼の夢に近かつた。そして嫌いなものの中で

も、東京の芝居や音曲にはさすが江戸人のきびきびとしたスマートな気風が出ているのに、義太夫は飽くまで太々しく徳川時代趣味に執着しているところが、到底傍へも寄りつけないように思えたのであった。

それが今日はどう云う訳か最初に舞台を見入った時からそう反感を起すでもなく、自然にすらすらと浄曲の世界へいざなわれて、あの重苦しい三絃の音までがいつとはなしに心のうちへ食い入って行くようなのである。そして落ち着いて味わって見ると、彼のきらいな町人社会の痴情の中にも日頃のあこがれを満たすに足るものがないでもない。暖簾を垂らした瓦燈口に紅殻塗りの上り框、——世話格子で下手を仕切ったお定まりの舞台装置を見ると、暗くじめじめした下町の臭いに厭気を催したものであったが、そのじめじめした暗さの中に何かお寺の内陣に似た奥深さがあり、厨子に入られた古い仏像の円光のようにくすんだ底光りを放つものがある。しかしアメリカの映画のような晴れ晴れしい明るさとは違って、うっかりしていれば見過してしまうほど、何百年もの伝統の埃の中に埋ま

って侘びしくふるえている光だけれども。……

「さあ、どうぞ、お腹空いてましたらたべとおくれやす、ほんまに味のうおすけれど、

……」

幕が終るとお久がそう云つて重箱の物をめいめいに取つてくれたが、要はまだ眼にちらついている小春やおさんのおもかげに名残りを惜しまれる一方、老人のお談義が直きに例の「鬼が栖むか蛇が栖むか」へ落ちて行きそうな形勢なので、幕の内を摘まむあいだも気が気でなかった。

「それではあの、戴き立ちで甚だ勝手なんですが、………」

「もう、お帰りやすか、ほんまに」

「僕はもつと見ていてもいいんですが、やっぱりちよつと松竹座へ行つて見たいんだそうですから。………」

「そらなあ、奥様」

と、取りなすようにお久は云つて、老人と美佐子とを半々に見た。

二人はそれをいいしおに、次の幕の口上が始まりかけたのを聞きながら、廊下までお久に送られて出た。

「あんまり親孝行にもならなかつたわね」

道頓堀の夜の灯の街へ吐き出されたとき、美佐子はほつとしたように云つて、それには答えず、えびすばし戎橋の方へ足を向けかけた夫を呼んだ。

「あなた、そつちじやあないことよ」

「そうか」

と、要は引つ返して日本橋<sup>にっぽんばし</sup>の方へ、こころもち急ぎ足で行く彼女のあとに追いつきながら、

「いや、あっちへ行つた方がいい車が拾えると思つたんだ」

「もう何時？」

「六時半だよ」

「どうしようかしら、……………」

妻は袂<sup>たもと</sup>から手袋を出して、それを簍<sup>は</sup>めながら歩いてゐた。

「行くならおいでな。行つて行けないと云う時間でもない。……………」

「此処からだど、梅田から汽車で行つた方が早いでしょうか」

「早いことを云やあ、阪急で行つて上筒井<sup>かみつ井</sup>から自動車の方がいいだろう。——しかし  
そうすると、此処で別れてもいい訳なんだな」

「あなたは？」

「僕は心齋橋筋をぶらついて帰る」

「じゃあ、……もしか先にお帰りになったら、十一時に迎えに出ているように仰おつしや  
つて下さらない？　電話をかけるつもりだけれど」

「うむ」

要は妻のために通るかかりのニュー・フォードを止めた。そしてガラスの窓の中に彼女の  
横顔が収まるのを見届けてから、再び道頓堀の人波の中へ引返して行った。

## その四

弘サン

学校ハイツカラ休ミデスカ、モウ試験ハ済ミマシタカ、僕ハチヨウド君ノ学校ガ休ミノ  
時分ニソチラヘ行キマス。

御土産みやげハ何ニシヨウ。御注文カントンノ広東犬ハコノ間カラ捜シテイマスガナカナカ見ツカラ  
ナイ。同ジ支那しなデモ上海シャンハイト広東トハマルデ国ガ違ウヨウニ離レテイマス、目下当地  
デハ「グレイハウンド」ガ流行デス、ソレデヨケレバ持ッテ行キマス、ドウイウ犬カ君  
ハ多分知ツテイルデシヨウガ、参考ノタメ「グレイハウンド」ノ写真ヲ此ここ処ニ入レテ置

キマス。

写真デ思イツイタガ写真機ガ欲シクハナイデスカ、「パテエ・ベビイ」ハイカガ？ 犬  
トドツチガイイカ、返事ヲ下サイ。オ父サンニハ約束ノ「アラビアン・ナイト」ガ「ケ  
リー・ウォルシュ」ニアツタカラ持ツテ行クト云ツテ下サイ、コレハ大人おとなノ読ム「アラ  
ビアン・ナイト」デス。子供ノ読ム「アラビアン・ナイト」デハアリマセン。

オ母サンニハ緞子どんすト呉紹ごしょうノ帯地ヲ持ツテ行クト云ツテ下サイ、ドウセ僕ノオ見立テダカ  
ラ例ニ依ツテ悪口ヲ云ワレルカモ知レナイ、君ノ犬ヨリコノ方ガ心配ダト云ツテ下サイ。  
荷物ガ沢山持チキレナイホドアリマス、犬ヲツレテイタラ電報ヲ打ツカラ誰カ船マデ受  
ケ取りニ来テ下サイ。

大概二十六日ノ上海丸ノ予定デス。

高夏秀夫

斯波弘しばひろし様

その二十六日の午頃ひる、父につれられて出迎えに行つた弘は、船の廊下を尋ね廻つていち早く船室を捜しあてると、

「小父さん、犬は？」

と、真つ先にきいた。

「犬か、——犬は彼方あつちに置いてあるよ」

白っぽいホームスパンの上衣うわぎの下に鼠ねずみのスウェーターを見せて、同じ鼠のフランネルのパンツを穿はいた高夏は、狭い室内で彼方あつち此方こつち荷まとめをするあいだも絶えず葉巻を手から口へ、口から手へと持ち変えながら、そのために一層氣ぜわしそうに働いていた。

「大分荷物が多いじゃないか、今度は幾日ぐらい居るんだ」

「今度は少し東京に用があるんだ、君ん所にも五六日はいるつもりだが」

「これは何だ」

「それは酒だ。——非常に古い紹興酒しょうこうしゅだと云うんだが、欲しければ一と瓶びん分けてもいい」

「その辺にある細かい物を寄越したらどうだい、じいやが下で待っているから、あれを呼んで持たしてやろう」

「犬は、お父さん？ 犬はどうするの？」

と、弘が云った。

「——じいやは犬を連れて行くんですよ、お父さん」

「なあに、おとなしい犬だから大丈夫だよ、弘君でも連れて行かれるよ」

「<sup>か</sup>噛まない？ 小父さん」

「絶対に噛まない、どんな事をしたって平気なもんだ。君が行ったら直ぐ飛び着いてお世辞を使うよ」

「何という名？」

「リンデイー。——リンドバーグのことだよ、ハイカラな名だろう？」

「小父さんがお附けになったの？」

「西洋人が持っていたんで、前からそんな名が附いていたのさ」

「弘」

要は、犬の話で夢中になっている子供を呼んだ。

「お前はちよつと下へ行つてじいやを連れておいで。ボーイだけでは手が足りないから」

「元氣<sup>かさば</sup>じゃないか、見たところでは。——」

何か嵩張<sup>かさば</sup>った重そうな包みを寢台の下からずるずる引きずり出しながら、出て行く弘のうしろかげへ眼をやつて高夏は云つた。

「そりや子供だから、元氣は元氣だが、あれでなかなか神経質になっているんだ。手紙にそんなところはなかったかね」

「なかったね、別に」

「尤もそりやあ、まだどうと云つて形を取った心配がある訳ではなし、子供としては何とも書きようはない筈<sup>はず</sup>だけれど、………」

「ただ最近、前より頻<sup>ひんぱん</sup>に手紙を寄越すようになってはいた。やっぱり何かしら淋<sup>さび</sup>しい氣持がしたのかも知れない。……さて、これでよしと」

ほつとしたように高夏は寢台の端に腰をおろして、葉巻の煙を始めてふかふかと味わうのであつた。

「じゃ、まだ子供には何も話してないんだね?——」

「うむ」

「そう云う点が君と僕とは考が違ふな、いつも云うことなただけれど」

「もしも子供に尋ねられたら、僕は正直に云うだろう」

「だって、親の方から云わなかったら、子供がそんなことを切り出せる訳がないじゃないか」

「だからつまり話さないと云う結果になるのさ」

「よくないがなあ、ほんとうに。……いよいよと云う時に突然打ち明けるよりも、前からぼつぼつ因果をふくめて置く方が、却<sup>かえ</sup>つてその間に覚悟が出来ていいんだがなあ」

「しかし、もううすうすは気が付いているんだよ。僕等も話こそしないが、気が付かれるだけのことは子供の前で見せているんだから、こう云う事があるかも知れない——ぐらないな覚悟は案外ついているかとも思う」

「それなら尚<sup>なわさち</sup>更話すのに楽じゃないか。黙っていられるといろいろなふう<sup>な</sup>に気を廻して、最悪な場合を想像したりするもんだから、それで神経質になるんだ。——もしも君、もうお母さんに会えなくなるんじゃないかと云うような余計な心配をしていたとしたら、話をすると却つて安心するかも知れんぜ」

「僕もそう考えなくもないんだがね、……ただどうも、親の身になると子供に打撃を与えるのが厭<sup>いや</sup>だもんだから、ついぐずぐずに延ばしてしまつて、……」

「君が恐れるほど打撃を受けはしないんだがなあ。——子供と云うものは強いもんだぜ。大人の心で子供を推し測るもんだから可哀そうに思えるんだが、子供自身はこれから成長するのだから、そのくらいな打撃に堪<sup>た</sup>える力は持つているんだぜ。よくく分るように云つ

て聴かしたらあきらめるところはちゃんとあきらめて、理解するに違いないだが、……  
 ……」

「それは僕にも分っているんだよ。君の考える通りのことを僕も一と通りは考えたんだ」  
 ありていに云うと、要はこの従弟いとこが上海から来てくれる日を、半ばは心待ちにもし、半ばは荷厄介どたんばにもしていた。不愉快なことは一日延ばしに先へ延ばして土壇場へ追い詰められるまでは云い出し得ない自分の弱い性質を思うと、従弟が早く来てくれたら自然いやいやながらも前のめり押し出されてカタが付きそうな気がしていたのだが、面と向ってその問題を持ち出されてみると、遠い所に置いてあったものが急に眼の前へ迫った感じで、励まされるよりは怯気おしけがついて、臀しりこ込みするようになるのであった。

「で、どうする今日は？ 真っ直ぐ僕の家へ来るか」  
 と、彼は別なことを尋ねた。

「どうしてもいい。大阪に用があるんだけど、今日でなくつても差支さしつかえない」

「じゃ、一と先ず落ち着いたらどうかね」

「美佐子さんは？」

「さあ、………僕が出かける時までは居たが、………」

「今日は、僕を待つていやしないか」

「或はわざと氣を利か<sup>き</sup>して出たかも知れんね、自分がいない方がいいと云う風に、——  
 少くともそれを口実にして」

「うん、まあ、それは、——美佐子さんにもいろいろ聞いてみたいんだけど、その前  
 によく君の方の腹をたしかめて置く必要があるんだ。いったい、いくら近い間柄でも夫  
 婦の別れ話の中へ他人が這<sup>はい</sup>入るのは間違つてるんだが、君たちばかりは自分で自分の始末  
 が付かない夫婦なんだから、……」

「君、昼飯は済んでいるのか」

と、要はもう一度別なことを尋ねた。

「いいや、まだだ」

「神戸で飯を食つて行こうか、子供は犬がいるんだから先へ帰るよ」

「小父さん、犬を見て来ましたよ」

そう云いながら、そこへ弘が戻つて来た。

「素敵<sup>すてき</sup>だなあ、あれは。まるで鹿みたいな感じだなあ」

「うん、走らしたら非常に速いぞ。汽車より速いと云うくらいで、あれを運動させるには

自転車へ乗って引つ張るのが一番いいんだ。何しろ競馬に出る犬だから」

「競馬じゃあないでしょ、競犬でしょ小父さん」

「やられたね、一本」

「けれどあの犬、デイステムペアは済んでるかしら？」

「済んでるよ勿論、もうあの犬は一年と七箇月になるんだ。——それよりあれをどう

して家へ連れて行くかが問題だな、大阪まで汽車で、それから自動車でも行くか」

「そんなことをしないでって阪急は平気なんですよ。ちよつと頭から風呂敷か何か被せてやれば、人間と一緒に乗せてくれるんです」

「へえ、そりゃハイカラだなあ、日本にもそんな電車があるのか」

「日本だって馬鹿に出来ないでしょう、どうだす、小父さん？」

「そうだったか」

「おかしいや、小父さんの大阪弁は。それじゃアクセントが違つてらあ」

「弘の奴は大阪弁がうまくなつちやつて困るんだよ、学校と家とで使い分けをやるんだから、——」

「そらなあ、僕かつて標準語使え云うたら使わんことないけど、学校やったら誰かつてみ

んな大阪弁ばかりやさかい……………」

「弘」

と、要は図に乗ってしゃべりつづけようとする子供を制した。

「お前、犬を受け取ったらしいやを連れて先へお帰り、小父さんは神戸に用があるそうだし、……………」

「お父さんは？」

「お父さんも小父さんと一緒だ。小父さんは実は、久しぶりで神戸のすき焼がたべたいと云うんで、これから三ツ輪へ出かけるんだよ。お前は朝がおそかったからそんなに減つてやしないだろう？ それにお父さんは少し小父さんと話もあるし、……………」

「ああ、そう」

子供は意味を悟ったらしく、顔を擡<sup>あ</sup>げて恐る恐る父の眼の色を見た。

## その五

「とにかく弘君の一件はどうする気なんだ。話した方がいいにはいいが、話しにくいと云

うのだったら、僕が話してやってもいいぜ」

せつかちと云うほどでもないが、テキパキ事務を運んで行く習慣のついている高夏は、三ツ輪の座敷に足を伸ばすとすき焼の鍋なべの煮えるあいだも無駄に放っては置けないのであった。

「それはいかん、やつぱり僕から話す方が本当じゃないかな」

「そりやあそうに違いないさ、ただその本当のことを君がなかなか実行しそうもないからさ」

「まあいい、そう云わんで子供のことは僕の勝手にさせてくれ給え。何と云つても彼奴あいつの性質は僕が一番よく知っているんだから。——今日だって君は気がつくまいが、弘の態度は余程いつもと違つてるんだよ」

「どう云う風に？」

「ふだんはあんな風に人の前で大阪弁を使つてみせたり、揚げ足を取ったりするようなことはめつたにないんだ。いくら君と親しいからって、あんなにはしやぐ筈はないんだ」

「僕も少うし元氣過ぎると思つたんだが、……じゃ、わざとはしやいでいたのかね」

「そうだよ、きつと」

「どうしてだろう？ 無理にもはしやいで見せなければ僕に悪いと云う風に思つたのかしら？」

「それも多少はあるかも知れない、が、弘は実は君を恐れているんだよ。君が好きではあるんだが、同時にいくらか恐ろしくもあるんだ」

「なぜ？」

「子供は僕等の夫婦関係が何処<sup>どこ</sup>まで切迫しているのかは知るよしもないが、君が来たと云うことは何かしら形勢に変化が起る前兆だと思つてゐるんだ。君が来なければ容易にわれわれはカタが付かない、そこへ君がカタをつけに来たと、そう思つてゐるんだよ」

「成るほど、じゃあ僕が来るのはあまり有り難くない訳なんだな」

「そりやあいろいろ土産物を貰<sup>もら</sup>うのは嬉しいし、君に会いたいには会いたいんだ。つまり君は好きなんだが、君の来ると云うことが恐ろしいんだよ。そう云うところは僕も弘も全く同じ気持なんで、さっきの話す話さないの一件なんでも、僕が話すのを厭がるように子供の方でも聞かされるのを厭がつているのは、あれの様子に見えてゐるんだ。弘にしてみると、君と云う人は何を云い出すか分らない、お父さんが云わないでゐることを、今に君から宣告されやしないかと、そんなところまで感ぐつてゐるんじゃないかと思う」

「そうか、それでその恐ろしさを胡麻化<sup>ごまか</sup>すためにはしやいでいたのか」

「要するに、僕も、美佐子も、弘も、三人ながら同じように気が弱いんだ。そうして今では三人共に同じ状態にとどまっているんだ。——正直を云うと、僕にしたって君の来るのが恐ろしくないことはないんだから」

「じゃ、放つて置いたらどうなるんだ」

「放つて置かれたらなお困るんだ。恐ろしいことは恐ろしいが、何とかカタがついた方がいいには違いないんだから」

「弱つたな、どうも。——阿曾と云う男は何と云っているんだ。君等が駄目なら、その男に積極的に出てもらつたら、却つて解決が早くはないかな」

「ところがその男もやつぱり同じらしいんだよ。美佐子の方から極めてくれなければ、自分はどうともする訳に行かないと云うんだそうだ」

「まあ、男の立ち場としてはそういうのが当然ではある。でなけりや自分が人の家庭を破壊することになるんだから」

「それにもともとこの話は何処までも三人が合意の上のことにしよう、阿曾にも、美佐子にも、僕にも、みんなに都合のいい時を待とうと、そう云う約束なんだからね」

「けれども都合のいい時なんて、一体いつになったら来るんだ。誰か一人が決然たる処置を取らなかつたら、そんな時は永久に来るもんじやない」

「いや、そうでないよ、——たとえばこの三月の学校の休みなんか、実は一つの機会ではあつた。と云うのは、僕は子供が胸一杯に悲しい思いを包みながら、学校の教室なんぞで不意にはらはらと涙をこぼしたりすることを想うと、そいつがとてもたまらないんだ。だから学校が休みでさえあれば、旅行にでも連れて行つてやるとか、活動写真でも見に行くとか、何とでもして紛らしてやる事が出来るだろうし、そのうちには少しずつ忘れて行くようになると思うんだ」

「じゃあ、なぜそうしないんだ」

「今月は阿曾が困ると云うんだ。阿曾の兄が来月初旬に洋行するんで、出先にごたごたを起すのもいやだし、兄が日本に居ない方が故障が少いと云う訳なんだ」

「すると今度は夏の休みまで機会がないんだね」

「うん、夏だとずっと休みの期間も長いしするから、……………」

「そう云うことを云っているんじや、實際際限がないんだがなあ。夏になったら又どんな事情が湧くかも知れんし、……………」

肉はないけれども骨太の上にじようみやく静脈のグリグリしている、男性的にや瘦せた高夏の手が、酒のせいか重い物をじつと持ちこたえている時のようにふるえていた。彼はその手を鍋の下へ伸ばして、はぼたん葉牡丹のように重なつた葉巻の灰の層をどきりとこんろう焔炉の水に落した。

こうしてたまに、二た月に一度か三月に一度ずつ帰つて来る従弟を迎えるたびに、常に感じることを云うのは、要は口でこそ「いつ別れる」を問題にしているようなものの、まだほんとうは「別れるか別れないか」さえしつかり決断がついているのではないのである。それを従弟が別れることに極めてしまつて、ひたすら時機ばかりを考慮のうちに入れているのは、従弟自身が「別れてしまえ」と云う強硬な意見だからではなく、別れることは最早や動かす可からざる決定であるとして、ただその手段についてのみ相談を受けるからなのである。要は決して心にもない強がりを云うのではないのだが、いつも従弟の顔を見るとその男らしい果敢な氣風にかぶれるせい、自然と自分にも勇氣が出て来て、既に覺悟がついているような話しぶりになるのであつた。そればかりでなく、彼が従弟の来るのを迎える氣持の中には自分で自分の運命をもてあそ弄ぶことを楽しむ心も手伝っていた。もつと打ち明けて云えば、実行するにはあまりに意志の弱い彼は、別れた場合の空想にばかり耽ふけっている、その空想が従弟に会うと非常に活潑に、実感を帯びて来ることが愉快なのであ

る。が、そうかと云つて、全然從弟を空想の道具に使うつもりではなく、アワよくばその空想から次第に現実を誘導したくもあるものであつた。

誰しも離別は悲しいものにきまつている。それは相手が何者であらうとも、離別と云うことと自身のうちに悲しみがあるのである。別れるのに都合のいい時を、手をこまぬいて待つていたとてそんな時が来るものでないと云う高夏の言葉は、その通りに違いあるまい。さすがに高夏は嘗て彼自身<sup>かつ</sup>が前の妻を離別した時は、要のようにならずしてはいなかつた。別れることに決心すると、或る朝彼は妻を一間のうちへ呼んで、晩までかかつて事細かに理由を述べた。そうして離縁を云い渡して置いてから、最後の別れを惜しむためにその晩じゆう妻と相抱いて泣いた。「女房も泣いたし、僕もおいおい声を放つて泣いたよ」と、彼はそのあとで要に語つた。今度の事件で要が彼をたよりにするのは、一つには彼にそう云う経験があり、その時の彼のやり方を傍で見ていて羨ましく思つたからではあるが、――

――成る程、高夏のように悲劇に直面することが出来、泣きたい時には思うさま泣ける性質だつたら、定めし後がさっぱりするだろう、あれでなければ離別は出来ないとつくづく思つたからではあるが、しかし要にその真似<sup>まね</sup>はやれないのである。東京人の見えや外聞を気にする癖がそう云うところへまで附いて廻つて、義太夫語りの態度を醜いと感ずる彼は、

顔をゆがめて泣きわめく世話場の中へ自分を置くことに同じ醜さを感じるのである。彼は何処までも涙で顔をよごさずに、きれいに事を運びたかった。妻の心緒しんしよと自分の心緒とが一つの脳髓の作用のように理解し合つて別れたかった。それが必ずしも不可能なことではなく思えるのは、彼の場合は高夏の場合と違うからである。彼は去つて行く妻に対して何の悪い感情も持たない。二人は互に性的には愛し合うことが出来ないけれども、その他の点では、趣味も、思想も、合わないところはないのである。夫には妻が「女」でなく、妻には夫が「男」でないと云う関係、——夫婦でないものが夫婦になつていると云う意識が氣づまりな思いをさせるのであつて、もし二人が友達であつたら却つて仲よく行つたかも知れない。それゆえ要は去つてからでも附き合ひをしないと云うのではない。相当の年所をさえ経たなら、過去の記憶に煩わづらいされるところなく、阿曾の妻として、弘の母なる人として、ずいぶん心やすく往復されそうにも感ずるのである。尤もその時になつてみると阿曾の手前や世間の眼もあつてそうは出来にくいにしてからが、少くとも二人がそういう見透しを持つて別れられたら、「別れる」と云う悲しみをどんなに軽くするか知れない。「弘が重い病氣にでもなつたら、きつと知らして下さるでしょうね。そんな時には見舞いに行つてもいいことにして下さらないじゃ困るわ。阿曾も承知なんですから」と美佐子が

云うのは、弘の父の病氣の場合をも含めているに違いないし、要の方でも彼女の身に就いて望むところは同じであつた。夫婦としては不仕合わせなお互であつたにもせよ、とにかくにも十年に余る歳月のあいだ起き伏しを共にし、子をまで儲けた二人ではないか。それが一旦別れたからと云つて、路傍の人を視るみようにしなければならぬとは、——お互の身に万一のことがあつた場合に臨終にさえ会つてならないとは、——そんな理由は何処にあらう。要も美佐子も、別れる時はその心持でありたかつた。やがてめいめいが新しい配偶者を持ち、新しい子を儲けるとしたら、その心持がいつまでつづくか分らないにしても、さしあたつてはそれが一番氣を樂にさせる方法だと思つた。

「実は何だよ、こんなことを云うと笑われるかも知れないが、この三月にしようかと云つたのは子供のためばかりではなかつたんだよ」

「ふむ？」

と云つて高夏は、鍋の中へ眼を落してきまり悪そうに唇で微笑くちびるしている要を視つめた。

「都合のいい時と云う中には季候のことも考慮しているんだよ。つまりその時の季候の工合で悲しみの程度が余程違ふ。何と云つても秋に別れるのは一番いけない、一番悲しみの度が強い。いよいよ別れると云う時に、『これからだんだん寒くもなりますし……』と、

泣きながら女房がそう云ったんで急に別れるのを止めてしまった男があるんだが、実際そんなことは有り得ると思う」

「誰だい、その男は？」

「いや、そんな話もあると云うことを聞いただけなんだが」

「は、は、君はいろいろそう云う例を方々で聞いて来ると見えるね」

「こう云う時に人はどうするかと思うもんだから、聞くつもりはなくても耳に這入るようになるんだよ。尤も僕等のような場合はあまり世間に例がないんで、参考になるのは少いんだけど」

「で、別れるのには今頃の暖かい陽気が一番いいと云うのかい？」

「うん、まあそうなんだ。まだこの頃はうすら寒いことは寒いけれども、しかしだんだん暖かくなる一方だし、そのうちには桜が咲き初めるし、直きに新緑の季節にもなるし、……そう云うコンディションがあつたら、比較的悲しみが軽いだろと思うんだ」

「と云うのは、君の意見なのか？」

「美佐子も僕と同意なんだよ、『別れるのなら春がいいわね』って、——」

「そりや大変だ、すると来年の春まで待たなきゃならないのか」

「夏だつてそりやあ悪くはないがね、……ただ僕の母親が亡<sup>な</sup>くなったのが、あれが七月だつたろう？　僕はあの時に覚えがあるんだが、夏の景色と云うものはすべてが明るく生き生きとしていて、眼に触れるものがみんな晴れやかな筈<sup>はず</sup>なんだけれど、あの年ぐらい夏を悲しいと思つたことはなかつた。僕は青葉の蒸し蒸しと繁<sup>しげ</sup>つてゐるのを眺<sup>なが</sup>めただけでも涙ぐまれて仕方がなかつた。……」

「それ見給え。だから春だつて同じことなんだ。悲しい時には桜の花の咲くのを見たつて涙が出るんだ」

「恐らく僕もそうなんだろうとは思つてゐるんだが、そう考えるといいよ時機<sup>とき</sup>がなくなつてしまつて、身動きが出来なくなるもんだから、……」

「結局こいつは、別れないで済むことになるんじゃないかな」

「君はそう云う気がするかね？」

「僕より君はどうなんだ？」

「僕にはどうなるか全く分らない。分つてゐるのは、別れなければならぬ理由は余りに明かに備わつてゐる、これまででさえうまく行かなかつたものが、阿曾との關係が出来てしまつた今となつて、——それも僕から寧<sup>むし</sup>ろすすめてそれを許した今となつて、——

夫婦でいられる訳はないし、すでに夫婦ではなくなっている、と云う事実だ。僕も美佐子もこの事実を前に置いて、一時の悲しみを忍ぶか永久の苦痛に堪えるか、どっちとも決断が附かずにいる、——決断は附いているんだが、それを実行する勇気がないので迷っているんだ」

「君、こう云う風に考えることは出来ないかしらん？——すでに夫婦でないものなら、別れる別れないと云うことは、云いかえると一緒の家に住むか住まないかと云うだけのことだ、——そう考えたらよっぽど楽になりはしないか」

「もちろん僕は出来るだけそう考えているんだよ、そう考えていてやつぱりなかなか楽でないんだよ」

「尤も子供と云うものもあるからなんだが、子供にしたって父と母とが別々に住むようになるだけで、母を母と呼べなくなると云うんじゃないんだから、……………」

「そりゃあね、幾らも世間にはあることなんで、外交官や地方長官なら夫だけが外国へ行っていたり、子供を東京の親戚へ預けたりするのがざらにあるんだし、そうでなくったって中学校もないような田舎の子供はみんな親の傍を離れてるんだから、それを考えたら何でもない、……………」と、そう思うことは思うんだけど、……………」

「つまり君のはただ君自身の心持が悲しいんだよ。事實は君が感じるほどに悲しくはないんだ」

「だって、悲しみというものは結局みんなそうなんじゃないか、どうせ主観的なものなんだから。……僕等のはお互に憎み合うことの出来ないのがいけないんだね。憎み合えたら楽なんだろうが、両方が両方を尤もだと思ってるんだから始末に悪い」

「なまじ君に相談しないで、二人が駈け落ちしちまうと一番面倒がなかったんだな」

「まだこうならない前のことだが、いつそそうしようかって阿曾が云ったことがあるそうだよ。しかし美佐子は、あたしにそんな真似はとも出来ない、何か麻酔剤でも嗅がしてもらって寝ているあいだに担ぎ出してでもくれなかったら駄目だと云って笑ったそうだが、

……」

「わざと喧嘩を吹っかけてみたらどんなもんだ」

「そいつも駄目だね。お互に芝居をしてるのが分ってるんじや、『出て行け』『出て行きます』と云うようなことを口先でばかり云い合ってたって、いざと云う時急に泣き出しちゃうだろうね」

「何しろ手数のかかる夫婦だよ、別れるのにまでいろいろ贅沢を云うんだから。……」

「何かこう、心理的に麻酔剤の役をするものがあればいいんだが、……君はあの時分に芳子さんを心から憎むことが出来たんだろうね」

「憎くもあつたが哀れでもあつたさ。徹底的に憎み通すと云うようなことは男同士の間でなけりやないことだからな」

「しかし、こう云うと変だが、くろうとの女は別れるのに別れ易くはないかな。ああ云うばつぱつとした性質の人だし、過去にも君以外に幾人かの男を知っているんだし、一人になれば気楽に前の商売に帰って行けるんだし、……」

「やつぱり別れる身になってみるとそうも行かんね」

眉の間をかすかに曇らせた高夏は、すぐ又もとの調子で云つた。

「それも季候とおんなじ事だよ、別れるのに都合のいい女だの悪い女だのつてあるもんじやないよ」

「そうかしらん？ 僕にはどうも娼婦型の女は別れ易くつて、母婦型の女は別れにくいような気がするんだが、そう思うのは身勝手かしらん？」

「娼婦型は案外本人が平気なだけに、一層哀れなところもある。立派なところへ縁づいてでもくれるんならいいが、又のこのこと花柳界へ戻って行かれちゃ、それだけ此方も世間

が狭くなるからな。僕はそんなことは超越してるが、そう云う風に考えたら貞女も淫婦も悲しくないなんて女はないさ」

ひとしきり執方も黙り込んで鍋の物を突ツついていた。酒は二人で二本と飲んではいなかったが、その浅い酔いが却っていつまでも顔に火照<sup>ほて</sup>って、へんに春らしい鈍重な気分だった。

「そろそろ飯にしようじゃないか」

「うむ」

要<sup>かなめ</sup>はむツつりしてベルを押した。

「一体しかし、——」

と、高夏が云った。

「——近代の女はみんないくらかずつ娼婦型になりつつあるんじゃないのかな。美佐子さんなんでも全然母婦型とは云いにくいな」

「あれは元来は母婦型なんだよ、母婦型の魂を娼婦型の化粧で包んでいるんだ」

「そうかも知れない。——一つにはたしかに化粧のせいだ。この頃の女の顔の作りは多少ともアメリカの映画女優の影響を受けているんだから、どうしたって娼婦型になる。上

海なんぞでもやつぱりそうだが」

「それに美佐子のは、僕がなるべく娼婦型にさせるように仕向けた傾きもないことはないんだ」

「そりやあ君が女性崇拜者フエミニストのせいなんだろう、フエミニストと云う者は母婦型よりも娼婦型を喜ぶんだから」

「いいや、そうじゃないんだよ。つまり何なんだ、——又問題が前に戻るが、娼婦型にさせた方が別れるのに楽だと思つたんだ。しかしそいつが大違いで、腹からなり切れちまえばいいんだが、附つけ焼やき刃ばだから肝心な時に母婦の地金じかねが出て来るんで、なお不自然な厭いやな気がするんだ」

「美佐子さん自身はどう思つているだろう？」

「自分はたしかに悪くなつた、昔のように純粹でなくなつたと云つてゐる。——それはそうに違いないんだが、一半の責任は僕にあるんだ」

何の事はない、彼女と結婚してからのこの歳月と云うものを、自分は如何いかにして離縁すべきかと云うことばかり考えつづけて暮らして来たのだ、別れよう別れようの一念しかない夫だつたのだ。——ふとそう思うと、要は自分の冷酷な姿がありありと自分に見えるの

であつた。自分は妻を愛し得ない代りには、決して侮辱を与えないように心がけていたつもりだけれど、女に取つてこれが最も大いなる侮辱でなくて何であろう。こういう夫を持たされた妻の寂しさは、娼婦にも母婦にも、勝気な者にも内気な者にも、何として堪<sup>た</sup>えることが出来よう。……

「實際あれがほんとうの娼婦型だつたら、僕には文句はないんだがな」

「どうだか、それもアテにはならんな。芳子のような真似をされたら君だつて我慢が出来やしないぜ」

「そりやあ、そう云つちやあ悪いが、ほんとうに商売をしたことのある女はいかんな。それに僕は芸者タイプは好かないんだ。ハイカラな、智的な娼婦型がいいんだ」

「それにしたつて、女房になつてから娼婦的行為を実行されたら困るじゃないか」

「智的な奴なら、そこは自制力を持つてゐるだろう」

「君の云うことはどこまでも勝手だよ。そんな虫のいい注文に餽<sup>は</sup>まるような女があるもんか。——フェミニストと云う者は結局独身で通すより外仕方がないんだ、どんな女を持つたところで氣に入る筈はないんだから」

「僕も實際結婚には懲<sup>こ</sup>りたよ。今度別れたらまあ当分は、——或は一生貰わないでしま

うかも知れない」

「そう云いながら、又貰つては失敗するのがフェミニストでもあるんだがね」

二人の会話は、仲居が給仕に這入<sup>はい</sup>つて来たのでそれきり途切れた。

## その六

朝も十時近くになって布団の中で眼を開いた美佐子は、庭の方で子供と犬とが戯れている声を、いつになくのんびりとした心持で聞いていた。「リンデイー！　リンデイー！」

「ピオニー！　ピオニー！」と、子供はしきりに犬を呼んでいる。ピオニーと云うのは前から飼っているコリー種の牝<sup>めす</sup>で、去年の五月に神戸の犬屋から買った時にちようど花壇に咲いていた牡丹<sup>ぼたん</sup>に因<sup>ちな</sup>んで名をつけたのだが、弘は早速土産<sup>みやげ</sup>のグレイハウンドを曳<sup>ひ</sup>き出して、そのピオニーと友達にさせようとしているらしい。

「いかん、いかん、そう君のように急に仲好くさせようったって駄目だ。放つて置けば自然に好くなるよ」

そう云っているのは高夏である。

「だって小父さん、牝牡めあすならば喧嘩けんかしないって云うじやありませんか」

「それにしたってまだ昨日来たばかりだから駄目だ」

「喧嘩したら孰方どっちが強いかしら？」

「そうだな、ほんとに。——ちようど両方同じくらいな大きさなんでいけないんだな。

孰方か小さいと大きい方が相手にしないんで直ぐに仲好くなるんだがな」

その間も二頭の犬は代る代る吠ほえていた。ゆうべ帰りがおそかった美佐子は、旅の疲れで睡そうにしていた高夏と二三十分しゃべったばかりで、土産の犬はまだ見ていないのだが、あのひいひいと風邪声かぜこえのようなかすれた声で啼ないている方がピオニーであろう。彼女は夫や弘ほどに犬好きではないのだけれど、このピオニーはいつも帰りが十時過ぎになる時には、じいやと一緒に停留所まで迎えに出ていくのである。そして彼女が改札口から現れると、鎖の音をちやりん！と云わして、いきなり跳とび着こうとするのである。彼女はそんな時、じいやを叱しかって着物に附いた泥足の痕あとを払いながらも、だんだん犬が前ほどは嫌きらいでなく、この頃では気が向くと撫なでてやつたり、ミルクを与えたりなぞしていた。ゆうべ電車を降りた時にも、「ピオニーや、今日はお前のお友達が来たんじゃないの」と、そう云って跳び着いて来る頭をさすった。どうかすると、誰より先に自分の帰りを喜んで

迎えるこのピオニーが、夫の家の代表者のように思えました。

雨戸は気を利<sup>き</sup>かして締めてあるのだが、欄<sup>らんま</sup>間の障子にぎらぎらしている日ざしの様子では、外は桃の花の咲きそうならかな天気になつてゐるらしい。そう云えば今年のお節句には雛<sup>ひな</sup>人形を飾つたものかどうかであらう。彼女は初節句の祝いに人形好きの父親が特別に京都の丸平で拵<sup>こしら</sup>えてくれた古風な雛を、結婚の時道具と一緒に斯<sup>しば</sup>波家へ持つて来ているのである。そして関西へ移つてからは土地の風習に従つて一と月おくれの四月の三日を節句にしていた。女の子のない家庭ではあり、彼女自身はそんなものに今では大した愛着もないのであるから、そう昔風なしきたりを固守するまでもないのだけれど、実を云うと、京都が近くなつたために毎年父親が節句になるとその人形をなつかしがつて、わざわざ見に来て来るのである。現に去年も一昨年<sup>おとし</sup>もそうであつたから、今年も多分忘れてはいないであらう。それを思うと、物置き<sup>もの置き</sup>の奥から一年間の埃のたまつた幾つもの箱を引きずり出す面倒は忍ぶとしても、又この間の弁天座の時のような窮屈な場面が想像せられて気が重くなつて来るのであつた。どうかして今年は飾らないで済ませる法はないかしらん？ 夫に相談して見ようかしらん？ 一体あの雛を自分はこの家を出る時に再び持つて行つたものかどうかであらう？ 残して置かれたら夫は迷惑するのではなからうか？……

今になつて急にそんなことが氣にかかり出したと云うのは、多分今年の桃の節句にはもうこの家にいないであらうとぼんやり思つていたからなのだが、それがこうして寢室の中に籠こもつていてさえそぞろに春が感ぜられる暖かい陽氣になつてしまった。美佐子は仰向きに枕へつむりを載せたまま、暫しばらく欄間に映つてゐる明るい日かげへ眼をやつていた。久しぶりに十分な眠りを食むつたので睡氣は残つていないのだけれど、手足を伸び伸びとさせているのがいつまでも好い心持で、ちよつとは蓐しとねのぬくもりを捨てることが出来ない。彼女の隣りには弘の蓐むきばが、もう一つ隣りの床の間寄りには夫の蓐しとねが敷いてありながら、その二つともとうに空つぽになつていて、瑠璃色るりの古伊万里こいまりの壺つぼに椿つばきの花の活いけてあるのが、夫の枕の向うに見える。今日は高夏と云う客もあるのだし、もう起きなければ悪いのであるが、しかし彼女がこんなにゆつくり朝寢坊をしていられることはめつたにないのである。なぜなら夫婦は弘の中にはさんで眠る習慣を、その児が生れた時分から今日までずるずるに改めずにいて、子供が起きると必ず孰方たふかかが起きないではいかなかった。そして大概の場合には、夫を寝かして置いたために彼女が先に起きるからだつた。日曜の朝なぞ少しはゆつくり寝かして置いてもらいたいのに、学校がなくてもやはり弘は七時に起きてしまうので、彼女も一旦は起きなければならぬ。尤も二三年この方、だんだん体が肥こえて来る傾きが

あるので、睡眠時間を減らした方がいいと思っているのだし、眼に借りの出来るのはそこまで苦痛に感じていないようなものの、朝寝の快感は又おのずから別である。あまり眠りが足りない過ぎるのも不安になって、たまには睡眠剤の力で昼寝をしようとすることもあるけれども、却って頭が冴<sup>さ</sup>えてしまっておちおちと睡れない。一週に一度大阪の事務所へ顔を出す日に、夫がわざと気を利かして子供と一緒に出かけられるようなことは、月に二三度あるかないかである。とにかく寝ても寝られないでも、こうして一人寢室を占領してられるのは、近頃珍しいのである。

犬の啼きごえはまだ聞えている。「リンディー」「ピオニー」と、弘は相変らず呼んでいる。その騒々しいのが、いかにも春らしくのどかにひびいて、この五六日好晴をつづけている空の色が想いやられた。いずれ今日のうちには高夏を相手に話さなければならぬのだが、それさえ今の彼女には雛人形の程度以上には気苦労の種にならなかった。心配をすれば際限がないから、すべてのことを雛人形を扱うように扱って、いつでも今日のお天気のようにうらかな気分でありたい。彼女はふと、リンディーと云うのはどんな犬かしらと、子供のような好奇心を感じた。そしてようよう、その好奇心に免じて起きようと云う気になった。

「お早う！」

と、肘掛窓の雨戸を一枚だけ開けて、彼女は子供に負けない程の声で叫んだ。

「お早う、——いつまで寝てるんです？」

「何時、もう？」

「十二時」

「うそよ、そんなじやあないことよ、まだやつと十時頃よ」

「驚いたなあ、このお天気によく今時分まで寝ていられるなあ」

「ふ、ふ、——寝坊をするのにもいいお天気よ」

「第一お客様に対して失礼じゃないですか」

「お客様だと思っていないから大丈夫だわ」

「いいから早く顔を洗って降りていらつしやい。あなたにもお土産があるんだから」

窓を見上げている高夏の顔は、梅の枝に遮られていた。

「その犬？」

「うん、こいつが目下上シャンハイ海で大流行の奴なんだ」

「素敵でしょ、お母さん、この犬はほんとうはお母さんが連れて歩くといいんですって」

「どうして？」

「グレイハウンドという奴は、西洋では婦人の裝飾犬になっているんだ。つまり此奴こいつを引っ張って歩くと一層美人に見えるんだな」

「あたしでも美人に見えて？」

「もちろん見えます、請け合います」

「だけど随分きやしやな犬ねえ。そんなのを連れて歩いたら、尚更此方が太つちよに見えちまうわ」

「犬の方でそう云うだろう、この奥様は吾輩わがはいの裝飾になるって」

「覚えてらっしゃい」

「あはははは」

と、弘も一緒になって笑った。

庭には梅の樹が五六株あった。以前この辺が百姓家の庭であつた頃からのもので、早いのは二月の初めから順々に花を持ちつづけて三月中は次から次へ咲いていたのが、今ではあらかた散り果てた中にまだ二三輪は真つ白な粒を光らしていた。二頭の犬は噛かみ合いをしない程度の隔たりを置いて、その梅の幹へそれぞれつながれているのである。ピオニーの

方もリンディーの方も吠え疲れたと云う形で、スフィックスのような姿勢で下腹をぺったり土へつけたまま、向い合つて睨めくらをしていた。梅の枝が幾つも交錯しているのはつきり見定めにくいけれど、夫は洋館のヴェランダにいらしい。紅茶の茶碗を前にして籐椅子に凭りながら大型の洋書のページをめくっているのが分る。寝間着の上に大島の羽織を纏つて、メリヤスのパッチの端を無恰好に素足の踵まで引っ張っている高夏は、庭先へ椅子を持ち出していた。

「そこに繫いで置いて頂戴、今すぐ下へ見に行きますから」  
彼女はざつと朝の風呂に漬かつてからヴェランダへ出た。

「どうなすつたの、もう御飯はお済みになつたの？」

「済んじまつたよ。待つてたんだがなかなか起きそうもないもんだから」

夫は片手で茶碗を空にささげながら、膝の上にある本を見い見い茶をすすつた。

「奥様、お風呂が沸いていますぜ」

と、高夏が云つた。

「此処の家じゃあ、奥様は一向あいそがないが、女中の方は感心だ、吾輩のために朝早くから風呂を焚きつけてくれるんだから。僕の這入つた跡でもよけりやあ這入つてらっしゃ

い」

「這入って来たのよ、今、——あなたの跡だと知らなかったもんだから」

「へえ、それにしちやあ早かったな」

「大丈夫？　高夏さん？——」

「何が？」

「あなたの跡でも支那しなの病気がうつらないこと？」

「冗談でしょう、そりやあ僕よりか斯波君の方だ」

「僕のは内地仕込みだからな、君の奴ほど危険じゃあないよ」

「お母さん、お母さん」

と、庭で弘の呼ぶ声がした。

「リンデイーを見にいらつしやいよ」

「見るのはいいけど、今朝はお前と犬のお蔭で眼がさめちやったのよ、お母さんは。——

——朝っぱらから、高夏さんまで一緒になって大きな声で怒鳴るんだもの」

「僕はこう見えてもビジネスマンだからね。上海にいと朝は五時に起きて、オフィスへ出るまでに北四川路きたしせんろから江湾キャンワンの方までギャロップして来るんだよ」

「今でも馬をやっているのかい？」

「うん、どんな寒い日でも一遍ぐるツと廻つて来ないと気持が悪いね」

「犬を此方<sup>こつち</sup>へ連れて来させたらいいじゃないか」

要はヴェランダの日だまりを動くのが厭だという形で、梅の樹の方へ立つて行く二人に云つた。

「弘や、お父さんがリンデイーを連れていらつしやいッて」

「リンデイー！」

繁みの向うの梅の枝がざわざわと揺<sup>ゆ</sup>いで、ピオニーの方が突然ひいひいしやがれ声を立てた。

「これ！ ピオニー、これ！——小父さん、小父さん、ピオニーが邪魔をして仕様がな  
いから、連れに来て下さいよ」

「いやだよ、ピオニー！ ま、そう跳び着いちや……いやだったら！」

頬<sup>ほ</sup>を舐<sup>な</sup>められそうになつた美佐子は、庭下駄のまま慌<sup>あわ</sup>ててヴェランダへ駈<sup>か</sup>け上りながら云つた。

「お前はしつツこいからいやさ、ほんとに。——ピオニーなんか連れて来ないでもよか

つたのに」

「だってお母さん、騒いで仕様がななんですよ」

「犬と云う奴はひどく焼<sup>や</sup>き餅<sup>もち</sup>焼<sup>や</sup>きだからね。――」

階段の下に立っているリンデイーの傍にしゃがんで、高夏は平手でしきりに犬の喉<sup>のど</sup>頸<sup>くび</sup>を撫でていた。

「何をしてるんだ。だにでもいるのか？」

「いや、此処をこうしてさすって見給え、実に妙だよ」

「何が妙なんだ」

「こうしているとね、この喉頸のところの手ざわりが、全然人間の此処と同じなんだよ」  
高夏は自分の喉を撫でてみては、又犬の喉を撫でた。

「美佐子さん、ちよいと触って御覧なさいよ、うそじゃないから」

「僕触って見よう」

と、母親より先に弘がしゃがんだ。

「やあ、ほんとうだあ、――ちよいとお母さんの喉に触らして、――」

「何だよ、弘、犬とお母さんと一緒にする人がありますか」

「ありますかって、君のお母さんの肌なんぞとてもこんなにすべすべしちやいないぜ。この犬に似てたら大したもんだぜ」

「じゃあ高夏さん、私の喉に触つてみて頂戴」

「まあ、まあ、一ぺんこの犬をためして御覧なさい。——どうです？　ほら？　不思議でしょう？」

「ふーん、不思議ね、全く。うそじゃないことね。——あなた触つて御覧にならない？」

「どれ、どれ」

と云つて要も降りて来た。

「成る程、こりやあ妙だな、人間にそっくりで変な気がするな」

「ね、新発見だろう？」

「毛が短くつて縹しゆす子のようだから、殆ど毛の感じがしないんだね」

「それに頸の太さがちょうど人間ぐらいなのね。あたしの頸と執方どつちかしら？」

美佐子は両方の手で輪を作つて、犬の頸と自分の頸とを測りくらべた。

「でもあたしより太いんだわ。長くつてきやしゃだもんだから、細いように見えるけれど」

「や、僕と同じだ」

と、高夏が云った。

「カラーだったら十四半だな」

「じゃ、高夏さんに会いたくなったらこの犬の喉を撫でたらいいのね」

「小父さん、小父さん」

弘がわざとそう呼びながら、もう一度犬の傍にしゃがんだ。

「あはははは、『リンディー』を止めて『小父さん』にするか。なあ、弘」

「そうしましょうよ、お父さん。——小父さん小父さん！」

「高夏さん、この犬はあたしの所より、何処か外へ持つて行ったら喜ぶ人がありそうだね」

「なぜ？」

「お分りにならない？ あたしちやあんとは知っているのよ。きっとこの喉を撫でてばかりいる人があるはしなくって？」

「おい、おい、間違いないのかい、僕の所へ持つて来たのは？」

「どうも君たちは怪しからん。子供の前でそう云うことを云うもんじゃないよ。だから子供が生意気になって仕様がな」

「あ、そう云えばお父さん、昨日神戸から連れて来る時に、この犬を見ておかしなことを云った人があるんですよ」

と、弘が話の風向きを変えた。

「へえ、何だつて？」

「じいやと二人で海岸通りを歩いていたら、酔っ払いのような人が珍しさうに附いて来て、なんや、けつたいな犬やなあ、<sup>はも</sup>鰐みたいな犬やなあつて、——」

「あはははは」

「あはははは」

「考えたねえ、鰐とは。——成る程鰐の感じだよ。リンディー、お前は鰐だよ」

「鰐のお蔭で小父さんの方は助かったらしいね」

要が小声で交ぜつ返した。

「だけど、顔の長いところはピオニーもリンディーもよく似ているのね」

「コリーとグレイハウンドとは顔も体つきも大体同じものなんだ。ただコリーの方は散毛でグレイハウンドの方は短毛なんだ。犬の智識のない人にちよつと説明しておきますがね」  
「喉はどうなの？」

「喉の話はもう止めます、あまり愉快な発見でなかったから」

「こうして二匹が石段の下に並んでいるところは三越のようね」

「三越にこんなものがあるんですか、お母さん」

「困るなあ、君は。江戸っ子の癖に東京の三越を知らないなんて。それだから大阪弁がうまい訳だよ」

「だって小父さん、東京にいたのは僕が六つの時ですもの」

「へえ、もうそうなるかねえ、早いもんだね。それきり君は東京へ行かないのか」

「ええ。行きたいんだけど、いつもお父さん一人だけで、お母さんと僕はおいてき堀なんです」

「小父さんと一緒に行かないか、ちょうど学校はお休みだし、……………三越を見せてやるぜ」

「いつ？」

「あした あさって明日か明後日あたり」

「さあ、どうしようかなあ」

それまで愉快にしゃべっていた子供の顔に、ひよいと不安の影がさした。

「行ったらいいじゃないか、弘」

「行きたいことは行きたいんだけど、まだ宿題がやってないしなあ。……」

「だから宿題を早く済ましておしまいなさいって、この間からお母さんが云ってるじゃないの。一日かかったら出来るだろうから今日じゆうにセッセとやっておしまい。そして小父さんに連れて行ってお戴き。よ、そうおし、そうおし」

「なあに、宿題なんか汽車の中だつてやれる、小父さんが手伝つてやるよ」

「幾日向うにいるんです？ 小父さん」

「君の学校が始まるまでに帰る」

「何処へ泊まるの？」

「帝国ホテル」

「でも小父さんはいろいろ用がおりになるんじゃないんですか」

「まあ、いやだ、この児は。——折角連れて行つて下さるって云うのに、何のかんのつて文句を云うことはないじゃないか。ほんとに、高夏さん、御迷惑でも連れて行つてやって下さいよ。二三日いでくれた方がうるさくなくていいんですよ」

そう云う母の眼のうちを見ながら、弘は少し青ざめた顔でにやにやしていた。東京へ連れて行くと云う話は、偶然ここで持ち上つたに過ぎないのであるが、それを弘はそう取らな

いで、あらかじめ謀<sup>しめ</sup>し合わせておかれたように感じているのに違いなかった。ほんとうに自分を喜ばしてくれるためなら、無論行きたくないことはない。が、東京から帰る汽車の中でこの小父さんが何を云い出すかも知れない。「弘君、今日帰ってももうお母さんは家にいないのだよ。小父さんは君にそのことを話すようにお父さんから頼まれて来たのだ。……」と、そう云われるのじゃないかしらん？——何だかそれが恐ろしくもあり、と云つてあまり子供らしい馬鹿げた想像のようでもあり、大人の心を測りかねて妙にうじうじしているのであった。

「小父さんはどうしても東京へいらつしやる用があるんですか？」

「なぜ？」

「用がなかったら、家にいつまでも泊まっていらつしやるといいんだがなあ。その方がみんなが面白いじゃありませんか、お父さんだつてお母さんだつて」

「家の方にはリンディーがいるからいいじゃないか。お父さんとお母さんは毎日喉を撫でているとき」

「リンディーじゃあ口をきかないから駄目だあ。ねえ、リンディー、リンディー！ お前には小父さんの代りは出来ないねえ」

弘は照れ隠しに又犬の前にしゃがんで、喉をさすってやりながらその横腹へ顔をあてて頬ずりをした。声の調子とその様子とが少し変だった。泣いているのかも知れないと大人たちは思った。家庭の中にどう云う事件が差し迫っているにもせよ、高夏がいるとみんなが呑気に冗談を云える心持になるのは事実であつた。それは高夏がそう云う風に仕向けてくれるせいもあるのだが、一つには高夏だけが総べての事情を知っていてくれる、この人の前では芝居をするには及ばないと云うことが、夫婦の胸を軽くしてくれるせいでもあつた。美佐子はほんとうに幾月ぶりか夫の高笑いを聞くのであろう。南を受けたヴェランダに差し向いの椅子に凭<sup>よ</sup>りかかり、子供と犬との戯れるのを眺めながら日を浴びているこの平和さ、——夫が語り、妻が応じて、遠来の客を迎えつつあるこのまどかさは、世間を欺くと云う必要が除かれたために、却つて自然の夫婦らしさがまだ幾らかは残っていることを示していた。そして夫婦は、これがいつまでつづくものではないにしても、こう云う場面に暫く自分たちを休らわせて、ほつと一と息入れたいのであつた。

「面白いのかい、その本は？ 大分熱心じゃないか」

「面白いよ、なかなか、……………」

要は一旦テーブルの上に伏せた洋書を取り出して、それを自分にだけ見えるように顔の前

へ立てていた。開いたところの一方のページの裸体の女群が遊んでいるハレムか何かの銅版の挿絵さしえがあるのである。

「何しろそいつを手に入れるにやあケリー・ウォルシュへ何度掛け合いに行つたか知れんぜ。ようようイギリスから取り寄せたと云うんで出かけて行くと、先は足もとを見やがつたのか二百ドルが鏹びた一文もんも負からない、この本は目下ロンドンにだつて二部とはない、それを負けろなんてお前が無理だと抜かすんだ。此方こつちは本の相場なんてものは一向知らんだし、まあまあそれもそうだろうかと云う訳で、さんざ押し問答をした揚句、やつと一割引かしたんだが、金はその代りキャツシュで即座に払えと云うんだ」

「まあ、そんなに高い本なの？」

「だつてお前、これ一冊じゃあないんだぜ、全部で十七冊あるんだぜ」

「その十七冊もある奴を、持つて来るのが又一と苦勞だつたんだよ。オブシーン・ブックだと云う話だし、イラストレーションもあると云うんで、税関に見付かったら厄介だと思つて、トランクの中へ押し込んで来たのはいいんだが、そいつが馬鹿に重いもんだから持ち運びが大変で、どのくらい骨を折つたか知れんね。よつぽ駄賃もらを貰わなけりやあ合わん仕事だよ」

「大人の読むアラビアン・ナイトって、子供のとまるきり違うんですか、お父さん」

高夏言葉におぼろげながら好奇心を感じたらしい弘は、さっきから父の手の蔭になった挿絵の方へ探るような眼を光らしていた。

「違うところもあるし、同じところもある。——アラビアン・ナイトと云うものは全体大人の読む本なんだよ。その中から子供が読んでもいいような<sup>はなし</sup>噺だけを集めたのが、お前たちの持っている奴さ」

「じゃあ、アリババの話はある？」

「ある」

「アラデインと不思議なランプは？」

「ある」

「『開け、胡麻<sup>ごま</sup>』は？」

「ある。——お前の知っている噺はみんなある」

「英語だとむずかしくはない？ お父さんはそれをお読みになるのに幾日ぐらいかかるんです」

「お父さんだって此奴をみんな読みはしないよ。面白そうな所だけを捜して読むんだ」

「しかし読むから感心だよ。僕なんかとんと忘れちゃったね。英語なんてものは商売の外には使う時がないんだから」

「それが君、こういう本だと誰でも読む気になるから奇妙だよ、こつこつ字引きを引きながらでも。……」

「いずれ君のような閑人<sup>ひまじん</sup>のやる事だな。僕みたいな貧乏人にはとてもそんな時間はないよ」

「だって、高夏さんは成金だって云う話じゃないの？」

「ところが折角儲けた<sup>もう</sup>と思つたら、又損をしちゃった」

「どうして？」

「ドルの相場で」

「そう、そう、百八十ドルはいくらになるんだい？ 忘れないうちに払って置こうか」

「いいんでしょう？ これはお土産なんでしょう？」

「馬鹿云つちやいけない！ そんな高いお土産があるもんか。これは抑<sup>そもそ</sup>も頼まれて買って来たんですよ」

「じゃあ、あたしのお土産は？ 高夏さん」

「や、そいつをすっかり忘れていたつけ。ちよつと彼方<sup>あつち</sup>へ見に来ませんか。どれでもあの  
中で好いのを上げます」

二人は高夏の部屋に充て<sup>あ</sup>られた洋館の二階へ上つた。

## その七

「まあ、臭い！」

部屋へ這入<sup>はい</sup>ると、美佐子はばたばたと袂<sup>たもと</sup>でその辺の空氣をハタいた。そしてその袖<sup>そで</sup>で顔をおさえて急いであるだけの窓を開いた。

「臭いわ、ほんとうに、高夏さんは。——今でもあれを召し上るの？」

「ええ、たべますよ。その代り始終この通り上等の葉巻を吸っているんだ」

「葉巻の匂<sup>にお</sup>いがごつちやになつてゐるからな、お変なんだわ。まあ、ほんとうに、部屋じゅうに籠<sup>こも</sup>つちまつて、何ていう臭さだろう。こんな匂いをさせるんなら、うちの寝間着を着ないで頂戴よ」

「なあに、洗濯をすりやあ直ぐに落ちますよ。着てしまったものを今更脱いだつておんな

じ事さ」

庭では別段気がつくほどではなかったのだが、締め切つてあつた洋室の中には一と晩じゅうよじ澱よどんでいた葉巻の匂いと大蒜にんにくの匂いとが、むつと鼻を刺すばかりに交つていた。「支し那なに住んだら支那人と同じように盛んに大蒜をたべるに限る。大蒜さえたべていたら風土病にかかる心配はない」——と、そう云うのが高夏たかげの持論で、上海の彼の厨ちゅうぼう房ぼうでは、毎日必ず大蒜入りの支那料理を欠かしたことがないのである。「支那人だったらきつと料理に大蒜を使う。大蒜の匂わない支那料理なんて支那料理のような気がしない」と云つて、彼は内地へ帰るのにも乾した大蒜を持つて歩いて、ときどきそれをナイフで削つてはオブラートへ包んだりして、持薬のように飲んでいた。胃腸を強くするばかりでなく、エネルギーになるんだから止められないと云うのであつたが、「高夏たかげが先の女房せんに逃げられたのは、あんまり大蒜臭かつたせいだぜ」と、要は冗談にそう云い云いした。

「後生ですから、もう少し向うへ行つていて頂戴」

「臭かつたら、鼻を摘まんでいらつしやいよ」

そう云つて片手でぱつぱつと煙を吐きながら、もう好い加減くすや屑屋へ売つても惜しくなさそうな旅行りょ擦ずれのしたスーツケースを、寝台の上へ一杯にひろげた。

「まあ、随分買い込んでいらしたのね、まるで呉服屋の番頭みたいに。――」

「ええ、今度は東京へ行くもんだからね。……お気に召したのがあればいいんだが、どうせ又悪口じゃあないのかな」

「あたしに幾つ下さるの？」

「二本か三本に願いたいね。……どうです、これは？」

「地味だわ、そんなの」

「これが地味かなあ。――一体いくつになるんですよ。老九章の番頭の説じや、

二十二三のお嬢様か若奥様向きだつて云つてたんだが」

「そんな、支那人の番頭の云うことなんかアテになりやしないわ」

「支那人て云うけれど、日本人が大勢買いに行く店で、日本人の好みはよく知っているんです。僕ところの奴なんかいつでも此処の番頭に相談するんだ」

「でも、あたし、そんなのは厭いや。――第一それは呉紹ごしょうじゃあないの」

「慾張つてゐるなあ。――呉紹なら三本だが、榎子えんすなら二本しか上げられませんよ」

「じゃあ榎子を戴くわ、まだその方がいくらか得だから。――どう？ これは？」

「それか？」

「それか？——ッて、何よ？」

「そいつは麻布の一番下の妹にやる積りだったんだ」

「まあ、驚いた、そりや鈴子さんがお可哀そうだわ」

「驚いたとは僕の方で云うこッてすよ。こんな派手な帯をしようなんて、色気違いだな」

「ふ、ふ、どうせあたしは色気違いよ」

はつと高夏が思つた時はもう遅かつたが、美佐子はその場を救うためにわざとずうずうしく笑つた。

「や、失言、失言。今のは本員の過ちあやまでありました。唯今の言葉は取り消しますから、速記録へは載せないように願います」

「駄目よ、今更取り消したつて。もう速記録へ載つてしまつてよ」

「本員は決して悪意で申したのではない。しかし故なくゆゑ淑女の名誉を傷けたるのみならず、妄りに議場を騒がしたる罪は謹んで陳謝いたします」

「ふ、ふ、あんまり淑女でもないんだけど、……」

「では取り消さないでもいいですか」

「いいわ、どうせ。——いづれ傷のつく名誉なんだから」

「そう云ったもんでもないでしょう。傷をつけないようにと云うんで、いろいろ苦心してるんでしょう」

「それは要はそうなんですけれど、そんなことを云ったって無理だと思っわ。——昨日何かお話しになったの？」

「うん」

「どう云うんでしょう、要の方は？」

「例によつて一向要領を得ないんだ。……」

二人は花やかな帯地の裂<sup>きれ</sup>が取り散らかされたスーツケースを中に挟<sup>はさ</sup>んで、寝台の両端に腰をかけた。

「あなたの方はどう云うんです？」

「どうつて、そりゃあ、……そう一と口には云えやしないわ」

「だから一と口でなくてもいい、二た口にでも三口にでもして云ってみたら」

「高夏さんは、今日はお暇なの？」

「今日は一日空<sup>あ</sup>けてあるんです、その積りで昨日の午後に大阪の用を済まして来たんだから」

「要は今日は？」

「午ひるから弘君を連れて宝塚へでも出かけようかって云ってましたぜ」

「弘には宿題をやらせましょうよ。そうして東京へ連れて行って下さらない？」

「連れて行くのは構わないが、さつき素振りがおかしかったな、泣いていたんじゃないかな」

「そうよ、きつと、あれはああ云う風なんですから。——あたし、どう云う気持ちになるものか、二三日の間でもいいから一遍子供と云うものを自分の傍から放してみたいの」

「それもいいかも知れないな、その間に斯しば波君とも十分話し合ってみるこつたな」

「要の考は高夏さんから聞かして下さる方がいいわ。二人で鼻を突き合わせると、どうしても思うように口がきけないの、或る程度まではいいけれど、それ以上に深入りすると涙ばかり出て来ちまって」

「一体しかし、阿曾君の所へ行けることは確かなんですか」

「そりや確かだわ。結局のところは二人の決心次第だと思っわ」

「向うの親や兄弟はなんにも知っていないのかしらん」

「うすうすは知っているらしいの」

「どう云う程度に？」

「まあ、要が承知でときどき会っているらしいと云うくらいな程度に」

「見て見ないふりをしてるんですね」

「そうなんでしょう。それより仕方がないんでしょう」

「じゃ、もし問題が現在以上に進んで来たら？」

「それも、まあ、——此方の方が円満に別れたあとの事ならば故障は云わないだろう、お母さんは自分の心持を分つていてくれるからッて、——」

再び庭で二頭の犬がいがみ合いを始めたらしく、きやんきやんと啼いた。

「まあ、又！」

と美佐子はちよつと舌打ちをして、膝の上でいじくつていた帯地の巻物をだらりと投げると、立つて窓際まどぎわの方へ行つた。

「弘や、犬を彼方あっちへ連れて行つたらいいじゃないの。うるさくつて仕様がありやしない」

「ええ、今連れて行くところなんですよ」

「お父さんは？」

「お父さんはヴェランダ。——アラビアン・ナイトを読んでいらっしやいます」

「お前、宿題を早くやっておしまい、遊んでいないで」

「小父さんはまだ？」

「小父さんを待つていないだつてよござんす。小父さん小父さんてまるで自分の友達のように心得ているんだね、お前は」

「だつて、宿題を手伝つて下さるつて仰<sup>お</sup>つしやつたから——」

「駄目、駄目。何のための宿題です、自分でやらなけりやいけません！」

「はあい」

と云つて、犬と一緒にばたばた駆けて行く足音が聞えた。

「弘君にはお母さんの方が恐いらしいな」

「ええ、要はなんにも云わないんですもの。——けど、別れるとなつたら、父親よりも母親の方に別れづらくはないかしら？」

「そりやお母さんは女の身一つで出て行くんだから、それだけ同情が寄るかも知れんな」

「そう思う？ 高夏さんは。——同情はあたし、要の方に集まると思うの。形の上ではあたしが要を捨てたように見えるんだから、世間はあたしを悪く云うでしょうし、子供にしてもそんな噂<sup>うわさ</sup>が耳に這入ればあたしを恨みはしないでしょうか」

「しかし、大きくなれば自然に正しい判断を下すようになりますよ。子供の記憶は確かなものだから、成人してから小さい時の事をもう一度はつきり取り出してみて、これはこうだった、あれはあであったと云う風に、その時の智慧ちえで解釈する。だから子供は油断がならない、いずれ大人になる時があるんだから」

美佐子はそれには答えないでまだ窓際にたたずんだままぼんやり外を眺めていた。梅の木の間を小鳥が一羽、枝から枝へ飛び移っている。鶯うぐいすかしら？ 鵲せきれいかしら？ と思いつながら、暫くそれを眼で追っていた。梅の向うの野菜畑で、じいやがフレームの蓋ふたを開けて、何かの苗を畑へ植えているのが見える。二階からは海は望めなかったが、青々と晴れた海の方角の空を視みつめると、何かなしにほつと重苦しいためいきが出た。

「今日は須磨へは行かなくつてもいいんですか」

「ふふ」

と彼女は、顔は見せないで、苦笑いで答えた。

「この頃は殆ど毎日だそうじゃないですか」

「ええ」

「会いたいなら行つてらっしゃい」

「あたし、そんなに擦れっからしに見えて？」

「見えると云った方が氣に入るのか、孰方かな」

「正直のことを云って頂戴」

「やはり幾らか娼婦型だ、だんだんそうなりつつあると云うことに、昨日意見が一致したんだ」

「自分でもそれは認めているの。——でも今日はいいのよ、高夏さんがいらっしやるからってそう云ってあるの。——第一お客さまを放って置いちゃ、このお土産に対しても失礼だわ」

「よくそんなことが云えるなあ、昨日は一日いなかった癖に」

「昨日はそりやあ、要が話があるだろうと思つたから。……」

「それじゃ今日は奥様デーか」

「とにかくあつちの日本間の方へいらっしやらない？ あたしお腹が減っているのよ。上らないでもあなたも見物に来て頂戴」

「帯はどれにきめるんです」

「まだきめてないのよ。あとでゆつくり見せて戴くから、店を拡げてお置きなさいよ。――」

——あなた方は御飯が済んだんだからいいでしょうけれど、あたしはペコペコなんだから。

「……………」

梯子段<sup>はしごだん</sup>を降りしなに階下<sup>した</sup>の洋室を覗いて見ると、要はいつかヴェランダから其処<sup>そこ</sup>へ移つてソファへ仰向け<sup>あおむ</sup>になりながら、まだ熱心にさっきの本を読みつづけていたが、廊下づたいに日本間の方へ行く足音に、

「どうしたい、いいのがあったかい」

と、気のなさそうな声をかけた。

「駄目なのよ。高夏さんは。お土産お土産つて触れ込みばかり大きくって、そりやあしみツたれなんだから」

「しみツたれなもんか、あなたが慾張り過ぎるんだよ」

「だって、呉糸なら三本だが、緞子なら二本だなんて、——」

「それで厭なら、たつて差し上げようとは申しません。此方<sup>こつち</sup>も大きに助かる訳だ」

「ふ、ふ」

半分は上の空らしいあいそ笑いをしただけで、しずかにページを繰る音が聞えた。

「当分はあれに夢中らしいな」

と、廊下を曲りながら高夏が云った。

「ええ、何でも珍しいうちだけで、長つづきはしないのよ。子供に玩具おもちゃをあてがったようなものなんですから」

美佐子は八畳の茶の間へ這入ると、夫のすわる座布団ざぶとんの上へ客を請じて、自分は紫檀したんのチャブ台の前にすわりながら、

「お小夜さよや、トーストを持って来ておくれ」

と、台所の方へ云いつけておいて、うしろの桑ちやだんすの茶箆ちやだんす筒すをあけた。

「紅茶がいい？ 日本茶がいい？」

「どっちでもいい。何かお菓子のうまいのはないですか」

「西洋菓子なら、ここにユーハイムがあるわ」

「それで結構。人の食うのをただ見ていたってつまらんからな」

「ああ、ここへ来たんでせいせいしたけれど、でもまだ何だか臭いようね」

「幾らかあなたにも移ったか知れんね。まあ何と云うか、明日出かけて御覧なさい」

「高夏さんと付き合っているうちは来てくれるなって云われそうね」

「だがほんとうに惚ほれ合った仲なら、大蒜にんにくの匂いぐらい何でもない筈はずだな。それでな

けりやあうそですよ」

「御馳走様。何を奢おごつて下さるの？」

「そう先廻りをされちやあ困る。ま、トーストでも上つて下さい」

「だけど、この匂においが好きになつた方があつて？」

「ありましたとも。——芳子なんぞはそうでしたよ」

「へーえ、じゃあ臭いんで逃げられたつて云うのはうそ？」

「そりやあ斯波君の出鱈でたらめ目だ。今でも大蒜の匂かいを嗅ぐと、僕のことを想い出すつて云うそうですよ」

「あなたは想い出さない？」

「出さなくもないが、ありやあ遊ぶには面白いけれど女房にする女じゃない」

「娼婦型？」

「うん」

「じゃあ、あたしとおんなじね」

「あなたのは腹からの娼婦じゃあない。娼婦と見えるのは上ツうわ面つらで、しんは良妻賢母だそうだ」

「そうかしらん？」

空つ惚とぼけているのかどうか、たべる方に余念もないと云う様子で、即席のサンドウィッチを拵こしらえるのかまけている彼女は、縦に二つに切つてある酢漬すづけの胡瓜きゅうりを細かに刻きざんでは、それと腸詰とをパンの間へ挟はさみながら器用な手つきで口の中へ運んだ。

「うまそうだな、それは」

「ええ。うまいわよ、なかなか」

「その小さいのは何だろう」

「これ？ これは肝臓レヴァのソーセージ。神戸の独逸人ドイツの店のよ」

「お客様にはそんな御馳走が出なかつたぜ」

「そりやあそうだわ。いつもあたしの朝のおかずにきまつてるんですもの」

「それを僕に一ときれ下さい。菓子よりその方が欲しくなつた」

「意地きたなねえ。さあ、口をあーんと開いて。――」

「あーん」

「ああ、臭！ フォークにさわらないようにして、パンだけ巧く取つて頂戴。……………どう？」

「うまい」

「もう上げないわよ、あたしのがなくなっちまうから」

「フオークを持つて来させたらいいのに。手ずから人の口の中へ突っ込むなんか、そう云うところが娼婦なんだな」

「文句を云うなら、人の物なんかたべないで頂戴よ」

「しかし昔はこんな無作法がやれる人じゃあなかったんだが、……………随分しとやかで、慎しみ深くって、……………」

「ええ、ええ、そうでしょうとも」

「あなたのはつまり腹からじゃあなくって、一種の虚栄心なんだな？」

「虚栄心？」

「ああ」

「分らないわ、あたし。……………」

「斯波君に云わせると、あなたを娼婦型にしたのは自分が仕向けたんだから、自分に責任があると云うんだが、僕はそうばかりも云えないと思う。……………」

「要にそんな責任を負って貰いたくないわ。やっぱり自分の生れつきにそう云うところが

あるんだと思うわ」

「そりゃあ、どんな良妻賢母だつて全然娼婦的の性質がないことはないさ。けどあなたのは今の結婚生活から来ていやしくないか。つまり人から淋<sup>さび</sup>しい女だと思われるのが厭<sup>いと</sup>なんで、努めて花やかになしようとした結果じゃあないのかな」

「それが虚栄心？」

「やつぱり虚栄心の一種さ。夫に愛せられないのを人に知られたくないと云う……そこまで云つちやあ悪いかも知れないけれど、……」

「いいえ、ちつとも構いません。どうぞ遠慮なく仰つしやつて頂戴」

「あなたは弱味を見せまいとして強<sup>し</sup>いて花やかにはしているけれど、ときどき生地<sup>きじ</sup>のさびしいところが出ることもある。外の人は気が付かないでも、斯波君にはそれが分るんじゃないのかな」

「要がいると妙にあたしは不自然になるのよ。要がいる時といない時とで、あたしの態度がいくらか違うと思ひにならない」

「斯波君がいないと、あなたは寧ろ荒<sup>むし</sup>んで見えるね」

「高夏さんでさえそうお感じになるくらいだから、きつと厭<sup>いと</sup>な気がするだろうと思つて、

要の前ではどうしても固くなってしまうの。それはどうも仕方がないわ」

「阿曾君の前では無論娼婦型の方が出るんだろうな」

「そうでしょう、きつと」

「夫婦になると、それが案外そうでなくなりはしないかしらん？」

「阿曾とだったら、そんなことはないと思うわ」

「けど、人の細君であるうちは妙によく見えるもんなんだ。今のあなたがたは遊戲の気分  
でいるんだからな」

「結婚したって遊戲の気分でいられやしない？」

「それがそう行けばいいけれどね」

「そう行くつもりよ、あたしは。——結婚と云うものを非常に真面目に考え過ぎるから  
いけないんじゃない？」

「じゃあ飽きたらば又別れるか」

「そうなる訳ね、理窟の上では」

「理窟の上でなく、あなた自身の場合には？——」

フォークを動かしていた彼女の手が、胡瓜のときれを突き刺したまま急に皿の上で止ま

った。

「——飽きる時があると思うんですか？」

「あたしは飽きないつもりなの」

「阿曾君は？」

「飽きないと思うけれど、『飽きない』と云う約束をするのは困ると云うの」

「それでもいいんですか、あなたは？」

「あたしにはその気持はよく分るのよ。そりや『飽きない』って云ってしまえばいいんだけれど、自分は恋愛の経験は今度が始めてなんだから、今のところでは永久に変らないような気がしていても、実際それがどうなるものか、先のことは自分にも分っていない。自分に分らないことを約束したって無意味だし、うそをつくのは不愉快だからって云うんですの」

「しかしそう云うもんじやないがな。先のことなんか考えないで、一途に『飽きない』と云い切れるだけの真剣さがなけりや、……」

「それは性質じやあないかしら。いくら真剣でも、自分を解剖するたちの人だったら、なかなかそうは云えないんじゃない？」

「僕だったら、結果はうそをつくことになつてもその時はちゃんと約束するな」

「阿曾は又、なまじ約束なんかすると、それがあつたために却つていつも、『飽きやしないか、飽きやしないか』と云う気がするに違ひない。自分の性質ではきつとそうなるからつて、それを恐れているんです。だからお互に約束をしないで現在のままで一緒にいるのが一番いい。自分の氣持を縛らないでくれた方が結局永くつづくからつて——」

「そうかも知れないが、どうも少し……」

「何なの？」

「遊戲氣分が過ぎるようだな」

「あたしには性格が分つているから、そう云われた方が安心なんだけれど」

「斯波君にはそれを話したんですか」

「話さないわ。今日までこんな話が出る機会もなかったし、話したつて無駄なんですから。……」

「だけでも、そりやあ乱暴だなあ、将来の保証もなしに別れると云うのは。……」  
自然と声が激して来るのをこらえながらそう云いかけた高夏は、その時両手を膝に置いてしずかに両眼をしばだたいている美佐子に氣づいた。

「…………僕はそんなじやあないと思つた。…………そう云つちやあ失礼だが、夫を捨てて行くと云う以上は、もう少し真面目なんだろうと思つていたんだ」

「不真面目じやあないことよ、あたし。…………孰方<sup>どっち</sup>にしたつて別れた方がいいんですから。……………」

「だからこうなる前にもつとよく考えりやあよかつたんだ」

「考えたつておんなじ事だわ。夫婦でもないのに此処にいるのは辛い<sup>つらい</sup>んですもの。……………」  
両肩を張つて、うなじを垂れて、涙を止めるのに一生懸命になつてはいたけれど、光つた物が一滴<sup>てき</sup>膝の上に落ちた。

## その八

要<sup>かなめ</sup>はさつきからオブシーン・ブックのオブシーンである所以<sup>ゆえん</sup>のところを見付け出そうとしているのだが、彼の手にしている一巻のうちには第一夜から第三十四夜までが収めてあつて、菊版で三百六十ページもあるのだから、なかなか捜すのに手間がかかる。挿絵で釣られても中味は案外平凡な話が沢山ある。「ユーナン王とドウバン聖者の話」、「三つの林<sup>り</sup>

檣さんの話」、「ナザレの仲買人の話」、「黒き島に住む若き王の話」、——と、そう云う風に一々標題を漁あさつただけでは、どれが一番好奇心を充たすに足るものか見当が付かない。もともとこの本は今まで完全な歐洲語訳がなかったと言われる亜刺比亜アラビアの物語を、リチャード・バアトンが始めて逐字的に英語に移して、バアトン俱樂部クラブから會員組織で出版した限定版であつて、殆ど各ページ毎に附いている親切な脚注を拾い読みして行くと、彼には何の興味もない語学上の研究もあるけれども、中には亜刺比亜の風俗習慣に関する解説や、多少話の内容のうかがわれる記載がないこともない。たとえば「大きく空洞うつつになっている臍へそは美しいものとされているばかりでなく、幼児にあつては健やかすこに生い立つ兆しるしであると思われている」と云うのがある。「二枚の門歯——但し上顎じやうがく部に限る、——の間にはほんのかすかな隙間すきまのあるのを、亜刺比亜人は美しいと感ずるのである。どう云う訳か分らないが変化に対するこの種族特有の愛情であろう」と云うのもある。——  
 「王様お抱えの理髪師は高位高官の人間であるのが普通であつて、それは主権者の生命を指の間に預かる者だからと云う至極尤もな理由に依る。嘗かつて或る英国の淑女で、そう云う印度インドの貴族的フィガロの一人と結婚した者があつたが、彼女は夫の官職が何であるかを知るに及んで、がっかりして興がさめたと云う話がある」

「東方の回教国では、既婚者と未婚者とを問わず若い婦人の一人歩きを禁じていて、犯す者があれば巡査はそれを捕縛していい権利がある。これは密通を防ぐのに有効な手段であつて、嘗てクリミア戦争の時分に、英吉利、仏蘭西、伊太利等の士官が数百人コンスタンチノープルに駐屯していたことがあり、彼等のうちには土耳其の婦人を手に入れたと云つて得意になつた者も少くなかつたが、実はその中に一人の土耳其人もいなかったに違いないと私（バアトン）は信じる。彼等に征服された女は悉くギリシア人か、ワラキア人か、アルメニア人か、さもなければ猶太人である」

「このところはこの美しく物語られた美しい物語中での唯一の汚点で、レーンが此処を訳したために擯斥されたのは一往当然なことである。……」

要ははつとして、とうとう見付けたなと思ひながら、急いでその注を読み下した。――

「……レーンが此処を訳したために……一往当然なことである。しかし此処でもその猥雑さは、われわれの古い時代の舞台のために書かれた戯曲（たとえばシェークスピアのヘンリー五世の如き）に比べてみて大した相違はないであらう。ましてこの夜話のような物語は、男女の席で朗読されたり暗誦されたりするものではないのである」

要はこの注の附いている「バグダッドの三人の貴婦人と門番の話」と云うのを直ぐ読みか

けたが、ものの五六行も進んだ時分に茶の間の方から足音が聞えて、そこへ高夏が這入つて来た。

「君、アラビアン・ナイトは後にしないか」

「どうしたんだい？」

と云いながら、要はソファから起きようとせず、残り惜しそうに開いたままの本を脚の上に伏せた。

「意外なことを聞いて来たんだよ」

「意外なことって？………」

二三分間、黙って高夏はテーブルのまわりを往ったり来たりした。葉巻の煙が、その歩いたあとに霞かすみのようなすじを曳ひいた。

「美佐子さんには何も将来の保証がないんだそうじゃないか」

「将来の保証が？………」

「君も呑気のんきだが、美佐さんも呑気過ぎる。………」

「何だよ一体？ 藪やぶから棒でちよつと分りかねるんだが、………」

「阿曾との間に、いつまでも愛情が変らないと云う約束はしてない。阿曾は恋愛と云うも

のは飽きる時もあり得るんだから、将来のことは約束出来ないと言っているし、美佐子さんもそれを承知だと云うんだ」

「ふうむ、……………そう云うことを言いそうな男ではあるんだがね。……………」

要はとうとうアラビアン・ナイトを思い切つて、やつとソファから身を起した。

「しかし、……………僕は直接知らんのだからどうとも云えないが、……………そんなことを云う男は不愉快だな。見ように依つては随分悪く取れなくもない」

「けども君、悪い奴なら女の機嫌きげんを取るようなことを云うだろうが、それをそう云わないところに正直さがありはしないか」

「僕はそう云う正直は嫌いだ。正直じゃあない、不真面目なんだ」

「君の性質ではそうだろう。しかしどんなに思い合つた仲だつていつかは飽きる時が来る。永久に同じ愛情で通そうと云うのは無理なんだから、約束出来ないと言うのにも理窟はあるよ。僕が阿曾でもやつぱりそう云うかも知れんね」

「それじゃ飽きたらば又別れるでいいのかい？」

「飽きると云うことと、別れると云うこととは別さ。飽きたからつて、又おのずから恋愛ではない夫婦の情愛が生ずると思う。大概の夫婦はそれでつながっているんじゃないか」

「阿曾と云う男が立派な人間でありさえすればそれでよかろう。けども飽きたからと云って放り出されたらどうなるんだ。その保証が附いていないんじゃないんじやあんまり心細いんじゃないか」

「まさか、そんな悪い人間じやあないだろうよ。……………」

「一体、こうなる前に秘密探偵にでも頼んで調べたことがあるのかね？」

「秘密探偵に頼んだことはない」

「じゃ外の方法でも調べたかね」

「別に特に調べると云うようなことはしなかった。……………そう云うことは僕は嫌いだし、

つい面倒だもんだから、……………」

「君と云う人にも呆れるな<sup>あき</sup>」

高夏は吐き出すように云った。

「——相手はたしかな人間だと云うから、無論一と通り調べてあるんだと思っただが、それじやあんまり無責任じやないか。若しも色魔のような奴で、美佐子さんを欺<sup>だま</sup>しているんだつたらどうするんだい？」

「そう云われると何だか不安になるけれどね。……………しかし会った時の感じでは、大丈夫

そう云う奴じやあないよ。それに僕は、阿曾よりも実は美佐子を信じているんだ。美佐子は子供じやあないんだから、善い人間か悪い人間か見分けるぐらいの分別はあるだろう。美佐子がたしかだと云うんだから、それで安心してゐるんだ」

「そいつは余りアテにはならんね。女と云うものは惻巧りこうなようでも馬鹿だからな」

「まあ、そう云うなよ、僕は成るべく悪い場合を考えないようにしているんだから」

「そう云うところが君は実にやりつ放しで、変な人だな。そう云う点を曖昧あいまいにしておくから別れるのにも思い切りが悪くなるんだ」

「けど、………最初に調べりやあよかつたんだが、今になつちやあ仕方がないな」

要はまるで他人事ひとごとのように云い捨てながら、再びものうげにソファへ倒れた。

いったい阿曾と美佐子とのあいだにどれほどの情熱が燃えているものか、要には想像が付かないのである。それを想像することはいくら冷やかな夫であつても面白はすからう筈はないので、ときどき好奇心の動くことはありながら、彼は努めてその臆測から眼を閉じていた。そもその起りはざつと二年も前のことである。或る日大阪から帰つて来ると、ヴェランダで妻と相對している見馴みなれない一人の客があつて、「阿曾さんという方」と美佐子が簡単に引き合わせた。と云うのは、夫は夫、妻は妻で、めいめい交際の範圍を作つて自由な

行動を取ることがいつしか習わしになっていたので、別にそれ以上の説明は必要でなかったからだけれども、その頃彼女は退屈しのぎに神戸へ仏蘭西語の稽古<sup>けいこ</sup>に行っていて、そこで友達になつたらしい話しぶりであつた。要には当時ただそれだけが分つただけで、その後妻の身だしなみが前よりは念入りになり、鏡の前に日々新しい化粧道具がふえて行くようになったことなどは、全く見落していたくらい無頓着<sup>むとんじやく</sup>な夫だったのである。彼が初めて妻の素振りに気が付いたのは、それから一年近くも過ぎてからだつた。或る晩彼は、額の上まで夜着をかぶつて寝ている妻が、かすかにすすり泣くのをきくと、長いことそのすすり泣きを耳にしながら明りの消えた寢室<sup>やみ</sup>の闇を睥<sup>み</sup>つめていた。妻が夜中に嗚咽<sup>おえつ</sup>の声を漏らすことは、それまでも例がなかつた訳ではない。結婚してから一二年の後、次第に性的に彼女を捨てかけていた当座、かれはしばしば女心の遣<sup>や</sup>る瀬なさを訴えているこの声に脅かされた。そうして声の意味が分れば分るほど、可哀そうだと思えば思うほど、なおさら自分と妻との距離の遠ざかるのが感ぜられ、慰める言葉もないままに黙つてそれを聞きすごしたものであつた。彼はこれから生涯のあいだ、何年となく夜な夜なこの声に脅かされることを思うと、もうそれだけでも独り身<sup>ひと</sup>になりたかつたのであるが、いいあんばいに妻は段々あきらめてしまつて、それから数年来と云うものはついぞ聞かずに済んでいたの

にそれをその晩は久しぶりで聞いたのである。彼は最初は自分の耳を疑い、次には妻の心を訝あやしんだ。今更になつて何を彼女は訴えようとするのであろう。あきらめたように見え  
たのは実はあきらめたのではなく、いつかは夫の情なさけのかかる折もあろうかと長い歳月をこ  
らえていたのが、とうとう待ちきれなくなつたのであろうか。彼は「何と云う馬鹿な女だ」  
と腹立たしくさえ感じながら、矢張昔のようにだまつてそれを聞き過した。が、そのうち  
毎晩のようにすすり泣くのを止めないのが余りにも不思議なので、「うるさいじゃないか」  
と、一ぺん叱しかつてみたことがあつた。すると美佐子は彼の叱しつ咤たをキツカケにして一層声を  
放つて泣いた。「堪か忍にして下さい、あたしあなたに今日まで隠していたことがあるのよ」

——と、その声の下から彼女は云つた。それは要には意外でないことはなかつたけれど  
も、同時に繫けい縛ばくを解かれたような、不意に肩の荷が除かれたような気安さを与えないで  
もなかつた。自分はやつとひろびろとした野原の空気を胸一杯に吸うことが出来る、——  
——彼はそう思つたばかりでなく、その時し蔭ねに仰あおむ向けになつて、實際ふかぶかと肺の底まで  
息を吸つた。彼女の愛は、今までのところでは心臓だけのものであつて、それ以上には進  
んでいないと云うことだつたし、彼もその告白を疑いはしなかつたけれども、しかしそれ  
にしても道德的に彼の負いめを相殺そうさいするには事が足りた。彼女にそう云うものが出来た

のは、自分が仕向けたからではないか、——そう考えると己れの卑劣さを咎めない訳には行かなかつたが、正直のところ、いつかはこう云う時の来るのをひそかに望んでいただけであつて、そんな望みを口へ出したこともなければ、進んで機会を作つてやった覚えもない。ただどうしても妻を妻として愛し得られない苦しさの余りには、この気の毒な、可憐な女を自分の代りに愛してくれる人でもあつたらばと、夢のような願いを抱きつつあつたに過ぎない。しかも美佐子の性質を思うと、よもやその夢が事実になろうとは予期していなかつたのであつた。妻も阿曾の事を打ち明けてから、「あなたにも恋人があるんじゃないの?」ときいた。今では彼女も彼が望むと同じようにそれを望んでいたのであろう。けれど要は、「僕にはそんな者はない」と答えた。彼が彼女に済まない事をしているのは、妻には貞操を守らせながら自分は守つていないと云うこと、——「そんな者はない」にも拘わらず、ほんの一時の物好きと肉体的の要求とから、いかかわしい女を求めに行くと云うことだけだつた。要に取つて女というものは神であるか玩具であるかの孰れかであつて、妻との折り合いがうまく行かないのは、彼から見ると、妻がそれらの孰れにも属していないからであつた。彼は美佐子が妻でなかつたら、或は玩具になし得たであらう。妻であるが故にそう云う興味が感ぜられなかつたのもあろう。「僕はそれだけ、まだお前を

尊敬しているんだと思う。愛することは出来ないまでも慰み物にはしなかったつもりだ」と、要はその晩妻に語った。「そりやあたしだってよく分っているわ。有りがたいとさえ思っているわ。………だけどあたしは、慰み物にされてでももつと愛されたかったんです」妻はそう云つて激しく泣いた。

要は妻のその告白を聞いてからでも、決して彼女を阿曾の方へとそそのかすようにはしなかった。ただ自分には妻の恋愛を「道ならぬ恋」であるとする権利はない、自分はそれが何処まで進展しようとも、是認するより仕方がないと云う意味を云った。が、そう云う彼の態度が間接に美佐子をそそのかす働きをしたことは確かであろう。彼女の求めていたものは、そう云う夫の物分りのよさ、思いやりの深さ、寛大さではないのであった。「あたし自分でもどうしていいか分らないで、迷っているのよ。あなたが止せと云つて下されば今のうちなら止せるんです」と彼女は云った。もしその時に圧制的にでも、「そんな馬鹿なことは止せ」と云つてくれたらば、その方がどんなに嬉しかったであろう。「道ならぬ恋」だとは云われないまでも、せめて「為めにならないから」とでも云つてくれたら、それだけで阿曾を思い切りもしたであろう。彼女の望んでいたものはそれであった。自分をこうまで疎んじている夫から、愛されようとは願つていなかったものの、どうにでもして

自分の恋を抑えつけてもらいたいのが本心であつた。しかし夫は「どうしたらいいでしょう？」と詰め寄って行くと、「どうしていいか僕にも分らない」と、ためいきをつくばかりであつた。そうして阿曾の出入りすることにも、彼女の外出そとでが頻ひんぱん繁になり帰りがおそくなることにも、何一つ干渉もしなければ厭いやな顔も見せなかつた。彼女は生れて始めて知つた恋と云うものを、自分でどうにか始末するより道がなかつた。

すすり泣きのこえがその夜の告白のあつたのちにもなおおりおりは寢室の闇にひびいたことがあつたのは、この石のようにつめたい夫から突き放されながら、さすが一途いちずに愛慾の世界へ身をおとし込む勇氣もなくて、思い余つた結果であつた。殊ことに男から手紙が来たり、何処どこぞで会つて来たりした晩なぞには、夜じゆうしくしくと忍び音に泣くのが夜具の襟えりから洩もれつづけて、明け方になるまで止まなかつた。そして或る朝、「ちよいとお前に話がある」と要が彼女を洋館の階下の部屋へ呼んだのは、それから半年ばかりも過ぎた時分だつたであらうか。テーブルの上の水盤に支那水仙が活いけてあつて、電気ストーヴにあたつていたのを覚えてゐるから、何でも冬の、美しく晴れた日のことだつた。その前の晩もやはり夜通し泣きつづけて、彼女も要もほとんど寝られなかつたので、さし向いになつた夫婦どつちは孰方はも脹はれぼつたい眼をしていた。実は要はゆうべのうちにも口を切ろうかと思つた

のだが、弘が眼をさます心配もあり、暗い場所だとそれだけでなく涙を用意している妻が一層感傷的になりそうなので、わざとさわやかな朝の時間を選んだのであった。「このあいだから考えていたんだがお前に少し相談があるんだ」と、彼が出来るだけ軽快な、ピクニックにでも誘うような気楽な口調で切り出したとき、「あたしもあなたに相談したいことがあるのよ」と、鸚鵡返しに美佐子もそう云って、睡眠不足の眼のふちで微笑しながら煖炉の前へ椅子を寄せた。そして互にその胸の中を打ち明けてみると、二人は大体同じような経過を辿って同じような結論に達していた。とても自分たちは相愛し合うことは出来ない、互の美点は認めているし、性格も理解しているのだから、これから十年二十年を過ぎ、老境にでも入ったらば或は肌が合うようになるかも知れないけれども、そんなアテにもならぬ時を待ったところで仕様がないと夫が云えば、「あたしもそう思う」と妻が答えた。子供の愛に惹かされて自分たちの身を埋れ木にするのが愚かしいと云う考にも二人ながら行き着いていた。けれどそこまでは来ていながら、「別れたいのか」と一方が問えば、「あなたはどうか？」と一方が問い返す。つまり孰方も別れた方がいいのを知りつつそれだけの勇気がなく、ただ自分たちの弱い氣質を呪っては当惑している状態にあった。

夫の腹の中を云えば自分の方から妻を追いつ理由はないし、積極的に出れば出るだけ寝

ざめが悪いに違いないから、なるべくならば受け身でありたい。自分はさしあたり誰と結婚したいと云う相手があるのでもないのだが、妻にはそれがあつたのだから、妻の方から覺悟をきめてもらいたかつた。ところが妻の云い分は、夫にそう云う相手がなく、自分ばかりが幸福になるのでは別れづらい。自分は夫に愛してもらえなかつたとは云え、夫を無情人だとは思っていない。上を望めば切りのない話だが、ずいぶん世間には不仕合わせな妻も多いことだし、それから見れば自分などは愛せられないと云うだけで外に不足はないのでありながら、その夫を捨て子を捨ててまでもと云うほどの気にはなりきれない。要するに夫も妻も、別れるならば自分の方が捨てられる側になることを願ひ、どっちも自分が樂な方へと廻りたかつた。しかし自分たちは子供でもないのに、何がそんなに辛いのだろう。理性のよしとするものを実行することが出来ないのは、何を恐れているのだろう。結局のところは過去のきずなを断ち切るだけのことでないか。その悲しみはただその刹那（せつな）のものであつて、多くの人の例を見れば、長いあいだにはだんだんうすらいで行くのである。「僕たちは先のことよりも目前の別れが恐（こわ）いのだね」と、夫婦は語り合つて笑つた。要は最後に、「では僕たちは自分たちにも分らないように極く少しずつ別れる手段を取らうではないか」と云う提議をした。昔の人は離別の悲しみに打ち克（か）てないのは兒女の情だ

と云うかも知れない。けれども今の人間はたとい僅かな苦痛にもせよ、もしそんなものを味<sup>あじわ</sup>わないで同じ結果が得られるならば、その道を取るのを賢いとする。自分たちは自分たちの臆病を耻<sup>は</sup>じるにはあたらない。臆病ならば臆病のようにそれに適応した方策に依つて幸福を求めるがいい。そこで要はあらかじめ頭の中へ箇条書きにしておいた下のような条件を出して、「こうしてみたらどうか」と云った。――

一、美佐子は当分世間的には要の妻であるべきこと。

一、同様に阿曾は、当分世間的には彼女の友人であるべきこと。

一、世間的に疑いを招かない範囲で、彼女が阿曾を愛することは精神的にも肉体的にも自由であること。

一、斯くして一二年の経過を見、愛し合う二人が夫婦になつてうまく行きそうな見込みがつけば、要が主となつて彼女の実家の諒<sup>りようかい</sup>解を得るようにし、世間的にも彼女を阿曾に譲ること。

一、それ故ここ一二年の間を彼女と阿曾の愛の試験時代とする。もしその試験が失敗し、両者のあいだに性格の齟齬<sup>そご</sup>が発見され、結婚しても到底円満に行かないことが認められたら、彼女はやはり従来 of 通りの要の家にとどまること。

一、幸いにして試験の結果が成功し、二人が結婚した場合には、要は二人の友人として長く交際をつづけること。

彼はそれを云い終ったとき、妻の顔色がちようどその朝の空のようにかがやきに充ちて来るのを見た。彼女は一言「有りがとう」と云った。その眼<sup>まぶた</sup>瞼からはぽたりと嬉し涙が落ちた。ほんとうにそれは何年ぶりかで心の底からわだかまりが取れ、始めてほっと天日を仰いだと云う風であつた。妻のよろこびを知った夫も同じように胸のつかえが下った気がした。連れ添うてから長のとしつき奥歯に物の挟まったような心地でばかり過して来た夫婦は、皮肉にも別れ話の段になつてようよう互にこだわりがなく打ち解けることが出来たのである。

云うまでもなくそれは一種の冒険ではあるけれども、しかしそう云う風にして眼をつぶりながら次第に抜き差しのないハメへ身を落し込んで行くのでなければ、夫も妻も別れる道はないのであつた。阿曾もそれには異存のあろう筈はなかつた。要は彼にその考を打ち明けたとき、「西洋ならばこう云うことはそうやかましい問題にもならない国があるでしょう。けれど日本の今の社会ではなかなかそうは行きにくいから、この計画を実行するには余程上手に立ち廻らなければならぬと思います。それには何よりもわれわれ三人が

互にかたく信じ合うことが第一だ。どんなに親しい友達の中でもこの問題ではとかく誤解が起りやすい。われわれはめいめいずいぶんデリケートな関係に立っているのだから、互の感情を傷けないように、そして一人の不注意のために外の二人が窮地に陥ったりしないように、よくよく気をつけて行かなければならない。どうかあなたもそのつもりでいて下さるように」と念を押したが、その相談の結果として阿曾は成るべく要の家庭へは姿を見せないようになり、美佐子の方から「須磨へ行く」ことになったのであった。

その時以来要は二人の關係に文字通り「眼をつぶって」しまった。もうこれでいい、このままじつとしていれば自分の運命はひとりでにきまる。——彼は流れに身をまかせて、事の成り行きが運んでくれるところまで、素直に、盲目に、くつついて行くように努める以外に、自分の意志を働かせようとしなかった。ただそうなってもなお恐ろしいのは試験時代の期間が過ぎて、いよいよと云う最後の時が迫りつつあることだった。いかになだらかに、ずるずるべつたりに押し流されて行こうとしても、一度は別離の場面を廻避することは出来ない。見わたしたところ穩かなような船路にも、或る一箇所で暴風帶をくぐらなければならぬのである。そこへ来た時は潰<sup>つぶ</sup>っている眼をどうしても開けさせられるのである。そう云う予感<sup>予感</sup>は臆病な彼をますます一時逃れにさせ、やりつ放しにさせ、横着にさ

せる結果となつた。

「君は一方では別れるのが辛い辛いと云う、そして一方ではそんな無責任なことをしている、それじゃあだらしがなさ過ぎるな」

「だらしがないのは今に初まつたことじゃあないさ。——しかし僕は思うんだが、道德と云うものは個人々々で皆いくらかずつ違つていい。人は誰でもその性質に適するよな道德を作つて、それを実行するより外に仕方がないね」

「そりやあその通りに違いないが、——で、君の道德ではだらしのないのが善だと云うことになるのかね？」

「善ではないかも知れないが、生れつき決断力の乏しい者は強<sup>し</sup>いて性質にさからつてまでも決断する必要はない。そう云うことをしようとすると、徒らに犠牲<sup>いたず</sup>が大きくなつて、終局に於いて却つて悪いことが起る。だらしのない人間はやはりだらしのない性質に應じて進退する道を考えるべきだ。そこで僕の道德を今の場合にあてはめると、別れると云うことが終局の善なんだから、最後にそこへ行けさえすれば過程はどんなに廻りくどくつても差支えない、僕は実はもつとだらしがなくなつても構わないと思つてゐるんだ」

「そんなことを云つてゐると、終局の善に達するまでに一生かかつてしまふかも知れんぜ」

「ああ、僕は真面目にそれを考えたことがあるんだよ。西洋の貴族の間ではかんつう姦通は珍しくないという。しかし彼らの姦通というのは夫婦が互に欺き合っているのではなく、暗黙のうちに認め合っている場合、——つまり現在の僕の場合と同じようなのが多いんじゃないか。日本の社会が、許しさえすれば僕は一生この状態をつづけていたっていいんだくれどな」

「西洋だつてそんな流儀は時勢おくれだよ、宗教の威力がなくなってしまうているんだから」

「宗教に縛られているばかりじゃあない、やつぱり西洋人にしても過去のきずなを余りに判然と断ち切るのが恐ろしいんじゃないのかな」

「どうしようと君の勝手だが、僕はもう御免を蒙こうむるぜ」

そうにべもなく云い放ちながら、床に落ちたアラビアン・ナイトを、今度は高夏が拾った。  
「なぜ？」

「なぜって、分り切ってるじゃないか。そんな曖昧な離縁話に他人が口を挟みようはないじゃないか」

「そりゃあ困る」

「困るのは仕方がなからう」

「仕方がなくつてもとにかく君に逃げられちゃあ困る。捨てておかれるとなお曖昧になるばかりだ。ね、後生だから頼むよ」

「まあ、まあ、今夜弘君を連れて東京へ行つて来るよ」

高夏は取り合わないで、そつけなくページを繰った。

## その九

「うぐいすも、都の春にあいたけと、きは淀川<sup>よどがわ</sup>へ上り舟、……………」

お久は絃<sup>いと</sup>を三下<sup>さんさが</sup>りにして地唄<sup>じうた</sup>の「あやぎぬ」をうたつていた。老人はこの唄が好きなのである。地唄と云うものは概して野暮なものであるのに、この唄には何処<sup>どこ</sup>か江戸の端唄<sup>はうた</sup>のような意気なところのあるのが、上方に降参したようでも本来は江戸育ちである老人の趣味に合うのかも知れない。そして「上り舟、……………」のあとの合いの手がいい。平凡なようだが、じつと身にしみて聞いていると淀川の水の音がひびくようだと云う。

「……………」きは淀川へ上り舟、ささえられたる北風に、身はままならぬ丸太ぶね、岸の柳に

引きとめられて、歩みならわぬ陸地をも、上りつ戻り幾たびか、一と夜をあかす八軒家、  
 雑魚寝ざこねをおこす網嶋あみじまの、告ぐる鳥からすか寒山寺、……」

明け放たれた二階の縁からは船着き場に沿うた一とすじの路みちをへだててもう暮れがたの海のけしきが展ひらけていた。淡たんの輪わがよいの船であらう、「紀淡丸」と記した汽船が棧橋さんばしを離れて行くのだが、四五百噸トンにも足りないほどの船体がぐるりと船首を向き変えるとき、入り江の岸が船尾と擦れ擦れになるくらいにもその港は小さいのである。要は縁側に座ざ布団ぶとんを敷いて、港の出口をふさいでいる砂糖菓子のように可愛いコンクリートの防波堤を眺ながめた。堤の上の同じように可愛い燈籠とうろうにはもう灯がともっているらしいけれど、水の面はまだ浅黄色あやぎに明るく、二三人の男の燈籠の根もとにしゃがんで釣りを垂れているのが見える。別に絶景と云うのではないが、しかしこう云う南国的な海辺の町の趣は、決して関東の田舎いなかにはない。そう云えばいつぞや常陸ひたちの国の平潟ひらかたの港に遊んだ時、入り江を包む両方の山の出鼻に燈籠があつて岸にはずっと遊女の家が並んでいたのを、いかにも昔の船着場ふなつきばらしい感じだと思つたことがあるのは、かれこれ二十年も前だったろうか。が、平潟ひらたの廃はい頽たい的なのに比べたら、ここはさすがに晴れやかで、享樂的である。多くの東京人がそうであるように孰方どちうかと云えば出不精の方で、めつたに旅行などしたことのない要

は、一と風呂浴びて宿屋の欄干らんかんに倚よつてゐる浴衣ゆかたがけの自分の姿をかえりみると、ほんの海を一つ越えた瀬戸内せとうちの島へ渡つたばかりで、なんだか馬鹿にはるばると来たような心地がする。実を云うと、出がけに老人が誘つた折には彼はそんなに気が進んではいなかった。何しろ老人の計画と云うのは、お久を連れて淡路の三十三箇所を順礼しようとするのであるから、又してもアテられることであろうし、折角の老人の楽しみを邪魔するでもなし、遠慮した方がいいと思つたのに、「なに、そんな気がねには及ばない、私たちは洲本すもとに一日二日泊まつて、人形芝居の元祖である淡路浄瑠璃じようろうりを見物する。それから順礼のいでたちになつて霊場廻りをするのだから、せめて洲本まで付き合いなさい」と、老人もすすめればお久も口を添えたので、この間の文楽座の印象もあり、その淡路浄瑠璃について好奇心が動いたのであつた。「まあ、酔興かれんね、それじゃあなたも順礼の支度をなすつたらどう」と、美佐子は眉まゆをひそめたが、可憐かれんなお久が伊賀越の芝居のお谷のようないじらしい姿になるさまを想うと、それと一緒に御詠歌をうたつて鈴を振りながら旅をしようという老人の道楽が、ちよつと羨ましくもないこともなかつた。聞けば大阪の通人なぞのあいだでは、好きな芸者を道連れに仕立てて、毎年淡路の島めぐりをする者が珍しくないと云う。そして老人も今年を皮切りにこれから年々つづけると云つて、日に焼けるのを恐れている

お久とは反対にひどく乗り気になっていたのであった。

「何とか云いましたね、今の文句は？『一と夜をあかす八軒家』か。——その八軒家と云うのは何処にあるんです」

べっこう色の水牛の撥ばちを畳の上にお久が置いたとき、老人は宿の浴衣の上へ、五月と云うのに藍微塵あいみじんの葛織くすおりの袷羽織あわせを引っかけて、とろ火にかけてある錫すずの徳利にさわってみては、例の朱塗りの杯を前に、気長に酒のあたたまるのを待っていたが、

「成る程、要さんは江戸っ児だから八軒家は知らないだろう」

と云いながら、火鉢の上の銚子ちようしを取った。

「昔は大阪の天満橋の橋詰から淀川通いの船が出た。その船宿のあつた所なんだね」

「はあ、そうなんですか、それで『一と夜をあかす八軒家、雑魚寝を起す網嶋』ですか」

「地唄と云う奴は長いのは眠くなるばかりであり感心しないもんだ。やっぱり聞いていて面白いのは、このくらいの長さの唄物に限る」

「どうです、お久さん、何か今のようなのをもう一つ、……」

「なあに、これのは一向駄目なんでね」

と、老人は傍から引き取って、

「年の若い女がやると、唄が綺麗になり過ぎていけない。三味線にしてももつときたなく弾くようにって、いつも云うことなんだけれど、その心持が呑み込めないで、まるで長唄でも弾くような氣でいるんだから、……」

「そないお云やすなら、あんた弾いてお上げやすな」

「まあ、いい。もう一つお前がやって御覧」

「かなわんわ、わてエ。……」

お久は甘える子供のように顔をしかめて、つぶやきながら三の絃を上げた。

全く彼女の身になったらば口やかましいこの老人の伽をするのも大概ではなからう。老人の方では眼にも入りたいほど可愛がつて、遊芸の事、割烹の事、身だしなみの事、何から何まで研ぎをかけて、自分が死んだら何処へなりと立派な所へ縁づけられるように丹精をこめているのだけれど、そう云う時代おくれの躰が若い身空の女に取ってどれほどの役に立つであろう。見る物と云えば人形芝居、たべる物と云えば蕨やぜんまいの煮つけでは、お久も命がつづくまい。たまには活動も見たかろうし、洋食のビフテキもたべたいであらうに、それを辛抱しているのはさすがに京都生れであると、要はときどき感心もすれば、この女の心の作用を不思議に思うこともある。そう云えば老人は、ひとところ投げ入れの活

け花を覚え込ませるのに夢中であつたが、それがこの頃は地唄になつて、週に一度ずつ、わざわざ大阪の南の方に住んでいる或る盲人のけんぎよう検校もとの許まで二人で稽古けいこに行くのである。京都にも相当の師匠はあるのに大阪流を習うというのは、それにも老人の味噌みそがあつて、彦根屏風びやうぶの絵姿などからひねり出した理窟りくでもあろうか、地唄の三味線というものは、大阪風に、膝へ載せないで弾くのがいい。どうせ今から習つたのでは上手になろう筈もないから、せめて弾く形の美しさに情趣を酌くみたい。若い女が畳の上へ胴を置いて、からだを少しねじらせながら弾いている姿には味わいがある、とそう云つては、お久の三味線を聞くと云うよりも眺めて楽しもうというのであつた。

「さあ、そう云わないでもう一つどうぞ、……………」

「何にしましよ」

「何でもいいが、なるべく僕の知つているものにして下さい」

「そんなら『ゆき』がいいだろう」

と、老人は杯を要にさした。

「『ゆき』なら要さんも聞いたことがあるだろう」

「ええ、ええ、僕の知つてゐるのは『ゆき』と『くろかみ』ぐらいなものです」

要はその唄を聞いているうちに、ふと思い出したことがあった。子供の時分、その頃の蔵<sup>くら</sup>前<sup>らまえ</sup>の住居と云うのは、今の京都の西陣あたりの店の構えと同じように、表通りは間口の狭い格子造りになっていて、奥の方が外から見たよりはずっと深く、幾間も幾間も細長くつづいてる先にちよつとした中庭があり、廊下づたいにそこを越えて行くと、一番奥のどんづまりに又相当な離れがあつて、そこが家族の部屋になつていたのであるが、そう云う同じ間取りの家が右にも左にも並んでいたので、二階に上ると、板<sup>いた</sup>塀<sup>たべい</sup>の忍び返しの向うに、隣りの家の中庭が見え、離れ座敷の縁側が見えた。……だが、その時分の東京の下町は、今から思うと何と云う静かさだったであらう。おぼろげな記憶ではつきりしたことは云えないけれども、あの頃ついぞ隣りの家の話声らしいものを聞いたおぼえがない。忍び返しの塀の向うは、まるで人なぞ住んでいないように、いつもしーんとしてカタリと云う物音一つするではなく、ちようどさびれた田舎の町の士族屋敷へでも行つたような佗<sup>わ</sup>びしさであつた。ただいつ頃のことであつたか、そこからおりおり琴<sup>こと</sup>の音<sup>ね</sup>につれてかすかに唄うこえが洩<sup>も</sup>れた。その声の主は「福ちゃん」と云う児で、器量よしと云う評判が高かつたから要も前から耳にしてはいたものの、それまで一度も顔を見たことはなかつたし、見たいと云う気もなかつたのを、或る日偶然二階から覗<sup>のぞ</sup>いたとき、多分夏のたそがれであ

つたのだろう、縁側のしきいざわ 際に座布団を敷いて明け放された葭簀よしずに背中をもたれながら、  
 蚊柱の立つ夕闇の空を見上げてゐるほの白い顔が、ちらと此方を向いた。幼心にもその美  
 しさに胸をつかれて凄すこい物でも見たように慌あわてて首を引つ込めてしまったから、どう云う  
 目鼻立ちであつたか纏まとまつた印象は残らないながら、初恋と云うにはあまりに淡いあこが  
 れに似た快感が、そののち暫く子供の夢の世界を領した。それは少くとも要の中にあるフ  
 エミニズムの最初の萌芽ほうがだつたであらう。彼は今でもその時の彼女が幾つぐらいの歳としごろ  
 であつたか見当がつかない。七つ八つの男の児に取つては、十四五の娘も二十歳はたち前後の大  
 人と変りなく見えるものだし、まして瘦やせぎすの年増としまのような姿をしていたその児の様子  
 は、ずっと自分より姉に思えた。そればかりでなく、たしか彼女の膝の前には煙草盆たばこが置  
 いてあつて、手に長煙管ぎせるを持っていたような気がするのである。尤もその頃は江戸末期の  
 いなせな風が下町の女に残つていて、要の母なぞも暑い時分は腕まくりなぞをしたものだ  
 から、煙草を吸つていたことが大人であつたと云う証拠かいまにはならないかも知れない。要の  
 家は四五年してから日本橋の方へ移つたので、彼が彼女を垣間かいま見たのは後にも先にもたつ  
 た一度だつたけれど、でもそれから琴のしらべと唄のこえとに一とお耳をそばだてる  
 ようになつて、彼女が好んで繰り返すのが「ゆき」と云う曲であることを、母から聞いた

折があつた。それは琴唄ではあるが、時には三味線に合わせてもうたう。東京ではあの唄のことを上方唄と云うのだと、母が教えた。

そののち彼はその「ゆき」の唄をふつつり耳にしなかつたので、忘れるともなく忘れるままに十何年かを過ごしてから、ひととせ上方見物に来て祇園ぎおんの茶屋で舞妓まいこの舞いを見た折のこと、久しぶりに又その唄を聞くことが出来ていいしれぬなつかしさを覚えた。舞いの地をうたつたのは五十を越えた老妓だったから、声にも一と通りさびがあつたし、三味線の音色も鈍く、ものうく、ぼんぼんという渋いひびきで、老人がきたなく唄えと云うのはああ云う味を求めるのであろう。あの老妓のに比べれば成る程お久のは綺麗ごときれいごとに過ぎて含蓄がない。けれど昔の「福ちゃん」も矢張美しい鈴のような声でうたつたのだから、要に取つては若い女の肉声の方がひとしお思ひ出をそるのである。それにあのぼんぼんと云う京風の三味線よりは、お久が弾いている大阪風の三味線の、調子の高いひびきの方がいくらか琴の音をしのばせるよすがにもなる。ぜんたいこの三味線は棹さおが九つに折れて胴の中へ這入はいつてしまふ別製のもので、お久と一緒に遊山ゆうさんに行くとき、老人はこれを欠かさず持つて歩くのであるが、宿屋の座敷でならまだしも、興に乗じると街道の茶店の腰掛でも、満開の花の下でも、いやがるお久を無理に促して弾かせると云う風で、去年の十三夜

の月見の晩なぞ宇治川を下る船の中でやらせたのはいいが、そのためにお久よりも老人の方が風邪かぜをひいて、あとで非常な熱を出したりしたことがあった。

「さあ、今度はあんたお唄いやしたら、………」

そう云つてお久は老人の前へ三味線を置いた。

「要さんは『ゆき』の文句の意味がよく分るかね」

と、何気ない体ていで三味線を取つて調子を低く直しながら、内々老人は得意の色をつつむことが出来ないのである。東京時代に一中節の素養があるせいか、地唄のけいこはほんの近年のことだけれども、わりに巧者に弾きもすれば、唄いもして、しろうとが聞けば、とにかく一種の味わいがあつた。そして当人もそれを少からず自慢にしてい、いっぱしの師匠のように叱言こごとを云うのが、なおさらお久は助からなかつた。

「さあ、いったい昔の唄の文句と云うものは、ぼんやり心持は分るような気がしますけれど、文法的に云つたら殆ど出鱈目でたらめじゃあないんですかな」

「そうだよ、全く。……昔の人は文法なんかは考えない。ぼんやり心持が分る、——その程度で沢山なんだね。そのぼんやりとしているところに却つて余韻があるんだね。たとえばこんな文句がある、——」

と、老人はすぐ唄い出しながら、「……………『今は野沢の一つ水、澄まぬ心の主にもしばし、すむは由縁ゆかりの月の影、忍びてうつす窓の内』……………それからあとが『広い世界に住みながら』となるんだが、これは男が女の許へ忍んで来るところなんだ。そいつを露骨に云わないで、『すむは由縁の月の影、忍びてうつす窓の内』と、わざと余情を持たせてあるのがいいじゃないか。お久なんぞはこう云う意味を考えないで唄っているから心持が現れない」

「成るほど、伺ってみるとそう云う意味になるかも知れませんが、それを分って唄っている人は幾人もありはしないでしょう」

「分らない人には分らないでいい、分る人だけが分ってくれる、と云った態度で作っているのが床ゆかしいと思うね。何しろ昔は大概盲人が作ったんだから、それだけにひねくれた、陰気なところがあるんだよ」

酔わないと唄う気になれないと云う老人は、今がちょうど唄いごろの酔い心地であるらしく、自分も盲人のように眼をつぶってあとをつづけた。

年寄りの癖の早寝早起きで、まだ宵の口の八時と云うのにもう老人は床を敷かせてお久に肩を揉もませながら眠りに就いたが、廊下を一つ隔てた部屋に引き取った要は、酒の勢いで無理にも寝入ろうと布団を被かぶつてみたものの、いつもの宵つ張りに馴らされた眼がそう容

易にはまどろまないで、長いあいだうとうとしていた。本来ならば彼はこのように一人で  
 一室を完全に占領して眠るのが好きであつた。折角安らかに寝ようと思つても同じ座敷に  
 妻が枕を並べていて、例のしくしくとしやくり上げたりすると、せめて気がねのない所で  
 ぐつすり眠りを貪りたさに、<sup>むさぼ</sup>一と晩どまりで箱根や鎌倉へ出かけて行つては、それこそほ  
 んとうに心置きなく、日頃の疲れを十分に伸ばして体を休ませたものであつた。それがこ  
 の頃は夫婦が無関心になり切つてしまつて互の存在在意に介しなくなつた結果、同じ部屋  
 でも平気でめいめいが安眠するような修業が出来、自然一泊旅行に出かける必要もなくな  
 つたのであるが、暫くぶりでひとりで寝てみると、廊下を越えてきこえて来る老人夫婦の  
 忍びやかな話ごえの方が、今の妻よりはずっと眠りの妨げになつた。と云うのは、さし向  
 いになるとお久に物を云う老人の調子が、まるで別人のように優しく、<sup>こわね</sup>声音までが變つて  
 しまつて、——それもはつきり云うならいいけれど、向うでは又要に遠慮があるのであ  
 ろう、ひそひそとあたりを憚るように、<sup>はばか</sup>さも睡たそうに、半分口のうちに、「ふんふん」  
 と甘えるように云うのである。そこへ持つて来て、ぱたん、ぱたん、お久が足腰を揉<sup>も</sup>  
 んでいる音が枕もとへ響いて来て、それがなかなか止みそうもない。老人が何かくどくど云  
 うのに対して、お久の方は言葉少なに「へえへえ」と聞いているらしく、ときどき「何々

どす」と答えるそのどすと云う語尾だけがぼんやり聞き取れる。要は他人の夫婦仲の睦まじいのを見ると、自分たちの身に引きくらべてその幸福が羨ましくもあり、他人事ながら嬉しくもあつて、決してイヤな気は起さないのが常だけれど、この老人の場合のように三十以上も歳の違つた組み合わせのこう云う様子を見せられるのは、予め覚悟していたとは云え、やつぱり多少迷惑でないことはない。まして老人が自分の肉身の親であつたら、さぞかし浅ましい気がするであらうと、美佐子がお久を憎む感情が今更分つて来るのであつた。此方は寝られないままにそんなことを考えているうち、老人は間もなく眠りついたらしく、すうすうと云う寢息が聞えたが、忠実なお久はそれからまだ按摩の手を休めないで、ぱたん、ぱたんと言ふ音がようよう止んだのは十時近くであつただろうか。彼はしよざいなさに、向うの部屋の電燈が消えた頃に自分の部屋へ明りをつけた。そして寝ながら端書を書いた。一枚は弘に宛てて、絵端書へ簡単な文句を記したもの。一枚は上海の高夏へ宛てて、これも出来るだけ簡単に、鳴門の海の景色の横へ細字で七八行にしたためたもの。――

その後そちらの御起居如何。

こちらは君に逃げられてしまつて、あのまま今以て曖昧模糊。美佐子は相変らず須磨へ

出かける。僕は京都の老人のお供で淡路へ来ている。そして大いに見せつけられている。美佐子はお久さんを悪く云うが、しかし中々親切なもんだとアテられながら感心している。

カタが附いたら知らせるが、今のところいつになるやら全く不明。

## その十

「お早うございます、よろしゅうございますか、——」  
と、廊下に立ち止まって声をかけると、

「ええ、構いません、さあさあ」

と云うので、表の座敷へ這入つてみると、宿の浴衣に市松の伊達巻姿で鏡の前にすわりながら、鬘まげのあたまを梳櫛すきべしで撫なでているお久の傍そばに、老人はビラを膝の上に載せて、老眼鏡のケースを開けたところである。晴れ渡った海はじーっと視つめると瞳ひとみの前が黒ずんで来るほど真まつ青さおに和ないで、船の煙さえ動かないような感じであるが、それでも時たまそよ風を運んで来るらしく、障子の破れが紙鳶たこの呻うなりのように鳴って、膝の上のビラがかすか

にあおられる。

内務省免許 淡路源之丞大芝居

三日目出物

生写 しょううつし 朝がほ日記

□初幕宇治ノ里 ほたるがり 螢狩ノ段

□明石舟別レノ段 あかし

□弓ノ助屋敷ノ段

□大磯揚屋ノ段 おおいそあげや

□摩耶ヶ嶽ノ段 まや たけ

□浜松小屋ノ段 えびすや

□戎屋徳右衛門宿屋ノ段 みちゆき

□道行ノ段

太功記十段目（追抱）

洲本町物部常盤橋詰 ときわばし

お俊伝兵衛 しゅん（追抱）

（追抱）

どもまたへい  
吃又平

大阪文楽 豊竹呂太夫

一人前五拾銭均一 但シ

通券御持参ノ方ハ参拾銭

「お前、『大磯揚屋の段』と云うのを見たことがあるかい？」

「何の狂言どす、それは？」

「朝顔日記だよ」

「見たことおへん。——そんなところおすやろか」

「だからさ、こう云う所は文楽あたりじゃあめつたに出さないんだと見えるね。次には

『摩耶ヶ嶽の段』と云うのがある」

「そら、深雪 みゆきがかどわかされるとこと違いますか」

「ふん、そうかそうか、かどわかされて、それから浜松の小屋になる。——とすると

『真葛ヶ原の段』と云うのがありやしなかつたかい？……ねえ、お前、……」

「……………」

光の反射が座敷の四方をきらりと一と廻りした。お久が梳櫛を口にくわえて、一方の手の親指を右の鬢びんのふくらみの中へ入れながら、合わせ鏡をしたのである。

要かなめは実はまだこの女のほんとうの歳を知らなかつた。老人の好みで、風通だとか、一榮いちらくだとか、ごりごりした鎖のように重い縮ちりめん緬めんの小紋だとか、もう今の世では流行はやらなくなつてしまったものを五条あたりの古着屋だの北野神社の朝市などから搜して来ては、その埃ほこりくさいぼろのようなのをいやいやながら着せられて、地味に地味にと作つているので、いつも二十六七に見えるのだけれど、——そして老人との釣り合い上、聞かれればそのくらいに答えるように云いふくめられているらしいけれど、——鏡を支えた左の手の、指紋がぎらぎら浮いている桜色の指先のつやつやしきは、あながち髪の毛の油のせいばかりではなからう。要は彼女のこう云う姿を見せられるのは始めてであるが、薄着の下にほぼ在りどころが窺うかがわれる肩や臀しりのむっちりとした肉置きししおは、この上品な京生れの女には氣の毒なくらい若さに張り切つて、二十二三——と云う歳頃をはつきり語つているのである。

「それから『宿屋の段』のあとに『道行の段』がありますね。——」

「ふん、ふん」

「朝顔日記の道行きと云うのは初耳ですが、しまいに深雪の思いがかなって、駒沢と旅でもするんですか」

「いや、そうじゃない、わたしはこりやあ見たことがある。——ほれ、『宿屋』の次が大井川の川留めで、あれから深雪が川を渡って、駒沢のあとを追いながら東海道を下るんだよ」

「道行きの相手はいないんですか」

「いや、それがほら、川留めの所へ国もとから駈<sup>か</sup>け付けて来る何助とか云う若党があつたね、——」

「関助どすやろ」

もう一度鏡がきらりと光つて、癖直しの湯を入れた金<sup>かなだら</sup>盥<sup>らい</sup>を片手に、お久は立つて廊下へ出た。

「そうそう関助、——あれが附いて行くことになる、つまり主従の道行きだな」

「もうその時は深雪は盲目<sup>めくら</sup>じゃあないんですね」

「眼があいちまって、もとの侍の娘になつて、綺麗ななりをして行くんでね。千本桜の道

行きに似ているちよつと花やかないもんだよ」

芝居はこの町はずれの空地に小屋がけを拵えて、そこで朝の十時ごろから晩の十一時、——どうかすると十二時過ぎまでやっている。とても初めから御覧になるのは大変だから、日の暮れからがちようどよろしゅうございますと宿の番頭がそう云うのを、いいえ、わたしはこれが目的で来たんだから、朝御飯をすましたら直きに出かけます、お昼と晩はこの重箱に用意して貰いましょうと、それを樂しみの一つにしている老人は例の蒔絵の弁当箱を預けて、幕の内に、玉子焼に、あなごに、牛蒡に、何々の煮しめに、……と、おかずの注文までやかましく云つて、それが出来て来ると、

「さあ、お久や、支度をしな」

と、急ぎ立てるのであつた。

「ちよつと、此処をきつうに締めとおくれやす」

ごわごわした、折り目から切れて行きそうな地のしつかりした八反の袷のうえに、これも相当に硬張つたものらしく袈裟のようにぎくぎくする帯を、云われないうちに締め直しにかかつていたお久は、そう云いながら老人の方へ結びめを向けた。

「どうだね、このくらいかね？」

「へえ、もうちよつと、……………」

前のめりになろうとするのを腰で粘つて受け止めているお久のうしろで、老人は額に汗を浮かした。

「どうも此奴は突つ張つているんで、締めにくいったらない。……………」

「そないお云やしたかて、あんたが買<sup>こ</sup>うておいでたんやおへんか。わてエかてかなわんわ、しんどうて。……………」

「だがいい色をしていますな」

と、同じようにうしろに立ちながら、要は感嘆の声を発した。

「何と云う色だか、この頃の物にはあんまり見ないじゃありませんか」

「なあに、やつぱり萌<sup>もえぎ</sup>黄の系統なんで、今の物にもないことはないんだが、こう色がさめて古くなつたんで味が出たのさ」

「何ですか、物は？」

「繻<sup>しゅちん</sup>珍<sup>ちん</sup>だろうね。昔の織物は何でもこの通りごりごりしている、今のはどんな物だつて大概人絹が這入つてゐるんだから、……………」

乗り物で行くほどでもないのでめいめいが重箱や折詰の包を提げながら出かけたが、

「もう日傘がいりますなあ」

と、お久は照りつけられるのを恐れて手をかざした。日はそのうすい手のひらの撥だこのある小指の肉を傘の紙ほどに赤く透して、暗く翳<sup>かげ</sup>っている顔が日のあたっている頤<sup>あご</sup>の先よりも一層白い。どうせ今度は真つ黒に焼ける、傘なぞ持つて来ないがいと云われながら、手提げの底へ忍ばせて来たアンチソラチンを出がけにそつと、顔、襟<sup>えり</sup>、手頸<sup>てくび</sup>、足頸にまで塗っているのを見た要は、この京女が絹ごしの肌をいたわる苦心をいじらしくも笑止にも感じたが、道楽の強い老人はこまかいことに気が廻るようでいて、自分がこうと云い出したら案外そう云う思いやりが乏しいのである。

「あんた、早う行かんと十一時どすえ」

「ふん、まあちよつと待ちな」

と、ときどき老人は骨董屋の前で立ち止まる。

「ほんまに今日はええお天気どすな」

と、要と一緒にそろりそろり先へ行きながら、お久は晴れわたった空を仰いで、

「こう云う日には摘<sup>つ</sup>み草がしとて、……………」

と、不平らしく口のうちに云った。

「全く、芝居よりは摘み草に持つて来いと云う日だ」

「何処ぞここに<sup>わらび</sup>に蕨やつくしの生えてるとこおすやろか」

「さあ、この辺は知らないが、<sup>ししたに</sup>鹿ヶ谷の近所の山にいくらだつてあるでしょう」

「へえ、へえ、たあんと生えてます。先月は八瀬<sup>やせ</sup>の方まで摘みに<sup>い</sup>行て、<sup>ふき</sup>蕨のとうを仰山採つて歸りました」

「蕨のとうを？」

「へえ、——蕨のとうがたべたいお云やすけど、京都では市場へ行たかておへん、だあれもあの苦いもんようたべる人おへんよつて」

「東京だつてみんながみんな食べる訳じゃありませんがね。——それでわざわざそいつを摘みに行つたんですか」

「へえ、これぐらいの籠<sup>かご</sup>に一杯、——」

「摘み草もいいが、田舎の町をぶらぶら歩くのも悪くないですな」

青空の下を真つすぐ伸びている一とすじ路の町通りは、往来の人影が先の先まで数えられるほど朗らかに、たまにすれちがう自転車のベルの音さえのかである。別に特長のある町ではないが、関西は何処へ行つても壁の色がうつくしい。老人の説だと、関東は横なぐ

りの風雨が強いので、家の外側はみな板がこいの下見したみにする。しかもその板がどんな上等な木を使つても直きに黒くよごれてしまうから全体が非常にきたない。トタン屋根にバラツクの今の東京は論外として、近県の小都会など、古ければ古いなりに一種のさびが附くはず筈であるのに、ただもうすすけて陰気なばかりだ。そこへ持つて来てたびたびの地震や火事で、焼けた跡に建てられるのは北海松からまつや米材べいさいの附け木のように白っちゃけた家か、亜米利加アメリカの場末へ行つたような貧弱なビルディングである。たとえば鎌倉のような町が関西にあつたとしたら、奈良ほどには行かないとしても、もつと落ち着いた、しつとりとした趣があるう。京都から西の国々の風土は自然の恵みを授かることが深く、天の災わざわいを受ける度が少いので、名もない町家や百姓家の瓦や土塀どべいの色にまで、旅人の杖をとどめさせるに足る風情ふぜいがある。殊に大都会よりも昔の城下町くらいな小さな都市がいい。大阪は勿論もちろん、京都でさえも四条の河原があんな風になつて行く世の中に、姫路、和歌山、堺、西宮、と云つたような町は、未だに封建時代の倂おもかけを濃く残している。……

「箱根や塩原がいいなんて云つたつて、日本は島国の地震国なんだから、あんな景色は何処にでもある。大毎だいまいが新八景を募つた時に『獅子岩ししいわ』と云うのが日本じゆうに幾つあつたか知れないそうだが、實際そんなものだろうよ。やっぱり旅をして面白いのは、上方か

ら四国、中国、——あの辺の町や港を歩くことだね」

とある四辻を鍵かぎの手に曲っている佗わびた荒壁の塀の屋根の、丸瓦の上からのぞいているうづぎの花を眺ながめたとき、要は老人のこの言葉をおもい出した。淡路と云えば地図の上では小さい島だし、その港のことだから、多分この町は今歩いている一本道で尽きるのであろう。ここを何処までも真つすぐに行くといふ川の流れへ出る、人形芝居はその向う河岸の河原でやっているのだと、番頭は云っていたから、川まで行けば家並やなみが終ってしまうのだろう。旧幕の頃には何と云う大名の領地であつたか、無論城下と云うほどのものではなかつただろうが、町はその時分の有様とそう變つてもいらないように思える。いったい都市の装よそおいが近代的になりつつあると云うことは、国の動脈を成すような大都会に於ける現象であつて、そんな都会は一つの国家にそう沢山はあるものではない。亜米利加のような新しい土地は別として、古い歴史を持つ国々の田舎の町は、支那しなでも欧羅巴ヨーロッパでも、天災地變に見舞われない限り文化の流れに取り残されつつ、封建の世の匂においを伝えているのである。たとえばこの町にしても、電線と、電信柱と、ペンキ塗りの看板と、ところどころの飾り窓とを気にしなければ、西鶴の浮世草紙の挿絵さしえにあるような町家を至る所に見ることが出来る。軒の垂木たるきまでも漆喰しっくいで包んだ土蔵作りの店の構え、太い角材を惜しげもなく使つ

た頑丈がんじょうな出格子でこうし、重い丸瓦でどつしりとおさえた本葺ほんぶきの藁いらか。「うるし」「醤油」

「油」などと記した文字の消えかかっている櫺けやきの看板、土間の突きあたりに吊つつてある屋号を染め抜いた紺暖簾のれん、——老人の云いぐさではないけれども、そう云うものはどんな

に日本の古い町に情趣を与えているか知れない。要は青空をうしろにして白く冴さえている壁の色に、しみじみ心が吸い取られるような気がした。それはあたかもお久の腰に巻かれている繻珍の帯と同じことだ。澄んだ海辺の空気の中で長いあいだ風雨に曝さらされ、自然につやを消された色である。ほつかりと明るく、花やかでありながら渋みがあつて、じつと見ていると胸が安まるようになる。

「こう云う昔風の家は奥が真つ暗で、格子の向うに何があるやらまるで分りませんね」

「一つは往来が明る過ぎるんだね、この辺の土はこの通り白ツちやけているから。……」  
ふと要は、ああ云う暗い家の奥の暖簾のかげで日を暮らしていた昔の人の面ざしおもを偲しのんだ。そう云えばああ云う所にこそ、文楽の人形のような顔立ちを持った人たちが住み、あの人形芝居のような生活をしていたのであろう。どんどの芝居に出て来るお弓、阿波あわの十郎兵衛、順礼のお鶴、——などと云うのが生きていた世界はきつとこう云う町だったであらう。現に今ここを歩いているお久なんかもその一人ではないか。今から五十年も百年も前

に、ちようどお久のような女が、あの着物であの帯で、春の日なかを弁当包みを提げながら、矢張この路を河原の芝居へ通つたかも知れない。それとも又あの格子の中で「ゆき」を弾いていたかも知れない。まことにお久こそは封建の世から抜け出して来た幻影であつた。

## その十一

淡路の人に云わせると人形浄瑠璃はこの嶋が元祖であると云う。今でも洲本から福良へかよう街道のほとりの市村と云う村へ行けば、人形の座が七座ほどある。昔はそこに三十六座もあつたくらいで、俗にその村を人形村と呼んでいる。いつの時代のことであつたか、都を落ちて来てこの村に居を構えた公卿が、有りのすさびに傀儡を作りそれを動かしたのが始めて、有名な淡路源之丞と云うのはその公卿の子孫であるそう。その一家は今日でも村の旧家として通り、立派な邸に住んでいて、この島だけでなく、四国路や中国路まで興行に出かけるのであるが、しかし座を持つてゐるのは源之丞の一族ばかりではない。大袈裟に云えば一村ごとく義太夫語りか、三味線弾きか、人形使いか、太夫元

かでない者はなく、それらの人々は農繁期には畑へ出て働き、百姓の仕事が暇になる季節にそれぞれ一座を組織して島の此処<sup>ここ</sup>彼処<sup>かしこ</sup>を打って廻る。だからこれこそほんとうの意味での、純粹に郷土の伝統から生れた農民芸術であると云えよう。芝居は大概年に二回、五月と正月とに催されるので、その時分にこの島へ渡れば、洲本、福良、由良<sup>ゆら</sup>、志筑<sup>しずき</sup>等の町をはじめ、至る所の在所でやっている。大きな町では常設の小屋を借りることもあるけれど、普通は野天に丸太を組んで庭<sup>むしろ</sup>で囲いをするのであるから、雨が降れば入り掛けになる。そう云う訳で淡路にはずいぶん熱心な人形氣違いが珍しくなく、その道楽が昂<sup>こつ</sup>じると、一人で使うことの出来る小さな指人形を持って町から町を門附<sup>かどづ</sup>けして歩き、呼び込まれば座敷へ上つてさわりの一とくさを語りながら踊らせて見せると云うようなものもあり、人形を愛するあまりには家産を蕩<sup>とう</sup>尽<sup>じん</sup>するのは愚か、ほんとうに発狂する者さえもある。ただ惜しいことにそれほどの郷土の誇りもだんだん時勢の圧迫を受けて衰微に向いつつある結果、古い人形が次第に使用に堪<sup>た</sup>えなくなるのに、新しい首<sup>かしら</sup>を打つてくれる細工人がいなくなつた。今人形師と名のつく者は阿波の徳島在に住んでいる天狗<sup>てんぐ</sup>久<sup>く</sup>と、その弟子の天狗<sup>てんぐ</sup>弁<sup>べん</sup>と、由良の港にいる由良<sup>ゆらかめ</sup>亀との三人しかないが、そのうちほんとうに腕の出来ている天狗久は、もう六十か七十になる爺さんで、もしこの人が死んでしまえば永久にこの技

術は亡びるであろう。天狗弁は大阪へ出て文樂の樂屋を手伝っているけれど、仕事というのは昔からある人形の直しをしたり、胡粉ごふんを塗りかえたりするくらいに過ぎない。由良亀も先代の男はいいものを作ったが、今の代となつてからは理髮師か何かを本業として、その片手間に矢張つくろいをするだけである。芝居の方では新しいものが得られないから、古い首かしらを出来るだけ手入れをして使う。それで毎年、盆と暮とは、方々の座の破損した人形が修繕のために人形師の所へ幾十となく集まつて来るので、そう云う時に行き合わせれば、こわれた首の一つや二つは安く譲つて貰もらえると云う。

そんな話を何処からか委くわしく調べて来た老人は、「今度はどうしても人形を手に入れる」と力んでいた。実はこのあいだ文樂で使いふるしたものを譲り受けるようにいろいろ手を廻したのがうまく行かないで、「淡路へ行けば買えますよ」と、人に教えられたのだそうである。そして順礼の道すがらには、芝居を見て廻るばかりでなく、由良の港の由良亀を訪い、人形村の源之丞の家に行き、帰り道には福良から船で、鳴門なるとの潮を見て徳島へ渡り、天狗久にも会つて来ようと云うのである。

「要さん、何とのどかなもんじゃあないか」

「のどかですねえ、実に。――」

要は小屋がけの中へ這入るとそう云つて老人と眼を見合わせた。のどか、——全く此処  
 の感じは「のどか」の言葉で尽きている。いつであつたか四月の末のあたかい日に壬生  
 狂言を見に行つたとき、お寺の境内のうらうらとした春の気分が棧敷にいてもうつり睡  
 けを催して、遊んでいる子供たちのガヤガヤ云う話声や、露店で駄菓子やお面を売ってい  
 る縁日商人のテント張りがびいどろのように日に光るのや、その他いろいろの雑音が舞台  
 で演ぜられている狂言の、間伸びのした悠長な囃しと一つに融けて聞えて来る中で、  
 ついとろとろと好い心持に眠りこけては、又はつとして眼をさます。二度も三度も、とろ  
 とろとしてははつと眼をさます。……その同じ事を何度か繰り返すのであるが、眼をさ  
 ます毎に舞台を見ると、さっきの狂言がまだ続いていて、悠長な囃しが依然として聞え、  
 棧敷の外は相変わらず日がうらうらとテント張りに光つていて子供たちがガヤガヤ遊んでお  
 り、長い春の一日はいつになつても暮れることは知らないかのように、……昼寝をしな  
 がらまとまりのない夢のかずかずを幾つともなく夢みてはさめ、夢みてはさめしたかのよ  
 うに、……太平の御代の有り難さと云おうか、桃源の国と云おうか、久しぶりに浮世  
 を離れたのんびりとした心持になつて、こんなことは幼い時分に人形町の水天官で七十  
 五座のお神樂を見た以来であると思つたが、この小屋掛けの中の気分はちようどあれと同

じである。屋根にも四方にも<sup>むしろ</sup>蕤が張つてあるとは云うものの、蕤と蕤との合わせ目が隙間<sup>すきま</sup>だらけで、見物席に日光の斑点<sup>はんでん</sup>が出来、ところどころに青空が見えたり河原の草のすいすいと伸びたのが覗<sup>のぞ</sup>いていたりして、あたりまえなら煙草の煙で濁っている筈の場内の空気が、げんげやたんぽぽや菜<sup>な</sup>の花の上を渡つて来る風で野天のようにカラリとしている。場席の平土間にあたる所は地べたへごぎを敷いた上に坐布団が並べてあつて、村の子供たちが駄菓子や蜜柑<sup>みかん</sup>をたべながら芝居の方はそつち除<sup>の</sup>けに、そこを幼稚園の運動場のようにして騒いでいる様子は、やはり里<sup>さと</sup>神楽の情趣と変りはない。

「成るほど、これは又文楽とは大分違うね」

三人は弁当の包みを手に持ったまま暫く足も蹈<sup>ふ</sup>み込めないで、子供たちの跳<sup>ちやうりよう</sup>梁<sup>りやう</sup>するのをぼんやり立つて眺めていた。

「とにかく始まつてはいるんですな、人形が動いていますから。——」

要の眼には、その幼稚園騒ぎの向うにチラチラしている光景が、弁天座で見た浄瑠璃劇とは種類の違つた、一つのお伽<sup>とぎばなし</sup>噺<sup>ばなし</sup>の国——何か童話的な単純さと明るさを持つ幻想の世界——であるように映つた。舞台には一面に朝顔の模様のついた友禅<sup>ゆうぜん</sup>の幕が垂れていて、多分序幕の螢狩りのところであろう、駒沢らしい若い侍の人形と、深雪らしい美

しいお姫様の人形とが、船の上で扇をかざしながら膝をすり寄せてうなずき合ったり、ささやいたりしている。場面から云えば艶えんな所であるけれども、太夫の声も三味線のひびきも一向場内に徹とおらないので、ただその可愛い二人の男女の動くのばかりを見ていると、文五郎などが使うような写実的な感じではなく、人形たちも村の子供と一緒に、無邪気に、あどけなく、遊んでいるかのである。

お久は棧敷にしようと云うのを、人形芝居は下から見ると云う意見の老人は「ここがいいね」と殊ことごと更土間へ席を取ったので、若葉の萌もえる頃ではあるが、据わっているとうすい坐布団をへだてて地べたの湿気と底冷えとが感ぜられる。

「おいどがちみとうてかなわんわ」

と、お久は臀しりの下に布団を三枚も入れながら、

「なあえ、こないなとこにおいやしたら毒どすえ」

と、しきりに棧敷に変わすることをすすめるけれど、

「まあまあ、こう云う所へ来てそんな贅ぜいたく沢を云うもんじゃあない。ここで見なけりや矢張り情が移らないから、つめたいのは辛抱するさ。これも話の種だね」

と、老人は取り上げるけしきもない。しかしそう云う当人も冷えて来るのがこたえると見

えて、錫の銚子をアルコールの炉であたためながら、直ぐもう酒を始めるのであつた。

「御覧、この辺の人たちはみんなわれわれのお仲間だね、ああして重箱を持って来ている。」

「なかなか立派な蒔絵のがありますね。中に這入っているものも、玉子焼きだの海苔巻だの似たようなものばかりじゃないですか。この辺では始終こう云う芝居があるんで、弁当のおかずも自然と一定しているんでしょうな」

「この辺に限ったことじゃないさ。昔はみんなあだだったんで、大阪あたりじやつい近年までその習慣が残っていたあね。今でも京都の旧家なぞだと、お花見なんかには小僧に弁当と酒を提げさして出かけて行くのがたくさんある。そうして向うでちろりを借りてお燗をつけて、余った酒は又壺に入れて持って帰って酒しおに使うと云うんだが、実際ありやあいい考だね。江戸っ児に云わせると京都の人はしみつたれだと云うけれど、出先でまずい物を喰うよりその方がいくら伶俐だか知れない。第一材料が分っているから安心してたべられる」

見わたしたところ、追い追いか客が詰まって来た土間の彼方此方には、思い思いに輪を作つて小さな宴会が始まっていた。日が高いので男の客は少いけれど、町の女房らしいのや娘

らしいのがめいめい子供たちを連れて、中には乳呑み児を抱いたりして、彼処あそこにひとかたまり、此処ここにひとかたまりと云う風に、ところどころに陣を取っては、舞台の芝居には頓と着小こなく、重箱のぐるりにまどいしながらたべているので、その賑にぎやかさ、騒々しさと云つたらない。この小屋でも煮込にこみのおでんと正宗ぐらいは売っていて、それで酒盛りを開くのもあるが、大部分の人は皆相当にかさのある風呂敷包みを持参している。明治初年の飛鳥山あすかへでも行つたならば、花見時には定めしこんな光景が見られたであろう。要は時ま絵きえの組重などと云う物を時代おくれの贅沢品だと思つていたのに、ここへ来て見て始めてそれが盛んに実際に用いられているのを知つた。成るほど漆うるしの器の感じは、玉子焼きや握り飯の色どりといかにも美しく調和している。中に詰まっている御馳走ぜんがさもおいしそうである。日本料理はたべる物でなく見る物だと云つたのは、二の膳ぜんつきの形式張つた宴会ののしを罵つた言葉であらうが、この花やかな、紅白さまざまな弁当の眺めは、ただ綺麗であるばかりでなく、なんでもない沢庵たくあんや米の色までがへんにうまそうで、たしかに人の食欲をそそる。

「冷えるところへ持つて来て、酒が這入つたもんだから、………」  
と、老人はさつきから二度も三度も小用を足しに立つて行つた。が、誰よりも困っている

のはお久で、実は場所柄が場所柄だから、なるべくそんなことがないように出がけに済まして来たのだけれど、気にするとお催すものだし、蕙の下から背すじの方へ冷めたさが這い上つて来るのに加えて、いけぬ口ながら二つ三つ老人の相手をしたり、重箱の物を摘まんだりしたのが<sup>てきめん</sup>覲<sup>き</sup>面に利いて来たのである。

「何処どす？………」

と云つて、一度彼女は立ち上つたが、

「お久さんにはとても駄目ですよ」

と、要が戻つて来て顔をしかめた。聞けば囲いのしてない所へ<sup>こえおけ</sup>肥桶が二つ三つ並べてあつて、男も女も立ちながら用を足すのだと云う。

「わてエ………どうしよう？………」

「いいやな、お前、見られるのはお互様だあな」

「それかて、立つたなりで出来ますかいな」

「京都ではよく女がそうしているじゃないか」

「あほらしい。まだそんなことしたとおへんえ」

何処かその辺まで行つたらうどん屋か何かあるだろうと云われて出て行つたお久は、それ

から小一時間として帰つて来た。町まで行つて、うどん屋の前も、めし屋の前も通り過ぎてみたけれど、何だか這入りにくくもあり、何処の店も薄気味が悪そうなので、とうとう宿屋まで歩いてしまつて、帰りは俵くるまで戻つて来たと云うのである。それにしてもここに來ている若い娘や女房たちはどうするのだろう、みんなあの桶へ行くのだろうか、余計な心配をしているうちに、やがて三人のうしろの方で迷惑なことが始まつた。——子供を抱いたかみさんが、土間の通り路で着物の前を開けさせて、水道の栓せんを抜いたような音をさせているのである。

「こいつはちつと野蠻過ぎる。弁当をたべている鼻先はひどいと、老人もこれには参つたという顔つきである。」

舞台の方では見物席の落花狼藉らつかろうぜきをそ知らぬ風で、何人目かの太夫が床ゆかへ上つていた。要は昼の酒が利いたのと、周りの噪音そうおんが激しいのとで上氣したせい、ただチラチラと眼に映るものを感じているだけに過ぎないのだが、それでいて決して退屈でもなければ耳触りでもない。この快感はあたかも明るい湯槽ゆぶねの中で、肌はこころよいぬるま湯に漬かっているのに似ている。あたたかい日に布団にくるまつてうとうと朝寝坊をする、——そののんびりした、ものういような、甘いような気分にも似ている。ぼんやり眺めていたあ

いだに、いつのまにか明石<sup>あかし</sup>の舟別れの段が済み、弓之助の屋敷も、大磯<sup>おおいそ</sup>の揚屋も、摩耶<sup>まや</sup>ヶ嶽の段も済んでしまつたらしく、今やつてゐるのは浜松の小屋のようだけれど、日はまだ容易にかげりそうなけはいもなく、天井を仰ぐと薙<sup>むしろ</sup>の隙間<sup>すきま</sup>から今朝来た時と同じ青空が機嫌<sup>きげん</sup>のよい色を覗<sup>のぞ</sup>かせている。こう云う折には芝居の筋なぞそう気に留める必要はない。ただうつとりと人形の動くのを視つめていれば沢山である。そして見物人たちのガヤガヤ云うのが、一向邪魔にならないのみか、いろいろの音、いろいろの色彩が、万華鏡<sup>まんげきよう</sup>を見るように、花やかに、眼もあやに入り乱れながら、渾然<sup>こんぜん</sup>とした調和を保っているのである。

「のどかですなあ。——」

と、要<sup>かなめ</sup>はもう一ぺんその言葉を繰り返した。

「しかし人形も思ひの外だよ、深雪を使つてゐるのなんぞはそう下手<sup>へた</sup>でもないじゃないか」「そうですねえ、もう少し原始的なところがあつてもいい筈ですねえ」

「こう云うものは何処でやつても大体型がきまつてるんだな、義太夫の文句に變りがない以上、手順が同じになる訳だから」

「淡路特有の語りかた、と云うようなものはないんでしょうか」

「聞く人が聞くと、淡路浄瑠璃と云つていくらか大阪とは違うんだそうだが、わたしなんかには分らないね」

一体、「型に簞はまる」とか「型に囚とらわれる」とか云うことを、芸道の墮落のように考える人もあるけれども、たとえばこの農民芸術の所産である人形芝居にしてからが、とにかくこれだけに見られるというのは畢ひつきよう竟「型」があるためではないか。その点ででんでん物の旧劇は民衆的であると云える。どの狂言にも代々の名優の工夫に成る一定の扮装ふんそう、一定の動作——所謂「型」が伝えられているから、その約束に従い、太夫の語るチヨボに乗つて動きさえすれば、しろうとたちでも或る程度までは芝居の真似事まねごとをすることが出来、見物人もその型に依つて檜舞台ひのきぶたいの歌舞伎役者を連想しながら見ていられる。田舎の温泉宿などで子供芝居の余興があつたりするとき、教える方もよく教え、覚える方もよくまあこれだけに覚えたものだと感じることがあるけれど、めいめいが勝手な解釈をする現代劇の演出と違つて、時代物は依りどころがあるだけに却かえつて女子供にも覚え易いのかも知れない。活動写真などのなかつた昔は、やはりそれに代るような便利な方法があつたのである。取り分け僅わずかな設備と人数とで手軽に諸所を興行して歩ける人形芝居は、どれほど地方の民衆を慰めたであらう。こうして見ると旧劇と云うものはずいぶん田舎の隅す

みずみ  
々にまでも行きわたって、深い根底を据えていることが察せられる。――

要は朝顔日記の中では誰でも知っている宿屋の段と川留の段とを見たことがあるだけで、「ひととせ宇治の螢狩り」とか「泣いて明石の風待ち」とかいう文句に聞き覚えはあるけれど、その螢狩りや舟別れやこの浜松の小屋の段やを見るのは初めてであった。しかしこの物語は時代物のようであって、時代物に特有な不自然に入り組んだ筋や、残酷な武士道の義理責めなどが少くって、世話物のように素直に明るく、軽い滑稽味さえも加えてすらすらと運んであるのがいい。いつ頃を背景にしたものか、ほんとうにあった事柄かどうか、駒沢と云うのは熊沢蕃山をモデルにしたのだと云うような話を聞いたこともあるが、なんだか徳川時代よりも一と時代前の戦国か室町ごろの物語を読むような所がある。男が女に催馬楽を贈ったり、女がそれを琴で唄ったり、浅香と云う乳母がお姫様のあとを追って苦労をしたりするのなどは、平安朝のようでもある。それでいて実際に遠いかというのに、一方では可なり通俗味もあり写実味もあって、現にこの場へ出る浅香の順礼姿と云い、彼女のとなえる御詠歌といい、この辺の人には極めてしたしみ深いもので、今でも浅香のような姿あの歌を唄いながら行く女を往々町で見かけることが珍しくないのを思えば、関東の人が浄瑠璃劇を見るのと違って、西国の人は案外自分の身近に近い事実のように感

ずるのであろう。

「いや、これは朝顔日記なんでいけないんだね」

と、老人は何を思い出したのか突然云った。

「玉藻たまも まえの前とか、伊勢音頭いせおんどとか、ああ云う物はなかなか大阪とは違っていて面白いそうだよ」

なんでも文楽あたりでは残忍であるとかみだらであるとか云う廉かどで禁ぜられている文句やしぐさを、淡路では古典の姿を崩くずさず、今でもそのままにやっている、それが非常に変っている云う話を老人は聞いて来たのであった。たとえば玉藻の前などは、大阪では普通三段目だけしか出さないけれども、此処では序幕から通してやる。そうするとその中に九尾びきつねの狐が現れて玉藻の前を喰くい殺す場面があつて、狐が女の腹を喰い破はつて血だらけな腸はらわたを咬くわえ出す、その腸には紅い真綿を使うのだと云う。伊勢音頭では十人斬ざりのところで、ちぎれた胴だの手だの足だのが舞台一面に散乱する。奇抜な方では大江山の鬼退治で、人間の首よりもつと大きな鬼の首が出る。

「そういう奴を見なけりやあ話にならない、明日あしたの出し物は妹背山いもせやまだそうだから、こいつはちよつと見物みものだろうよ」

「ですが朝顔日記だって、通しで見るのは始めてのせいかな僕には相当面白いですよ」

要には人形使いの巧拙なぞ細かいところは分らないが、ただ文楽のと比較すると、使いかたが荒つぽく、柔かみがなく、何と云つても鄙ひなびた感じのあることは免れられない。それは一つには人形の顔の表情や、衣裳いしやうの着せ方にも依るのであらう。と云うのは、大阪のに比べて目鼻の線が何処か人間離れがして、堅く、ぎごちなく出来ている。立女たておやま形の顔が文楽座のはふつくと円みがあるのに、此処のは普通の京人形やお雛ひな様のそのようにおもなおもな面長で、冷めたい高い鼻をしている。そして男の悪役になると、色の赤さといひ、顔立ちの気味の悪さと云い、これは又あまりに奇怪至極で、人間の顔と云うよりは鬼か化け物の顔に近い。そこへ持つて来て人形の身の丈が、——殊にその首が、大阪のよりもひときわ大きく、立役たちやくなぞは七つ八つの子供ぐらいはありそうに思える。淡路の人は大阪の人形は小さ過ぎるから、舞台の上で表情が引き立たない。それに胡粉べいふんを研みがいてないのがいけないと云う。つまり大阪では、成るべく人間の血色に近く見せようとして顔の胡粉をわざとつや消しにするのだが、それと反対に出来るだけ研とぎ出してピカピカに光らせる淡路の方では、大阪のやりかたを細工がぞんざいだと云うのである。そう云えば成る程、此処の人形は眼玉が盛んに活躍する、立役のなぞは左右に動くばかりでなく、上下にも動き、

赤眼を出したり青眼を吊つたりする。大阪のはこんな精巧な仕掛はありません、女形の眼などは動かないのが普通ですが、淡路のは女形でも眼瞼が開いたり閉じたりしますと、この島の人は自慢をする。要するに芝居全体の効果から云えば大阪の方が賢いけれども、この島の人たちは芝居よりもむしろ人形そのものに執着し、ちやうど我が兎を舞台に立たせる親のようないつくしみを以て、個々の姿を眺めるのであらう。ただ気の毒なのは、一方は松竹の興行であるから費用も十分に懸けられるのに、此方は百姓の片手間仕事で、髪飾りや着附けがいかにも見すばらしい。深雪でも駒沢でもずいぶん古ぼけた衣裳を着ている。しかし古着好きの老人は、

「いや、衣裳は此処の方がいいよ」

と云つて、あの帯は昔の呉縞だとか、あの小袖は黄八丈だとか、出て来る人形の着物にばかり眼をつけて、さつきからしきりに垂涎している。

「文楽だつて以前はこんな風だったのが、近頃派手になったんだよ。興行のたびに衣裳を新調するのもいいが、メリンス友禪や金紗ちりめんみたいなものを使われるんじや、打ち壊しだね。人形の着附は能衣裳のように古いほど有難味があると、そう老人は云うのである。」

深雪と関助との道行きのあいだに長い一日もとうとう暮れて、その幕がすんだ時分には囲  
 いの外はすっかり暗くなっていた。昼間のうちは殺風景だった小屋の中もいつしかぎっし  
 り客が詰まって、さすがに芝居の夜らしい気分である。ちょうど晩飯の刻限なので、一層  
 さかな小宴会が彼方あつちでも此方こつちでも初まっている。度ぎつい電球が裸のままですべてどこ  
 ろに吊つてあるから明るさも明るい、眩まぶしいことも非常に眩しい。それに舞台の照明と  
 云うのが、脚光もなければ特別な装置があるのでもなく、同じ裸電燈が天井から垂れてい  
 るばかりなので、やがて太功記十段目が開くと、人形の顔の胡粉が一度にきらきらと反射  
 し出して、十次郎も初菊もまともに見ることが出来ないような奇観を呈した。しかし太夫  
 はだんだん本職に近いような上手なのが床ゆかに上る。それを一方の棧敷から、「どうだ、わ  
 しの村の太夫はうまいもんだろう、みんな静かに聞いてくれ」と、同じ村の人らしいのが  
 声援すると、「己おれの村の何々太夫はもつとうまいぞ、好い加減に引ッ込んでくれ」と、一  
 方の棧敷から罵声ばせいを飛ばす。酔った勢で見物人の大半がめいめい執方どつちかへ味方をして村と  
 村との競争が夜が更ふけるほど激しくなる。さわりの美しい文句へ来ると、どうする連がい  
 ろいろの言葉で半畳を入れる。そしてしまいには「あんまりじゃぞえ！」と、みんなが一  
 緒に泣き声を出して感心する。おかしいのは人形使いで、これも晩酌に一杯飲んだあとら

しくぼうつと眼のふちを赤くしながら使っているのはいいのだが、女形を使う男などは佳境に入ると自分も人形に釣り込まれてへんな身振りをする。それが、文楽あたりでもやることだけでも、ここのは毎日野良で働くのが本業の人たちだから、どす黒く日に焼けた顔に肩衣かたぎぬを着けたのが、又その上をほんのり桜色に染めて、さもない気持そうにしなを作るばかりでなく、「あんまりじゃぞえ！」を浴びせられると、絃いとに乗って表情までもして見せる。人形の型にも追い追いと奇抜な手が出て、朝顔日記に失望した老人を喜ばせるようなしぐさがある。太功記の次のお俊伝兵衛では猿廻しの与次郎が寢床の中へ這入ろうとする時、一旦戸締りをした格子を開けて家の前の道みち傍はたに蹲踞うすくまりながら小便をする。そこへ何処からか一匹の犬が現れて、与次郎の禪ふんとしくわを咬えてぐいぐい引つ張って行くのである。

大阪下りと云う触れ込みで、番附に大きく名を出している呂太夫の「吃どもまた又」が始まったのは十時過ぎだったが、それから間もなく見物席でえらい騒ぎが持ち上った。紺の詰め襟えりの服を着て五六人の仲間と一緒に車坐になつて飲んでいた土方の親分風の男が、いきなり土間に立ち上つて棧敷の客に「さあ来い」と云いながら喧嘩けんかを買って出たのである。なんでもその前から、見物席が大阪の太夫ということに反感を持つらしい土地ツ兎と、そうで

ないものとの二派に分れて弥次を飛ばしながら、大分おだやかでない形勢になっていたところへ、一方の棧敷から誰かが何か云ったのがその親分の癪に触ったものだと思える。

「さあ、野郎、出て来い」と今にも棧敷へ飛びかかろうとする剣幕に、「まあまあ」といつて仲間の者が一度にみんな立ち上つてその男をおさえつける。男はますます威丈高に、仁王立ちになつて怒号しつづける。外の見物があの男をどうかしろと騒ぎ出す。おかげで折角の真打ちの語り物がとうとう滅茶々にされてしまった。

## その十二

「じゃあ要さん、行つて来るからね」

「御きげんよろしゅう。まあ、まあ、ほんとに、お天氣のつづくのが何よりです。………お久さんも日に焼けないようにして、………」

「ふ、ふ」

と、笠の内で茄子歯が笑つて、

「奥様によろしゅう云うとおくれやす」

朝の八時頃、神戸行きの船が客を乗せているさんばし棧橋のところ、要は二人の順礼姿と袂たもとを分つことになった。

「どうぞお気をおつけなすつて。——いつごろお宅へお帰りになります？」

「さあ、——三十三箇所を残らず廻つちやあ大変なんで、いい加減にするつもりだが、

——とにかく福良から徳島へ渡つて、それから帰ります」

「お土産は淡路人形ですな」

「うん、そう。そのうちに是非京都へ見に来て貰もらいましょう、今度こそいいのを手に入れるから」

「ええ、ええ、いずれにしても月末時分に一ぺんお邪魔に出るかも知れませんが、ちよつとあの辺についてもあるんです」

岸を離れて行く船の上から、要は陸に立っている二人の方へ帽子を振った。

めいこさんがいじょう  
迷故三三界城

ごこじつぼうくう  
悟故十方空

ほんらいむとうざい  
本来無東西

かしょうなんぼく  
何処有南北

——笠の四方にそう筆太に記してある文字が、だんだん小さく読めないようになる。

お久がしきりに杖をかざして帽子に答えているのが見える。ああして笠を被った姿を遠くから眺めたところでは、三十以上歳が違つてもそれこそ「本来東西なし」で、いい夫婦づれの順礼のようではないか。——要はそんなことを考えながら、やがてかすかな鈴の音をあとに立ち去つて行く二人のうしろかげを見送つていた。「はるばると運ぶ歩みは頼もしや法の華さく寺をたずねて」と、ゆうべ宿の主を師匠に、二人が一生懸命に稽古していた御詠歌の文句が思い出された。老人は昨日、これとお経の読みかたとを習うために惜しいところで妹背山の芝居を切り上げて、九時から十二時近くまで熱心に教わつていたので、要もお附合いに節をおぼえてしまったのである。彼にはその歌の節廻しと、白羽二重の手甲に同じ脚絆を穿いて、上り框で番頭に草履の紐を結んで貰つていたお久の今朝のいでたちとが、かわるがわる心に浮かんた。最初はほんの一と晩のつもりで附いて来たのが、二晩になり三晩になつたのは、人形芝居が面白かつたからではあるが、かたがた老人とお久の關係に興味を感じたせいでもある。歳を取ると、なまじ理窟が分つたり神経が働いたりするような女は、うるさくて厭になるのであろう。やはり人形を愛するように簡単に愛し得られる女がいいのであろう。要は自分にその真似が出来ようとは思わないが

ら、何のかのと物の分った顔をして年中ごたごたをつづけている自分の家庭を顧みると、人形のような女を連れて、人形芝居のような扮装<sup>ふんそう</sup>で、わざわざ淡路まで古い人形を捜しに来る老人の生活におのずからなる安樂境のあることが感ぜられて、あんな心持になれたらばとも思うのであった。

今日も申し分のない天気ではあるが、こんな時分に遊山<sup>ゆうさん</sup>に出かける閑人<sup>ひまじん</sup>はあまりいないと見えて、遊覧船風にゆつくりと仕立てである特等の客室は、二階の西洋間の方も階下の日本室の方もガランとしている。要は手提げ鞆<sup>かばん</sup>にもたれて畳に両脚を投げ出しながら、海の光が人気のない天井へぎらぎら波紋を走らせるのを眺めていたが、瀬戸内の春のなごやかさはその薄明るい船室に青く映つて、ときどき通り過ぎる島かげから、花の匂いが潮の香と共に忍びやかに襲つて来るようである。おしやれと旅馴れないので一日二日の旅行にも着換えを用意して出た彼は、帰りは和服で通していたのを、ふと或る事を思いついて誰もいないのを幸いに急いでグレイ・フランネルの背広に着換えた。そして、それから何時間かを過した後に頭の上でガラガラ<sup>いかり</sup>錨を巻き上げる音が聞えるまで、うとうと眠り通してしまつた。

船が兵庫の島上<sup>しまがみ</sup>へ着いたのはまだ昼前の十一時ごろであつたが、要は真つ直ぐ家へは帰

らずに、オリエンタル・ホテルの食堂で三四日振りに脂あぶらつこい物を昼食に取り、食後にベネディクトインの一杯を二十分もかかつてゆつくりと飲んでから、その浅い酔いのさめきれぬうちに山手のミセス・ブレントの家の前で車を降りて、持っていた蝙蝠傘こうもりがさの握りの端で門の呼び鈴よりんのボタンを押した。

「いらつしやいまし、この鞆たもとは？——」

「今船から上つたんだ」

「どちらへ？」

「二三日淡路へ行つて来た。——いるかい、ルイズは？」

「まだ寝てるかも知れませんよ」

「おかみさんは？」

「おります、彼処あそこに。——」

ボーイの指さす廊下の突きあたりの、裏庭へ下りる階段のところ、此方こちらへ背中を向けたままミセス・ブレントは腰かけていた。いつもは声を聞きつけると、二十三四貫はありそうなたった体をもてあつかいながら、ずしりずしり二階を降りて来て、おあいその一つも云うのであるのに、今日はどうしたのか振り向きもしないで庭を見ている。開港当時に建

てられたかと思われる、天井の高い、ひっそりと暗い、間取りのゆったりした家で、昔は立派な洋館だったのに違うのが、久しく手入れをしないままに化け物屋敷のように荒れているけれど、廊下から見るとその雑草の生い茂った裏庭にも五月の青葉の明るさが充ちて、逆光線を受けているかみさんの灰色のちぢれ毛を、一とすじ二たすじ銀色に透き徹とおらせている。

「どうしたんだい、おかみさんは？ 彼処あそこで何を見てるんだい？」

「へえ、今日は機嫌が悪ござんしてね、さつきから泣いているんですよ」

「泣いている？」

「へえ、ゆうべ国もとから弟が死んだと云う電報が這入はいったもんですから、すっかり力を落しちまって、——可哀そうに、今日は朝から好きな酒も飲みやあしません。何とか云ってやって下さい」

「今日は」

と、要は彼女のうしろに寄って声をかけた。

「どうしたの？ マダム。弟が死んだと云うじゃないか」

庭には紫の花をつけた大きな梅せん檀の樹があつて、その樹の蔭のじめじめしたところに、

雑草と交つて薄荷<sup>はっか</sup>が沢山生えていた。羊の料理を拵<sup>こしら</sup>えたりポンチ酒を作ったりする時にその葉を使うのだからと云つて、蔓<sup>はびこ</sup>るままにしてあるのだが、白いジヨウゼツトのハンケチを顔にあてながら黙つて地べたを視<sup>み</sup>つめている彼女は、薄荷の匂いがしみたかのように眼のふちを赤くしていた。

「ねえ、マダム、………たいへんあなたを気の毒に思います」

「有りがとう」

幾重かの深い皺<sup>しわ</sup>に囲まれた、皮のたるんだ眼の中から涙が光の点線になってきらきらと落ちた。西洋の女は泣き虫だと云うことを聞いていたものの、こんなところを見るのは初めての要は、悲しい歌のしらべでも耳に馴れない外国のものはその悲しさが異様に強く感ぜられるのと同じように、妙にしみじみと哀れさがこたえた。

「弟は何処で死んだのかね？」

「加奈陀<sup>カナダ</sup>で」

「いくつになるの？」

「四十八か、九か、それとも五十か、多分そのくらいになっていたでしょう」

「まだ死なないでもいい歳だのに。——それじゃあなたは加奈陀へ行かなけりやならな

いんだらう？」

「いいえ、止める、行つたつて仕様がなないんだから」

「その弟と何年会わなかつたんです」

「もう二十年ばかりになります、——千九百九年に、<sup>ロンドン</sup>倫敦にいた時會つたのが最後でした、手紙は始終やりとりをしていましたけれど。……」

弟の歳が五十だとすると、このかみさんは今年幾つになるのであろう。考えてみれば要が彼女を知つてからでもすでに十年以上になる。まだ横浜が地震で今のようにならなかつた時分、彼女は山手と根岸とに邸<sup>やしき</sup>を構えて、いつも両方に女を五六人ずつは置いていた。神戸のこの家もその頃から別荘のようになっていたばかりでなく、そういう出店を<sup>シャンハイ</sup>上海や香港<sup>ホンコン</sup>あたりにも持つて、日本と支那とを股<sup>また</sup>にかけてときどき往つたり来たりしながら、ひとしきりは可なり手広くやつていたのに、それがいつのまにか、彼女の肉体のおとろえると共に商売の方もだんだん振わなくなつてしまった。世界戦争から<sup>こつち</sup>此方、日本の外国商館は次第に内地の貿易商に仕事を取られてぽつぽつ本国へ引き上げてしまふし、観光客にも昔のように馬鹿なお金を使うようなのが来なくなつたのが悪いんだと、当人は云うのだが、あながちそればかりが不振の原因ではないであらう。要がはじめて知つた時分には、

彼女は今ほど耄碌もうろくしてはいなかった。生れは英吉利イギリスのヨークシャーで、何とか云う女学校を出て、立派な教育を受けたと云うのを自慢にして、日本に十何年もいながらどんな時にも日本語は一言もしやべったことがなく、大概な女たちが植民地英語しかしゃべれない中で彼女一人が正確な英語を、それも殊ことさら更むずかしい単語や云い廻しを使い、仏蘭西フランス語も独逸語ドイツも流暢りゅううちように話した。そしてさすがに女将株の貫目もあり、活気もあり、何処やらにまだ姥うばさくら桜の色香さえもあつて、西洋人と云うものは幾つになっても若いものだと感心させたのに、そののち少しずつ気が弱くなり、記憶力が乏しくなり、女子供にも押しが利かなくなつてから、急に目に見えて年を取るようになったのである。以前はお客をつかまえて、昨夜は何処の国の侯爵こうしゃくがお忍びでいらしたなどと法螺ほらを吹いたり、英字新聞をひろげながら母国の東洋政策を論じて煙に巻いたりしたものだけけれど、この頃ではとんとそう云うヤマ気はなく、ただうそをつく癖だけが病氣のようになってしまつて、直すくに底の割れるようなことばかりを云う。あの威勢のよかつたかみさんが、どうしてこんなになつたのか不思議な気がするが、恐らく酒のせいなのだろうと、要はそう思うことがあつた。實際頭の働きの鈍くなつて、体がぶくぶく膨れるのと一緒に、彼女の過すウイスキーの量はますます増して行く一方で、酔つても昔はしまりがあつたのに、今では更にた

わいがなく、朝からせいせいと息を切らせているし、ボーイの話では月に二三度は人事不省になると云うし、血圧の高い人間の標本のような恰好をして、いつぼっくりと行ってしまうかも知れないのである。そんなふうだから、世間の景氣不景氣に拘わらず、此処の家が繁昌する筈<sup>はず</sup>はないので、氣の利いた女は借金を踏み倒して逃げてしまふ、コックやアマは酒の上り高をくすねる、一時は英領植民地あたりから純粹の金髪種が入れ代り立ち代り来ていたこともあつたのが、この二三年は合の兒か露西亞<sup>ロシア</sup>人ばかりになつてしまつて、それも一時に三人以上揃つてゐることはないのであつた。

「マダム、……悲しいのは無理もないが、そう泣いてばかりいて体にさわつたらいけないじゃないか。いつものあなたにも似合わない、元氣を出して酒でも飲んでみるといい。人間はあきらめと云うことが肝心だから。……」

「有りがとう、ほんとうに親切に云つて下さつて有りがとう。だけでもあたしには一人しかない弟なんです。……それは誰だつて一度は死にます。……どうせ死ぬにきまつています。……それは分つていますけれども、……」

「そうだとも。……ほんとうにそうだとも。……そう思つてあきらめるより仕方がないんだ。……」

歳を取つて誰にも相手にされなくなつた宿場の茶屋の芸者なぞで、馴染みでもない客をつかまえてくどくどと身の上の不幸を訴え、安価な感傷に陶酔したがるようなのがある。このかみさんのもつまりはそれで、悲しいのには違いなからうが、人からやさしく云われなさに思わせぶりなポーズを取つたり、芝居じみたセリフを使つたりしているので、平素のうそをつく癖がこう云う時にもその感傷を誇張させずには措かないのであらう。しかしそれにも拘わらず、この象のように大柄な外国の老婦人の歎きにはなんだか心が動かされる。田舎芸者の安っぽい涙と同じものでありながら、愚かにもその感傷に引き込まれて自分までが眼がしらのうるむような感じになる。

「済みません、ほんとうに、……ひとりで泣いていればいいのに、あなたまで悲しくさせてしまつて。……」

「なあに、そんなことは何でもない。それよりあなたこそ体を大事にしなければいけないよ、一人の弟が死んだからと云つて自分も病氣になつていい訳はないんだから。……」  
相手が日本の女だつたらこんな齒の浮くような言葉が口から出る筈はないと思うと、要は我ながら馬鹿々々しくもあり耻かしくもあつた。一体どうしたと云うのかしら？ ルイズのことばかり考えて来たのに不意を打たれたせいかしらん？ それとも陽氣の加減かしら

ん？ 自分は嘗て今の言葉の半分もの優しさのある日本語で、妻をでも亡くなった母親をでもいたわったことはなかったのに、英語と云うものは悲しい国語なのかしらん？……………」

「何をしてたの、マダムにつかまってたんじやないの？」

と、二階へ上るとルイズが云った。  
「うん、弱ったようも。……………僕はああ云うしめっぽい話は嫌いなんだが、泣かれてみると逃げようにも逃げられないで、……………」

「ふ、ふ、大方そんなことだろうと思つてたのよ。来る人来る人をつかまえて一ぺんは泣かないと済まないんだから」

「それでもまさか、泣くのはうそじやないんだろうな」

「そりやあ弟が死んだんだから、悲しいのは悲しいでしょう。……………あなた、淡路へ行つたんだって？」

「うん」

「誰と？」

「女房の親父と、親父の妾めかけと、三人づれで、……………」

「ふん、誰の妾だか分つたもんじやない」

「なあに、ほんとうだよ、尤もその妾に少々惚れていることは事実なんだが、……………」

「そんなら何しに此処へ来たのよ？」

「仲のいいところを見せつけられたから、聊か鬱憤を晴らしに来たのさ」

「御挨拶だわね、……………」

知らない者が若しこの会話を部屋の外にいて聞いたとしたら、しゃべっている女が栗色の断髪に茶色の瞳をした種族であろうとは、誰が想像するであろう。それほどルイズは日本語を巧みに話すのである。要はこの頃でも、しゃべりながらふと眼をつぶって、その声の調子と、アクセントと、言葉づかいだけを耳にしていると、ちやうど田舎の小料理屋で酌婦を相手にしている場面が浮かぶのである。ただ外国人の悲しさにはその発音に何処か東北訛りのようなひびきがあつて、それでいて云うことが恐ろしく巧者であるだけに、方々を渡り歩いた擦れつ枯らしの女給の言葉になつてゐることを、当人は夢にも知らないらしい。が、ともかくも暫くその声を聞いた後に再び眼を開いて室内を見ると、何と云う思いがけない光景であらう、彼女は化粧台の前の椅子にもたれて、満洲朝の官服に似せた刺繍のあるパジャマの上衣だけを、ようよう臀と擦れ擦れに着ている下はパンツの代りに脛一面のお白粉を穿いた脚の先へ、仏蘭西型の踵の附いた浅黄色の絹の上靴を、その

爪先を二艘そうの可愛い潜航艇へんさきの舳へんさきのように尖らしているのである。そう云えばこの女は脛ばかりでなく、殆ど全身へうすくお白粉を引くらしい。要は今朝も風呂から上つてそれだけの支度をするあいだ三十分以上も待つていなければならなかった。彼女自身に云わせれば母親の方に土耳トルコ古人の血が交つていと云うことで、その肌の色の白皙はくせきでないのを隠すうためにしているのだが、実を云うと要を最初に惹きつけたものはその何処やらに濁りを含んだ浅黒い皮膚のつやであつた。「君、この女なら巴里パリへ行つたつて相当に蹈ふめるぜ、こんな女が神戸あたりにうろついていようとは思わなかつた」と、或る時彼に案内された仏蘭西がえりの友達は云つた。その時分、——と云うのは今から二三年まえ、要は日本人でありながら特別に出入りを許されていた横浜時代のよしみを思つてふとこの家を訪ねた折に、彼女は波蘭土ポーランドの生れだと云つて外の二人の女と一緒にシャンパンのふるまいにあずかるべく挨拶に出て来たのである。彼女はまだ、神戸へ来てから三月にはならないと云つていた。戦争で国を追われて、露西亞にも居、満洲にも居、朝鮮にも居、そのあいだにいろいろの言葉を覚えたとかで、外の二人の露西亞生れの女とは自由に露西亞語で話した。「巴里へ行けば私は一と月で仏蘭西人と同じようにしゃべつてみせる」と自慢をするだけのものはあつて、語学は彼女の恵まれた才能であるらしく、三人のうちでこの女のみ

がかみさんのブレント夫人や、ヤンキーの酔っ払いなどを向うに廻して、英語でテキパキ  
 渡り合うことが出来たのである。けれど彼女が日本語をまでそれほど自在にあやつろうと  
 は！ バラライカやギタルラを伴奏しながらスラヴの唄をうたう口から、安来節やすぎや鴨緑おうりよ  
 江節つこうを寄席芸人よせに劣らぬ節廻しで聞かせるほど、それほど悪達者であろうとは！ いつ  
 も英語でばかり話していた要が、それを知って驚かされたのはつい最近のことなのである。  
 どうせこう云う種類の女は自分の過去を正直に云うものでないことは承知していたが、そ  
 ののち彼は彼女がほんとうは朝鮮人と露西亜人との混血児であることをボーイから聞いた。  
 彼女の母は今でも京城けいじょうに住んでいて、ときどき手紙を寄越すと云う。なるほどそれな  
 ら鴨緑江節の上手なことも、語学の習得の早いことも頷うなずかれる。ただ当人の話したいろい  
 ろのうちの中で、初めて会った時に歳を十八だと云ったのは、或はそれだけがひよつとす  
 ると本当に近いのかも知れない、なぜなら実際に見たところでも今年でせいぜい二十はたちぐら  
 いの若さにしか思えないし、容貌のわりに云う事やする事が早熟なのは、そう云う数奇さつきな  
 生い立ちをした多くの少女に逃れられない運命であるから。

別に何処と云うきまった巢もなく囲つてある者もない要には、日頃妻から得られないもの  
 を充たしてくれると云う点では誰よりも一番好みになつたせいかな、知り合つてから今日

までの二三年のあいだと云うもの、いつもの移り気な性分にも似ずこの女に依つて最も多く独り寝のあじきなさを慰められて来たのだが、彼はその理由として、日本人をめつたに入れない家であるのが隠れ遊びに都合がよいこと、茶屋へ行くよりも時間や費用が経済であること、女と自分自身とを動物として扱うときに、外国人同士の方が互に耻を忘れやすく、それだけあとで気が病めないこと——などを、もし人に聞かれれば挙げたであろうし、自分でも努めてそう信じて来たのである。しかしこの女を「四肢と毛なみの美しい獣」として卑しき去ろうとする意志の下には、その獸身に喇嘛教の仏像の菩薩に見るような歡喜が溢れているところをなかなか捨て難く思う心が、案外強く根をおろしている事実を、我ながら苦々しくさえ感じていた。一言にして云うとこの女は、ホリーウッドのスターだもの写真と、たまには鈴木伝明や岡田嘉子の肖像などを所嫌わずピンで留めてある薔薇色の壁紙に包まれた中に住んでいて、彼の味覚と嗅覚とをよろこばすためにペディキュールをした足の甲へそつと香水を振つておくだけの、ゲイシャ・ガールには思いも寄らない用意と親切とを尽すのである。彼は必ずしも面あてにそうした訳ではないが、美佐子が須磨へ出かけた留守に「ちよつと神戸へ買い物に行つて来る」と、身軽な運動服のいでたちで出て、夕方頃には元町あたりの商店の包みを提げながら戻つて来るのを常としてい

た。こう云う遊びは貝原益軒の教に従つて、——然しながらその教とは反対な趣味の上から、——午後の一時か二時頃の日の高い間を選んで、帰り道に一ぺん青空を見た方が後味がさっぱりとするし、全く散歩の気分を以て終始することが出来るのを、経験に依つて要は知つていたのである。ただ困るのはこの女のお白粉の移り香が特別に強く、体に沁み着いて離れないのみか、着ていた洋服はもちろんのこと、自動車へ乗ればその箱の中へ一杯に籠るし、家へ帰ると部屋じゆうが臭くなることだった。彼は自分のみそかごとを美佐子がうすうす氣づいていないとに拘わらず、<sup>あだ</sup>仇し女の肌の匂いを知らせることは、たとい名ばかりの夫婦にもせよ、妻への礼儀に欠けていると思つていた。有りていに云えば、彼の方でも美佐子の口にする「須磨」と云うのが果してほんとうの須磨であるのか、それともつと近い所に適当な場所を見つけてあるのか、ときどき好奇心を感じることにはあるにしても、強いて知ろうとは欲しないし、なるべくならば知らないで済むことを願つているのと同じように、自分がいつ何処へ行くと云うことは曖昧<sup>あいまい</sup>にして置きたかつた。そしてそう云う心づかいから、女の部屋で服を着る前にいつもボーイに風呂を立てさせたものであつたが、そのお白粉はべつとり鬢<sup>びん</sup>付け油のように粘り着くたちのものだと思へて、余程ごしごしこすらなければ、洗つても洗つても落ちないのであつた。彼はしばし

ばこの女の全身の甘皮が、自分の肌へ肉襦袢じゆばんのようにすっぽり被さってしまった気がして、それを残らず洗い落すのに多少の未練を感じながら、やっぱり自分が思ったよりも彼女を愛していることを意識しないではいられなかった。

「プロジツト！ ア、ヴォートル、サンテ！」

と、二つの国の言葉で云いながら、彼女はうすい瑪瑙色めのうにかがやくグラスへ唇をつける。この女はいつもこうして、此処の家には碌ろくなシャンパンはないと云う口実の下に、自分がこっそり買い込んで置くドライ・モノポールを三割も高く売りつけるのである。

「あなた、あの話考えてくれた？」

「いいや、まだ、……………」

「でもどうしてくれるのよ、ほんとうに？……………」

「だからさ、そいつがまだだと云ってるんだよ」

「ちよッ、いやんなっちゃうなあ、いつでもまだだまだだって。——この間あなたに話したでしょう？ あたしの方は千円でもいいのよ」

「聞いたよ、そいつは」

「じゃあ何とかしてくれない？ 千円ぐらいなら考えてみるって云ったじゃないの」

「云ったかしらん、そんなことを」

「うそツつき！　だから日本人は嫌いだって云うんだ」

「お気の毒様、どうも日本人で相済みません。いつかのあの、日光へ連れて行ってくれた  
アメリカ亜米利加のお金持はどうしたんだい？」

「そんな話をしているんじゃないわよ。あなたほんとうに思ったよりもしみつたねえ！  
 ゲイシャ・ガールにならいくらだって出す癖に」

「冗談じゃあない、僕をそんなお金持だと思ってるのが間違いなんだよ、千円と云えば大金だからな」

彼女はけいぼう閨房の口説くぜつにいつもこの手を出すのである。はじめはマダムに二千円の借りがあ  
 るから、それを立てかえて一軒家を持たしてくれろと云っていたのが、この頃は少し様子  
 をかえて、さしあたり千円出してくれさえすれば残りは証文にしておくからと云うようにな  
 った。

「ねえ、あなたあたしが好きなんじゃないの？」

「うん、……………」

「ちよつと！　そんな気のない返辞をしないで、もっと真面目に聞いて頂戴！　ほんとう

に惚れてる？」

「ほんとうに惚れてる」

「惚れてるなら千円ぐらい出したらいいわよ。でなけりや優待して上げないわよ。……」

さあ、どっち？……出すか出さないか？……」

「出す、出す、出すと云つたらいいじゃないか、怒るなよそんなに、……」

「いつ出す？」

「今度持つて来る」

「今度こそきつとか？ うそじゃないか？」

「僕は日本人だからなあ」

「ふん、畜生！ 覚えてるがいい！ 今度お金を持つて来なけりや絶交してやるから……」

……あたしいつまでもこんな卑しい商売をしてるのが厭いやだから頼むんじゃないの。ああ、

ああ、ほんとに、なんてあたしは不仕合わせなんだろう。……」

それから彼女は新派の俳優そつくりの口調になつて、さも哀れっぽく涙ぐんだ眼に物を云わせて、いかにこの稼業が自分のような人間には堪たえられないかと云うことを説明したり、一日も早く娘が自由の身になれるのを待ちこがれている母親の境涯を訴えたり、滔とうとう々と

して天を怨み世を呪う言葉をつらねる。彼女はここへ来る前には女優をしていたことがあるから、ステージ・ダンスならエリアナ・パヴロヴァあたりには負けないくらいな腕がある、要するにこんな所にいる女とはたちが違う、自分のような才能のある者をこうして置くのは勿体ない話だ、巴里やロス・アンジェルズへ行っても立派に一本立ちが出来るし、堅儀な方面ならこれだけ語学の天分があつたら重役の秘書にでもタイピストにでもなれる、だから自分を救い出して日活の撮影所か、外国の商館へ紹介してくれろ、そうして貰えれば月々の物は百円か百五十円も補助してくれたら沢山だと云うのである。

「あなた今だつて一遍来れば五十円や六十円は使うじゃないの。それを考えたらいくら得だか知れやしないのに」

「だって、西洋人を女房に持つと、月千円はかかると云うぜ。君のような贅沢な女が百円や百五十円でやって行けると思ふのかい」

「ええ、行ける、きつとあたしならやって行ける。会社へ出たら自分で百円は稼げるんだから、そうしたら二百五十円になるじゃないの。まあ、見て御覧よ、立派にやってつて見せるから。——あたしだつてもうそうなたら余計なお小遣いをねだったり、着物を拵えたりしやしないんだから。こんな商売をしているからだけど、あたしを贅沢な女だと

思つたら大した間違ひなんだからね。<sup>はばか</sup> 憚りながら家を持たしたらあたしぐらい几帳面で、無駄づかいをしない女はないんだからね」

「だけでも、借金は立て換えた、そのままぶいと西比利亜<sup>シベリア</sup>へでも逃げて行かれたらそれつきりだぜ」

そう云うと女は心外な表情をして見せて、口惜<sup>くや</sup>し紛れに寢台の上で地団太を踏む。要はそれが面白さに交ぜ<sup>ま</sup>つ返しているようなものの、一時は多少の好奇心を動かしたこともないではなかった。どうせこの女のことだから囲ったところで長つづきはしないであろうし、冗談ではなくハルピンあたりへどろんをするのが落ちであろうが、此方も寧ろ<sup>むし</sup>その方が背負<sup>よ</sup>い込みにならないでいいかも知れない。彼にはそんなことよりも、実は妾宅を構える手続きが事務的にひどく億劫<sup>おっくう</sup>な気がした。女は普通の日本建ての借家でいい、家具さえ洋風にしてくれたらと云うのだけれども、建てつけのガタピシする狭くらしい部屋に這入つて、歩きたびごとにもくもくふくれ上る畳を踏みながら、散切り<sup>ざんぎ</sup>頭に浴衣<sup>ゆかた</sup>がけでいられたりしたら、——そしてうわべだけでもせよ、今までの贅沢が打つて変つて、急に几帳面に、妙なところで所帯持ちをよくされたりしたら、——と、そう思うと何だかお座がさめるのであつた。しかし女の口説き工合で、いい加減にあしらっているうちにいつか冗談

が本当にならないものでもなく、そうなればそれで、ずるずるに引き擦られて行きかねないのだが、彼女の愁訴はあまり芝居が多すぎて、懊<sup>し</sup>れたり怒ったりすればするほどますます滑稽になるのである。窓と云う窓には鎧<sup>よろい</sup>戸がおろしてあるけれど、その隙間からさし込んで来る初夏らしい真昼のあかりが、色ガラスを透して来たような赤味を帯びてどんより物の輪<sup>りん</sup>廓<sup>かく</sup>を縁<sup>ふち</sup>取<sup>と</sup>っている部屋の中で、この満身にお白粉を塗った歎<sup>かな</sup>喜<sup>ぎ</sup>天<sup>てん</sup>の肉体が薄桃色に染めかえられ、東北なまりのセリフを云うごとに手を挙げ臀を振る様子は、まことに哀れと云うよりも賑<sup>にぎ</sup>やかに勇ましく、要はその踊りを見たいためにわざといつまでも気を持たせているのであった。そしてどうかすると、断髪に赤い体であばれている姿を眺めながら、この恰好で紺の腹がけを掛けさせたらんと金太郎そのままだと思つと、ぷつと吹き出したくなつたりした。

ボーイは彼の云い附けた通りキツチリ四時半に風呂を沸かした。

「今度はいつ？」

「多分来週の水曜あたり、……………」

「じゃ、ほんとうにお金を持つて来てくれる？」

「分つた、分つた」

扇風器の風を湯上りの背中へ浴びながら、彼は自分でもその現金さに呆れるくらい、へんに冷淡に、そそくさとパンツへ脚を通した。

「きつとだわね？」

「きつと持つて来る」

そう云いながら握手をする時、「きつともう来ないぞ」と心の中では云うのであった。

きつともう来ない、——ボーイに門を開けさせて、表に待っている車の中へ身をひそめながら、いつでも彼は帰りがけにこの決意を堅めて、扉の隙間から接吻を送っている女の顔へ心ひそかに永久の「さよなら」を投げるのであるが、奇妙なことにそれが三日とつづくことはなかった。三日がやがて五日となり、一週間となるあいだに、再びこの女に会いたい思いが馬鹿々々しいくらい萌きざして来て、ずいぶん無理な繰り合わせをしてまで一途に飛んで来るのである。会う前の恋いしさと会ったの後の胸ぐるしき、——そう云う心の変わりかたはこの女の場合に限ったことではなく、芸者と馴染んでいた時分にも少しは覚えのあることだけでも、しかしこんなに冷熱の度が激しいと云うのは、ひつきよう畢 竟 生理的原因に依るからなので、それだけルイズは酔わせかたの強い酒なのであろう。要ははじめ、彼女の言葉を信じさせられていた頃には、今の日本の青年たちが大概そうであるように、

その西欧の生れであると云うことに或る特別な幻想とあこがれを抱いていた。思うにこの女のいいところは、そんなお客の心理を心得て、常に注意してその肌の生地きじを見せないことと、そうしていれば彼女のうそがほんとうとして通用する程度の姿態を持っていることにあるので、要も実は、その浅黒い皮膚の色には今以て魅惑を感じながら、たとい人工的であつても矢張はくせき白はく皙せきの肉体が醸かもす幻想を破りたくないような気がして、ついぞ一度もそのお白粉を剥はがさせたことはなかつたのである。彼の頭には「巴里へ行つてもこの女なら相当に蹈める」と云つた友達の評価が案外深く記憶されていた。彼は車に揺られながらまだ移り香がかすかに残っている右のてのひらの匂かいを嗅かいだ。そのたなごころに沁しみ着いたのは、どう云う訳か風呂から上つた最後までも匂かっているのです、この頃はわざとそこだけ洗わないようにして、なまめかしい秘密を手の中へ握かつて帰るのであつた。

「今度こそほんとうにこれつきりだろうか、もう二度と行かずにいられるだろうか」

と、彼はそんなことを考えてもみた。今の自分は誰に遠慮をする必要もないのであるが、彼にはへんに道德的な、律義りちぎなところがあるせいであらうか、青年時代から持ち越しの、「たった一人の女を守つて行きたい」と云う夢が、放蕩ほうとうと云えば云えなくもない目下の生活をしていながら、いまだに覚め切れないのである。妻をうとみつ妻ならぬ者に慰め

を求めて行ける人間はいい、もしも要にその真似が出来たら美佐子との間にも今のような破綻はたんを起さず、どうにか弥縫びほうして行けたであろう。彼は自分のそう云う性質に誇りも引け目も感じてはいないが、正直なところそれは義理堅いと云うよりも寧ろ極端な我がままと潔癖なのだと、自分では解釈していた。国を異にし、種族を異にし、長い人生の行路の途中でたまたま行き遇あつたに過ぎないルイズのような女にさえも肌を許すのに、その惑溺わくできの半分をすら、感ずることの出来ない人を生涯の伴侶はんりよにしていると云うのは、どう思っても堪えられない矛盾ではないか。

## その十三

拝復

先日は失礼致候そつろつ。あれより予定の通り阿波あわの鳴門徳島を経て去月二十五日帰洛きらく、二十九日御差立の貴札きさつ昨夜披見ひけん致候。誠に誠に思いの外の儀、美佐こと素もとより不束ふつつかながら日頃左様なる不所存者のようには養育不致いたさず候処、俗に魔がさしたと申すにや、拙老こ此の歳に及び斯かかる憂きことを耳にいたし候は何の因果かと悲歎やる方なく候。第一親の身

として其許そこもとに対しても御詫わびの申様も無これなく之、深く耻はじいり入申候。

既に御申越の如き事態に差迫り候ては、今更兎角とかくの執成とりなしは御聴入れも可これなかるべく無なく之、重々御立腹の段察さつしり入候え共、聊いささか存じ寄りの儀も有これあり之、近日美佐子同道御入来べいさくどうごらいくだ被下間敷候哉されまじくそうろうや、然る上は拙老とくより篤とくと本人へ申聴かせ何卒なにとぞして料簡を入替えさせ度たく、万一改かいしゆん俊不致候わば如何様いかようにも成敗つかまつるべく可仕、もし又本人に於て向後を屹度きつと相慎しめ候節は、幾重にも御勘弁願上候。

実は執心の人形ようよう手に入り申、归来早速御案内申上度と存じながら肩の凝りを休め居候折柄、御状に接し茫然ぼうぜん自失、とんと興きようざめ申候。折角巡礼の御利益も無なく之、却かえて仏罰ぶつむを蒙り候ことかと老人の愚痴のみ出いで候。

尚々なおなお明日にも御入洛待上候。先まずそれ迄までは現状を維持被成候様、此儀くれぐれも御願申上候。

「…………『斯かかる憂きことを耳にいたし候は何の因果かと悲歎やる方なく』か、困ったな  
どうも、……………」

「何と云つておやりになったの？」

「出来るだけ簡略には書いたんだけど、重要な点は洩らさなかった積りだ。この事は僕にも責任があり、僕自身の希望でもある、つまり五分々々と云う点によくよく念を押しただが、……」

「こう云つて来るのはあたしには分つていたんだけど、……」

でも要には意外であつた。手紙で諒解<sup>りようかい</sup>を求めるべき性質のものではないし、それでは誤解が起り易いから、直接行つて話してくれたらと云う美佐子の希望は尤もであり、自分もそれに越したことはなかつたのだが、一と先ずあらましを云つてやつて、日を置いてからと云う氣になつたのは、不意に老人を驚かすことのいかにも忍び難いのと、ついこの間も一緒に呑氣<sup>のんき</sup>な旅をしながら噫<sup>おくび</sup>にも出さずにいたことを、何としても面と向つて切り出す顔がないからであつた。殊にこの返事にもあるように、先は一途<sup>さき</sup>に人形を見に來たと思つて、直ぐその手柄話になるであろう。そうしたらいよいよ出鼻<sup>くし</sup>を挫かれる。それに要は、老人の過去の経歴から見て実はもう少し分つてくれるように予想していた。口では旧式な思想の持ち主のようなことばかり云うものの、それはああ云う人に有りがちな一種の氣取り、趣味なのであつて、ほんとうはもつと融通も利くし、近頃の世相や風潮にも風馬牛ではない筈である。それが此方<sup>こつち</sup>から云つてやつたことをその通りに読んでくれないのみか、

「重々御立腹の段察入候え共」とか「御詫びの申様も無之」などと書いて来ると云うのは、あんまり見当が違い過ぎる。あの文言をそのまま素直に取ってくれたら「深く耻入る」筋はないのだし、なるたけ気の毒な思いをさせまいと注意して書いたつもりであるのに、矢張一往は恐縮した挨拶をするのが礼儀と云うものであろうか。

「僕はこの手紙には大分掛け値があると思うね。こう云う昔風な文体を使えば内容だって旧式にしなければ映りが悪いから、こいつも趣味で書いているんで、お腹の中はこれほど悲歎やる方ないんでもないと思うよ。折角人形を飾って嬉しがろうとしていた矢先を、癩しゃくに触ったぐらいなんじゃないか」

美佐子はそのなことはどうでもいい、とうに超越していると云う風に、やや青ざめた顔を、全く無表情に落ち着かしていた。

「どうする、お前は？」

「どうすると云つて………」

「一緒に行くか」

「あたしイヤだわ」

その「イヤ」と云う言葉をさもイヤらしく彼女は云った。

「あなたが行つて話して来て頂戴よ」

「けれどもこう云つて来てるんだから、とにかくお前も行かないじやなるまい。僕は、会つてさえしまえば案ずるよりは生むが易いと思つてゐるんだ」

「話が分つてから行くわよ。お久なんぞのいる所でお談義を聴かされるのは真つ平だから」二人は珍しくも面と向つて互の眼の中を覗詰めながら話してゐるのであるが、そのぎこちなさを隠そうとして殊更つけつけと物を云いながら細巻の金口を輪に吹いてゐる妻の様子を、夫はいささか持てあまし気味に眺めていた。妻は自分では意識してゐないようだけれども、いつとはなしに顔や言葉で感情の表わし方が昔と變つて来てゐるのは、多分阿曾との対話の癖が出るのであらう。要はそれを見せられる時、彼女が最早や此処の家庭の者でないことを何より痛切に感じない訳には行かなかつた。彼女の口にする一つの単語、一つの語尾にも「斯波」と云う家の持ち味がこびり着いてゐないものはないのに、それが夫の眼の前で新しい云い廻しに取り変えられて行きつつある、——要は別離の悲しみがこう云う方面から襲つて来ようとは思ひ設けてもいなかったもので、もう直ぐ後に迫つて来ている最後の場面の苦しさが今から予想されるのであつた。だが考えれば、嘗て自分の妻たりし女は既にこの世にはいないのではないか。今さし向いに据わつてゐる「美佐子」は

全く別な人間になつてゐるのではないか。一人の女がいつしか彼女の過去にまつわる因縁を離脱してしまつたこと、——彼にはそれが悲しいので、その心持は未練と云うのとは違ふかも知れない。そうだとすれば苦に病んでいた最後の峠は気が付かないうちに通り越してしまつたのかも知れない。……

「高夏は何と云つて来たんだ」

「近々にまた大阪に用があるんだけど、此方こっちが何とか極まるまでは行きたくない、行つても御宅へは伺わないで歸るつて、……」

「別に意見は云つて来ないのか」

「ええ、……それからあの、……」

美佐子は縁側に坐布団を敷いて一方の手で足の小指の股を割りながら、煙草を持つた方を延ばして皐月さつきの咲いている庭の面へ灰を落した。

「……………あなたには内証にして置いててもよし、云うなら云つても構わないって書いてあるんだけど、……………」

「ふん？」

「実は自分の独断で、弘には話してしまつたつて云うの」

「高夏がかい？」

「ええ、……………」

「いつのことなんだ」

「春の休みに一緒に東京へ行ったでしょう、あの時に」

「何だって又余計なことをしゃべったんだろう」

わざわざ京都の老人にまで知らせてやった今になっても、まだ子供には云いそびれつつ過していた要は、さてはそうだったのかと思うと、それを今日まで鵜<sup>う</sup>の毛ほども感づかれないうようにしていた幼い者の心づかいが、いじらしくも不憫<sup>ふびん</sup>でもある一方、あまりのことに小面憎<sup>こづらにく</sup>い心地さえした。

「しゃべる積りではなかったんだけど、ホテルへ泊まった晩にベッドを並べて寝ていると、夜中にしくしく泣いているもんだから、どうしたのかと思って聞いてみたのが始まりなんですって。……………」

「そうしたら？」

「手紙だから委<sup>くわ</sup>しいことは書いてないけれど、お父さんとお母さんとは事に依ると別々に住むようになる、そしてお母さんは阿曾さんの家に行くかも知れないと云ったら『そんな

「僕はどうなるんです』って聞かれたんで、『君はどうにもなりはしない、いつでもお母さんに会えるんだから、家が二軒になったつもりでいたらいんだ。どうしてそうするのかと云う訳は、大人になれば自然と分る時が来る』って、それだけ云っただけなんですって」

「それで弘は納得したのか」

「なんにも云わないで泣きながら寝てしまったんで、明くる日どうかと思いながら三越へ連れて行ってやると、前の晩のことは忘れたように何を買ってくれ彼を買ってくれと云うもんだから、子供と云うものは実に無邪気だ、これなら安心だと思ったと云うんですの」

「だが、高夏が話すのと僕が話すのとは違うからな。——」

「そうそう、それから、——そんなに子供に話すのが辛ければもうその必要はないじゃないか、独断で済まなかったけれど、君等のために僕がその難関を突破して置いてやったからって、——」

「そうは行かんさ、僕はずべらじやああるけれども、そんなキマリの付かないことは嫌いなんだ」

しかし要がその難関を乗り越える仕事を最後の最後まで延ばしているのは、この場になっ

てさすがにそれを口に出しては云えないけれども、いまだに事の成行きがどう変化するか分らないと云う一縷<sup>る</sup>の望みを一寸先の未来に托しているのもあった。妻は強気でいるようなものの、そのひた向きな感情の裏には一と入脆<sup>しもろ</sup>い弱気が心の根を喰<sup>く</sup>つていて、ほんのちよつとした物のはずみに泣きくずおれてしまいそうに思える。そうなることを孰<sup>どっち</sup>方も恐れていればこそ、そんな機会を作らないように互に避けているのではあるが、現にこうして相對している今の場合でも、話の持つて行きよう次第で千里の彼方<sup>かなた</sup>に飛び去ったものが一瞬のうちに歸つて来ないものでもない。要は彼女が今日になつて老人の裁斷に任せるだろうとは夢にも予期していないながら、もしそうなつたら自分もそれに従うより外にないと云うような、希望ともあきらめともつかないものが何処か胸の奥の方に潜んでいるのを、我から不思議にも疎<sup>うと</sup>ましくも感じた。

「それではあたし、——」

妻はこれ以上向い合つていることに不安を覺えたのであろう、いつもの時間が来たことをそれと察して貰うために茶筆<sup>ちやだんす</sup>筒の上の時計に眼をやつて、襲われたように立つて着物を着換え始めた。

「あれきり御無沙汰<sup>ぶさた</sup>しているが、近いうちに僕も一ぺん会つておこな」

「ええ、——京都へ行く前になさる？ 後になさる？」

「向うの都合はどうなんだ」

「明日にも御入洛待上候と云うんだから、京都を先になすつたらどう？ 此方へやって来られると面倒だし、それにその方が極まつてからなら、自分ばかりでなく母にも会つて戴くと云っているんですから」

「お前、そこに高夏の手紙はないのか」

恋人の許へ急ぐべく身支度をしている「一人の女」を、むしろ可憐かれんな眼を以て眺めていた要は、廊下へ出て行くそのうしろかげを呼び止めて云った。

「あれをあなたに見せるつもりで何処かへ置き忘れてしまったのよ、帰つて来てからでよくはなかつて？ ——尤もさつき話したようなことなんだけど」

「いや、見つからなければどうでもいいんだ」

妻が出かけてしまったあと、要はビスケットをひと握りつかんで犬小屋の方へ降りて行つて、二頭の犬に代る代る餌えさを与えたり、じいやと二人でブラシをかけてやったりしたが、暫くすると茶の間へ戻つてぼんやり畳に寝そべっていた。

「おい、誰かいなか」

と、お茶を入れさせようとして女中を呼んでみたけれど、部屋に引つ込んでいると見えて返辞をしない。弘もまだ学校から帰らないし、家の中は森閑しんかんとして何だか一人取り残されたように静かである。仕方がない、又ルイズにでも会いに行こうか。——彼はそう思つてみて、こう云う時にいつもきまつてそんな気になる自分自身が、なぜだか今日は哀れな男に感ぜられた。たかが相手は一人の娼婦に過ぎないのに、もう二度と行かないの何のと云うむずかしい決心をして、それに囚とらわれるのも馬鹿々々しいと云う風に思い直しては、結局会いに行くことになるのが常であつたが、実はそんなことにも増して、妻が出かけて行つたあとの邸の中のガランとした感じ、——障子や、襖ふすまや、床の間の飾りや、庭の立ち木や、そう云うものが有るがままにありながら、俄にわかに家庭が空虚にされてしまったやうなうら淋しさ、——それが何より堪え難かつた。いったいこの家は前の持ち主が建てて一二年にしかならないものを、関西へ移つて来た年に買い取つたので、この八畳の日本間はその時建て増したのであるが、毎日見馴れて気が付かないでいるうちに、そう念を入れて拭ふき込みもしなかつた北山の杉や榎とがの柱が年相応のつやを持ち出して、これからそろそろ京都の老人の気に入りそうな時代が附いて来るのである。要は寝ころびながら今更のやうにそれらの柱の光沢を見、八重山吹の花が垂れている床の間の春日卓かすがじよくを見、闕しきいの向

うに、戸外のあかりを水のように映している縁側の板を見た。妻がこのごろのあわただしさの中にありながらなおときどきは四季の風情ふぜいを座敷に添える心づかいを忘れないのは、いくらか情勢で繰り返しているのだとしても、やがてこの部屋にあの花までがなくなってしまう日を想うと、名ばかりの夫婦と云うものにも、朝夕眼に沁みる柱の色と同じようななつかしさがある。……

「お小夜、タオルを熱くして絞って来てくれ」

と、要は立つて女中部屋の方へ聞えるように云った。そしてその場でセルの単衣ひとえの両肌を脱いで、汗ばんだ背中をきゅつきゅつと擦こすって、出しなに妻が揃えておいた背広服に着かえてから、着物と一緒にふところから落ちた京都の老人からの手紙を拾って上衣の内隠しへ収めた。が、紙入れの中を見たがったり、「これは芸者から来たんじゃないの」などとポケットの物を引たくるルイズの癖を思い出して、鏡台の抽出ひきだしの、底に敷いてある新聞紙の下へ入れようとする、何か가가さがさと手に触った。美佐子がそこへ高夏の手紙を挿さし込んで置いたのである。

「読んでもいいのかしらん？」

手には取ったものの、封筒の中を直ぐに引き抜くのは躊躇ちゅうちよせられた。こう念入りに隠

してあるのを妻が置き忘れる筈はない。言葉に窮してああ云ったので、読まれることを好んでいないに違いないのだ。読んだところで妻への言訳は立つのであるが、下らぬ隠し立てをしたことのない彼女がそれを自分に読ませまいとしたことに、何かしら中味の不吉さが予想された。――

オ手紙拝見シマシタ。

モウ好イ加減キマリガツイタ時分ダト思ツテイタノニ、  
先<sup>せんだつて</sup>達 淡路カラ絵端書ヲ貰ツ  
テマダソンナコトカト驚イタ次第デス。ダカラ今度ノアナタノオ手紙デハ驚キマセン。

……

そこまで見ると要は洋館の二階へ上つて、ゆっくりあとを読みつづけた。

……ケレドアナタノ決心ガ真ニ最後ノモノデアルナラ、一日モ早イ方ガヨクハナイデス力。實際此<sup>ここ</sup>処マデ来テシマツテハ外ニ道ハナサソウデス。僕ハツクヅク、斯<sup>しば</sup>波君モ我が儘<sup>まま</sup>ダガアナタモ我ガ儘<sup>まま</sup>ダ、今日ノ事ハ二人ノ我ガ儘ガ当然招イタ報イダト云ウ感ヲ深

クシテイマス。アナタガ僕ニ泣キ言ヲ云ウノハイイ、シカシソノ泣キ言ヲ、——アナ  
 タ自身ハ泣キ言ノ積リデハナイカモ知レナイガ、——何故僕ニ云ウ代リニ夫ニ向ツテ  
 云ワナイノカ、ソレガアナタニ出来ナイト云ウノハ、世ニモ不幸ナ人ガアレバアルモノ  
 ダト思ツテアナタノタメニ<sup>いつきく</sup>一掬ノ涙ナキヲ得マセン。事実ソレナラ夫婦デハイラレナ  
 イ。「夫ガアマリ自由ヲ与エテクレタノガ恨メシイ」トカ、「阿曾ト云ウ人ヲ知ラナケ  
 レバヨカッタ、知ツタノヲ後悔シテイル」トカ、モシソノ心持ノ幾分ヲデモアナタガ直  
 接斯波君ニ表白スル事が出来タラ、——夫婦ノ間ニセメテソレダケノ素直サガアツタ  
 ラ、——ト、ソウ云ツタトコロデ今更愚痴ニ聞エマスカラ、最早ヤ何事モ申シマスマ  
 イ。オ手紙ノコトハ勿論斯波君ニハ云イマセンカラ安心シテイラツシャイ。徒ラ<sup>いたず</sup>ニ悲シ  
 ミヲ増サセルニ過ギナイノナラ知ラセルノハ無駄ナノダカラ。僕コウ見エテモ必ズシモ  
 木石<sup>ぼくせき</sup>漢ニ非ズ、芳子ノコトナド思イ出シテ感慨無量ナルモノアリ、唯何処マデモソウ  
 云ウ感情ヲ後ニ残シテ斯波ノ家ヲ去ラナケレバナラナクナツタアナタノ不仕合ワセヲ歎  
 クノミデス。何<sup>なに</sup>卒<sup>しそ</sup>コノ上ハ新シイ恋人ト幸福ナ家庭ヲ持ツテ過去ノ悲シミヲ忘レルヨ  
 ウニ、ソシテ再ビ同ジ過チヲ繰リ返サヌヨウニシテ下サイ。ソウスレバ斯波君ダツテ  
 「氣ガ樂ニナル」デハナイデスカ。

アナタハ誤解シテイルヨウダガ僕ハ決シテ怒ツテイルノデハナイノデス。タダ僕ノヨウナ頭ノ大ザツパナ者ガ、アナタ方ノ複雑ナ夫婦関係ノ渦中ヘ飛ビ込ムノハソノ任ニ非ズト考エ、アナタ方自身デカタヲ附ケルマデ遠ザカツテイルノヲ賢明ダト信ジタノデス。実ハ大阪ヘ行ク用モアルノダガ、ソレデ出発ヲ差シ控エテイマス。行ツテモ今度ハ寄ラナイデ帰ルカモ知レナイカラ悪ク思ワナイデ下サイ。

ソレカラ、僕ハアナタ方ニ隠シテイタコトガアリマス。ト云ウノハ、イツゾヤ東京ヘ行ツタ時弘君ニ話シテシマツタノデス。……ソウ云ウ訳デ、結果ハ案外ヨカツタと思ウノデスガ、ソノ後弘君ノ様子ニ変ツタ点ガアルカドウデスカ。僕ノ所ヘハ時々手紙ヲクレルケレドモアノ晩ノコトニハ一言モ触レテナイ。中々伶俐<sup>りこう</sup>ナ子供デス。ナドト胡麻化<sup>ごまか</sup>スノデハナイガ、余計ナオセツカイヲシテ悪カツタラ詫<sup>あや</sup>マリマス。シカシ私力<sup>ひそ</sup>ニ思ウノニ、却<sup>かえ</sup>ツテ僕ガソウシタ方ガ「氣ガ楽ニナリ」ハシナイデスカ。……アナタノ今ノ良人<sup>おとこ</sup>ノコト、及ビ弘君ノコトハ、御依頼ガナクトモ親戚ノ一人トシテ、親子ノ性質ヲ最モ良ク理解シテイル友人トシテ、及バズナガラ出来ルダケノ事ハスル積リデスカラ、決シテ心配シナイデ下サイ。多分二人トモ打撃ニ堪エテヤツテ行ケルト思イマス。ドウセ人生ハ平坦ナ道バカリデハナイ。男ノ児ニハ苦勞ガ樂デス。斯波君ニシタツテ今マデ苦勞ガ

ナサ過ギタンダカラ、一遍グライアツテモイイ。ソウシタラ我が儘ガ直ルカモ知レナイ。  
 デハ左様ナラ。当分才目ニ懸リマセンガ、イズレアナタガ新夫人トナラレタ暁ニ改メテ  
 拝顔ノ機会ノアルコトヲ望ミマス。

五月二十七日

高夏秀夫

斯波美佐子様

侍女

高夏としては珍しく長い手紙であつた。要はそれを読んでもしまうと、人氣のない部屋で心に油断があつたせい<sup>か</sup>、知らず識らず涙が頬<sup>ほお</sup>を濡<sup>ぬ</sup>らしていた。

## その十四

きようはお客がお客なので床の間に活<sup>い</sup>けた姫百合<sup>ひめゆり</sup>の花の向きを気にしながら、お久は今朝からときどきそれを直していたが、四時が少し廻<sup>めぐ</sup>つた時分に門の青葉をくぐつて来るバラ

ソルの影を、二た間を隔てた伊予すだれの此方から眼に留めると、そのまま立つて縁側を降りました。

「見えたかえ」

と、昼寝のあとを庭で蓑虫<sup>みのむし</sup>を退治していた老人は、うしろに庭下駄の音を聞きつけて云った。

「へえ、お越しになりました」

「美佐子も一緒か」

「そうらしおす」

「よし、よし、お前は茶を入れな」

そう云い捨てて飛び石づたいに枝折戸<sup>しおりど</sup>から表へ廻ると、

「やあ」

と、気軽に声をかけた。

「さあ、まあ、お上り。暑かっただろう、さぞ、……………」

「ええ、朝のうちに出来ればよかったんですが、ちょうど日中になってしまって、……………」

「そうだろうとも、たまに天気になったと思うと、まるで今日あたりは土用のようだ。さ

あ、さあ」

と云つて先へ立つて行く老人のあとから玄関を上った夫婦は、新芽の緑を反射している籐とうの網代あじろのひいやりとしたのを足袋たびの底に踏みながら、家じゆうに焚たきしめてあるらしいほのかな草実そうじつの匂かいを嗅かいだ。

「そうそう、お茶よりも先に手拭てぬぐいだつた。つめたいのを一つ絞しぼつておいで」

若葉の繁みで土庇どびさしの外が小暗いばかりになつている座敷の、わざとすずしい端近はしぢかな方へ席を取つてほつと一と息入れている夫婦のけはいから、それとなく何かを見て取ろうとした老人は、汗ばんだ顔に庭の青葉を映している要の様子に気が付いて云つた。

「つめたいのより熱いお湯ゆで絞しぼつた方がええことおへんか」

「うん、そうだったな。……要さん、まあ羽織でもお取り」

「ええ、ありがと。この辺は昼間から蚊がいますな」

「ええ、ええ、『本所ほんじょうに蚊がなくなれば大晦日おおみそか』と云うが、ここのは藪やぶツ蚊かなんだ

からなかなか本所どころじゃあない。蚊やり線香を焚くといいいんだが、うちでは除虫菊けしきくを炮烙ほうろくへ入れてくすべることになっているんでね」

要が予想していた通り老人はこのあいだの手紙のようでもなく、いつもに変わらない機嫌きげんの

よさで、此処へ来るなりふさいでいる美佐子の顔色には頓とんじやく着ちゃくなく語るのであった。お久も事のあらましは聞いているのに違いなからうが、例のおつとりと、音も立てずに運ぶものを運んでしまうと、何処へ行つたのか、すだれ越しに透かされる部屋と云う部屋には姿も見えない。

「ところで今日は、泊まって行つてもいいんだらうね」

「ええ、………どうともきめずに来たんですけれど。………」

要は始めて妻の方へ眼を向けたが、妻はその言葉を撥はね返す如くに云った。

「あたし帰るわ、早く話して下さらなくつて？」

「美佐子、お前は彼方あつちへ行つておいで」

しずかな部屋に、ぽんと吐月峰はいふきの音が鳴った。そして老人が二服目の刻みを詰めて、雁がんく首しりの臀しりで煙草盆の火をさぐっているあいだに、美佐子は黙って席を外して、二階の梯子はしご段だんを上つて行つた。下でお久と顔を合わすのが厭いやだったのである。

「困つたことになりましたね、どうも、………」

「御心配をかけて相済みません。実は今までは、こう云う事にならないでも或あるいは済いむかと思つておりましたものですから、………」

「今になつては済まないんですか」

「ええ、大体手紙で申し上げたような訳なんです。……勿論あれだけではお分りにならないところもあるかと存じますけれど、……」

「なあに大凡<sup>おおよ</sup>そは分つています。しかしこりやあ要さん、私に云わせると、一体あなたが悪いんだね」

はつとした要が何か云おうとするハナを抑えて、老人はすぐに後を被<sup>かぶ</sup>せた。

「いや、悪いと云うと穏やかでないが、つまり私の考じやあ、あなたがあんまり物を理詰めに持つて行き過ぎたんじやないか。何も当節のことだから、女房を一人前の男なみに扱うのもようがしようが、なかなかそれが思い通りには行かないもんでね。早い話が、あなたは自分に資格がないからと云う訳で、試験的に外の夫を選ばせた。こりやあどうして出来ないことだ。口で何のかのと新しがりを云つたつてそれだけ公平にはやれるもんじやない。……」

「そう仰つしやられると、何とも僕は申し上げようも……」

「いや、要さん、私は皮肉を云っているんじゃないんですよ。ほんとうに感じ入っているんですよ。これが一と昔前だったら、あなたがたのような夫婦は世間にいくらもあつたん

で、私なんぞが現にその通りだったんだが、……いやもう、一年や二年どころじゃあない、五年も女房の傍<sup>そば</sup>へ寄り付かなかつたくらいなものだ、それでもそう云うものだと思つて済んでいたんで、考えてみりやあ今の世の中は大そうむずかしくなっていますよ。しかし女と云うものは、試験的にもせよ、一度脇<sup>そ</sup>へ外れてしまつた』と気が付いても、意地にも後へ引つ返すことが出来ないようなハメになるんで、自由の選択と云うことが、実は自由の選択にならない。——ま、これからの女はどうか知れないが、美佐子なんかは中途半ばな時勢の教育を受けたんだから、新しがりは附け焼き刃<sup>や</sup>なんでね」

「その附け焼き刃は実は僕も御同様なんで、お互にそれが分っているもんですから、別れることを急いでいるような訳なんです。とにかく今の道徳が正しいと命ずることなんですから」

「要さん、こりやあ此処だけの話だが、美佐子のことは私に任せて下さるとして、あなたの方にはもう一度考え直して下さる余地はないんですかい？——何とも私には理窟は云えない、歳を取ると事<sup>ことなか</sup>勿れ主義になるせいだろうが、性が合わなければ合わないでいい、長い間には合うようになる。お久なんかも私とは歳が違ふんで、決して合う訳はないんだ

が、一緒にいれば自然情愛も出て来るし、そうしているうちには何とかなる、それが夫婦と云うものだと思える訳には行かんもんかね。尤もそりゃあ、一旦不義をしたのだからと、そう云われりゃあ是非もないが、……」

「そんな事は問題にしていやしません、僕が許したんですから、『不義』と仰つしやつて下すつては、美佐子が可哀そうなんです」

「けれども不義はやつぱり不義だね、そうなる前にちよつと私に答えてくれたらよかつたんだが、……」

要は老人の婉曲えんきよくな批難に無言で報いるより外はなかつた。申し開きの道はいくらもあるが、その道理の分らない老人ではない、分つていながらそれを口にした言葉の裏に、親としての悲しい愚痴の含まれているのが、刃向えないような気がした。

「いろいろ僕も手を尽さなかつた所はあると存じます。ああもすればよかつたと思うこともないではないんですけれど、今では後の祭ですし、それに何より美佐子の決心が堅いんですから、……」

いつの間にか土庇の外からさしている日の光が弱くなつて、部屋すみずみの隅々に暗い蔭が作られていた。老人は上田紬つむぎの万筋まんすじの单衣ひとえの下に夏痩せやのした膝頭ひざがしらをそろえて、団扇うちわで

蚊遣りの煙を追いながら、思いなしか眼ぶたをしばだたいているのは、除虫菊に咽むせんだの  
 かも知れない。…………

「これは成る程、あなたの方を先にしたのは私の出ようがまずかった。——要さん、と  
 にかくなんにも云わないで、私に美佐子を二三時間預けては下さるまいか」

「お預けしてもとても無駄だと思うんですが、……………実は当人に見してみますと、お話があ  
 るのが辛いと云うので、僕だけをお願いに出るようにと云って、そんなことから、とうに  
 もお伺いする筈のところ段々におくれておったんですが、今日でも連れて来ますのに随  
 分骨を折らせたんです。行くことは行くが、自分の決心は最早や動かないものとして、申  
 し上げることは全部僕から申し上げ、お話があれば伺ってくれろと云うような訳なんでし  
 て、……………」

「しかし要さん、仮りにも娘が不縁になろうと云う場合だ、私としたらそう簡単に済ませ  
 る筈のもんじゃないがな」

「それは僕からも再々云い聴かせておるんです。ただ何としても興奮しております際には  
 あり、お父さんと衝突したくないからして、僕が本人の代理として御承知を願うように計  
 らってくれろと申すのが本意なのです。が、いかがでしょう、何なら此処へ呼びましたん

では？」

「いや、何か支度もしてあるようだが、私はこれからあれを連れて瓢亭<sup>ひょうてい</sup>へでも行つて来ましよう。ねえ、あなたには別に、異存がお有りじやあないんでしょう」

「ですが、あれが素直に承知しますかどうか。……」

「ええ、分つてます。私が本人にそう云います。いやだと云やあそれまでだけでも、この所は年寄の顔を立ててお貰い申したいね」

要<sup>よ</sup>がもじもじしているひまに老人は手を鳴らしてお久を呼んだ。

「あのうな、南禅寺へ電話をかけておくれでないか、——二人で行くから、静かな座敷を取つておいてくれるように」

「お二人さんでおいきやすの？」

「折角腕によりをかけたんだらうから、お客を残らず浚<sup>さら</sup>つて行つちやあ気の毒だと思つてな」

「そしたら残つておいやすお方が気の毒やおへんか、いつそのことみんなでおいきやすな」

「御馳走<sup>ちそう</sup>は何が出来るんだい？」

「なにもおへんえ」

「甘子<sup>あまじ</sup>はどうした？」

「空揚げにしよう<sup>おも</sup>思てますけど、……………」

「それから？」

「若<sup>わか</sup>鮎<sup>あゆ</sup>の塩焼」

「それから？」

「牛蒡<sup>ごぼう</sup>のしらあえ」

「まあ、要<sup>さ</sup>さん、肴<sup>さかな</sup>が悪いが、ゆつくり飲んでいて貰いましょう」

「貧乏<sup>くじ</sup>鬺<sup>くじ</sup>お引きやしたなあ」

「なあに、板前が瓢亭以上ですから、たんと御馳走になりますよ」

「じゃあ、おい、着物を出しといとくれ」

そう云つて老人は二階へ上つた。

どう説きつけられたのか、「年寄りの氣にさからつては無事にまとまりのつくべきものも壊れてしまうから」と途<sup>みち</sup>々<sup>みち</sup>たしなめられて来たのが腹にあつたのもあろうか、美佐子は十五分もすると不承々に父親と一緒に降りて来て、廊下に立ちながらそつと顔を直してから、一と足先に表へ出た。

「さあ、じゃあちよいと行つて来ますよ」

と、紗しやの宗匠頭巾ずさんを被つた、宝井其角きかくと云ういでたちで奥から現れた老人は、玄関まで送つて出たお久と要とにそう云い残すと、白足袋の足に利久はを穿いた。

「お早うお帰り」

「いや、お早くもないかも知れない。——要さん、美佐子にも云つて置いたんだが、今夜は泊まつて貰いますよ」

「いろいろどうも御厄介になります、僕は執方どつちになりましたでも差支えはありません」

「お久や、わたしの蝙蝠こうもりを出して貰おう、大分蒸して来たようだが、この塩梅あんばいじゃあ又雨だな」

「そしたら、車でお行きやしたら？」

「なあに、じきそこだ、歩いたつて訳あないさ」

「行いとおいでやす」

と、お久は送り出しておいて、すぐに手拭い浴衣ゆかたを持って要のあとから座敷へ行つた。

「お風呂が湧わいてますよつて、今の間に一と浴びおしやしたら？」

「有り難う、折角だけれど、どうしようかな、風呂へ這入ると臀しりが落ち着いちまうんでね」

「どうせお泊まりやすのんやろ？」

「さあ、それがどうなるか分らないんです」

「そう云わんとまあお這入りやす。おいしい物おへんよって、せいぜいお腹減しといとおくれやす」

要はこの風呂へ這入るのは久し振りだった。上方に普通な長州風呂と云う奴で、一人の体が満足には漬つからないくらい小さな釜の、周りの鉄の焼けて来るのが東京風のゆつくりとした木製の湯槽ゆづねに馴れた者には肌ざわりが気味悪く、なんだか「風呂へ這入った」と云う心持がしないのに、まして湯殿がおそろしく陰気な建て方で、高いところに無双窓むそうまどがあるだけだから昼間でも厭いやにうすぐらい。自分の家でタイル張りの浴室にばかり這入りつけているせいくすりゆか穴蔵へでも入れられたようで、その上丁子ちようじを煎せんじてあるのが、垢あかだらけに濁った薬湯くすりゆのような連想を起させるのである。美佐子などは、あのお湯は丁子の匂いで胡麻化してあるので幾日目に換えるのだから分らないと云って、すすめられると体よく逃げたものであったが、主の方は又「うちの丁子風呂」と云うのを自慢にして、客への御馳走と心得ているらしかった。老人の「雪隠せついん哲学」に依ると、「湯殿や雪隠を真つ白にするのは西洋人の馬鹿な考だ、誰も見ていない場所だからと云って自分で自分の排泄はいせつ物が

眼につくような設備をするのは無神経も甚しい、すべて体から流れ出る汚物は、何処までも慎しみ深く闇に隠してしまうのが礼儀である」と云うのであって、いつも杉の葉の青々としたのを朝顔に詰めるのはいいとして、「純日本式の、手入れの届いた厠には必ず一種特有な、上品な匂いがする、それが云うに云われない奥床しきを覚えさせる」と云うような奇抜な意見さえあるのだが、雪隠の方はともかくも、風呂場の暗いにはお久も内証で不便をかこつことがあった。彼女の話だと、丁子も近頃はエッセンスを売っているから、その一二滴を垂らしさえすれば済むものを、矢張昔風に実の干したのを袋に入れて、湯の中へ漬けておかなければ老人が収まらないのだと云う。

「肩流しておくれやすんやけど、あんまり暗おすので、前とうしろと間違えたりおしやしてなあ」

要はお久のそんな言葉を想い出しながら、柱にかけてある糠袋を見た。

「お加減はどうぞす？」

と、焚き口の方でお久らしい声が云った。

「結構です。それより誠にすみませんが電氣をつけて貰えませんか」

「ほんに、そうどしたなあ」

しかし点<sup>とも</sup>された電燈と云うのが、それもことさらそうしてあるのに違いない豆ランプ程の球であるから、ひとしお陰気で暗さが増したような気がする。要は流しに出ていると体じゆうを藪蚊<sup>やぶか</sup>が喰うので、ざつとシャボンも使わずに汗を洗い落してから丁子の湯の中に浸りきつていたが、そうしていても蚊は相変らず首の周りへ襲つて来る。中はそんなに暗いのだけれど、無双窓の櫺子<sup>れんじ</sup>の外はまだうす明るく、楓<sup>かえで</sup>の青葉が日中よりは却<sup>かえ</sup>つて冴<sup>さ</sup>えて織り物のような鮮<sup>あざ</sup>やかな色を覗<sup>のぞ</sup>かせている。なんだか辺鄙<sup>へんぴ</sup>な山の湯にでも来たようで、老人がよく「うちの庭ではほととぎすが聞ける」と云つていたのを思うにつけ、こう云う時に啼<sup>な</sup>かないものかなと耳を澄ましたが、聞えるものは何処か遠くの田圃<sup>たんぼ</sup>の方で雨を呼んでゐる蛙<sup>かわず</sup>の声と、わーんと云う蚊の啼きごえばかりである。それにしても今頃瓢亭の座敷にいる親子は、何を話しているだろう。老人は婿<sup>むこ</sup>に対してこそ遠慮があるものの、あの口ぶりから察すると恐らく娘には圧制的に出るのではないのか。要はそんなことが多少は心にかかりながら、どう云うものか二人を送り出してしまつてからは何となく気が軽くなつて、こうして風呂に漬<sup>つ</sup>かっている此処の家が、すでに第二の妻を迎えた自分の新居であるような愚かしい空想が湧<sup>わ</sup>くのであつた。思えばこの春からしきりに機会を求めては老人に接近したがったのは、自分では意識しなかつたところの外の理由があつたのかも知れない。そ

ういう途方もない夢を頭の奥に人知れず包んでいながら、それで己れを責めようとも戒めようとしなかったのは、多分お久と云うものが或る特定な一人の女でなく、むしろ一つのタイプであるように考えられていたからであつた。事實要は老人に仕えているお久でなくとも「お久」でさえあればいいであらう。彼の私ひそかに思いをよせている「お久」は、或はここにいるお久よりも一層お久らしい「お久」でもあらう。事に依つたらそう云う「お久」は人形より外にはないかも知れない。彼女は文樂座の二重舞台の、瓦燈がとうぐち口の奥の暗い納戸なんどにいるのかも知れない。もしそうならば彼は人形でも満足であらう。

「ああ、お蔭様でさつぱりしました」

と、要はその声で自分の妄想を振り落すように云いながら、借り物の浴衣を湯上りの肌へ引つ掛けて戻つた。

「きたのうて心こころ悪わるおしたやろ」

「なあに、丁子風呂もたまには變つていていいですよ」

「けど、お宅のお風呂場みたいに明あうしたら、あてえ等よう這入りまへん」

「どうしてです」

「あないに何処かしこも彼処かしこも白おしたら晴れがましおしてなあ。……あんさんこの奥様おくさん

みたい綺麗おしたらよろしおすけど。………」

「へえ、そんなにうちの女房は綺麗かしらん？」

要は眼の前にはいない人に軽い反感と嘲りの心もちを含めて云いながら、すすめられるままに杯を受けて器用に乾した。

「さ、一つ差上げましょう、………」

「そうどすか、そんなら戴きます」

「甘子がなかなか結構です。………」とここでこの頃は地唄はどうです？」

「あんなもん、しんき臭おしてなあ。………」

「この頃はやっていないんですか」

「してることはしてますけど、………」奥様は長唄どすやろ」

「さあ、長唄なんかとうに卒業しちまって、ジャズ音楽の方かも知れない」

春慶塗の膳の上に来る蛾を追いながらお久があおいでいてくれる団扇の風を浴衣に受けて、要は吸い物椀の中に浮いているほのかな早松茸の匂いを嗅いだ。庭の面は全く暗くなりきって、雨蛙の啼くのが前よりも繁く、かしがましく聞える。

「あたしも長唄けいこしてみとおす」

「そんな不料簡を起すと、叱しかられますぜ。お久さんのような人には地唄の方がどのくらいいいか知れやしません」

「そら、地唄習うのもよろしおすけど、お師匠はんがやかましおして」

「たしか大阪の、何とか云うけんぎよう検校さんじゃあなかったんですか」

「へえ、——それよりも内のお師匠はんの方がなあ、………」

「あははは」

「かなしまへんどす、講釈ばかり多おして、………」

「あははは、………年を取ると誰しもみんなあなるんですよ。そう云えばさつき風呂場にあつたんで思い出したんだが、相変らずぬかぶくろ糠袋を使うんですね」

「へえ、御自分はシャボンお使いやすけど、女は肌が荒れていかんお云やして、使わしとおくなはれしません」

「鶯うぐいすふんの糞はどうしてます？」

「使つかてます、一向に色は白うなれしまへんどすけど」

二本目の銚ちようし子を半分ほどにして、あとはあつさり茶漬ちやくにしてから、食後に枇杷びわを運んで来たお久は、玄関の方で電話のベルが鳴るのを聞くと、剥むきかけた実をギヤマンの皿の上

へ置いて立つたが、

「へえ、…………へえ、…………よろしおす、そない申しときます。……………」

と、電話口でうなずいていたのが、直きに戻つて、

「奥様も泊まる云うとおいやすさかい、もうちよつとゆつくりして行く云うてどすえ」

「そうですか、帰ると云つていたんだけれど、…………泊めていただくのは久し振りのような気がしますね」

「ほんに、あれから長いことどすなあ」

しかし要が美佐子と二人で一つ伏戸ふしどに寝ると云うのも随分「長いこと」ではあつた。尤も二三箇月前に弘が東京へ行つていた折、何年振りに二人ぎりで二た晩か三晩を過したところがあるにはあるけれど、その時の経験では、全く合宿の旅客のように平気で枕を並べながら、互に何のかかわりもなく安眠することが出来たほどにも、凡そ夫婦らしい神経が麻痺まひしてしまつていたのである。老人が今日はしきりに泊めることを主張したのは、恐らくそれが予定の計画だったのであろうが、その折角の心づかいを要は多少迷惑には感ずるものの、殊更それを避けようとするほど気が重くなりもしない代りには、今更何の足しにならうとも思えなかつた。

「えらく蒸しますね。風がぱったりなくなってしまった。……」

要は消えかかった蚊やりの煙の真つすぐに立ちのぼる土<sup>どびさし</sup>庇の外を仰いだ。止んだのは庭の面の風ばかりではない、お久もおぐのを忘れたように、手にある団扇をじつと動かさずにいるのである。

「うつとしおすなあ、雨どすやろか？」

「そうかも知れない、……さつと一と降り来るといいんだが、……」

そよもしない青葉の上には、雲ぎれのしたところどころに星のにじんでいるのが見える。虫が知らせるとでも云うのか、ちょうど今頃、父親の説諭に反抗している妻の<sup>いちぢず</sup>一途な言葉のはしはしが聞えて来るような心地がする。要はその時、妻より一層強気な決意がいつしか自分の胸の奥にも宿っていることをはつきり感じた。

「何時でしょう」

「八時半頃どす」

「まだそんなもんですか。静かですねえ、この近辺は」

「早<sup>はよ</sup>おすけど、横におなりやしたらどうどす？ そのうちにお帰りやすやろさかい、……」

「……」

「電話の模様じゃあ話がなかなか手間が懸るんじゃないんですかね」

要はひそかに老人よりもお久の意見を聞きたい気がした。

「何ぞ本でも持つて来まひよか」

「有り難う、………お久さんはどんな物を読みます？」

「なんやかや草双紙みたいなもん持つておいでてこれ読めお云やすけど、そんな古臭いもん読まれしません」

「婦人雑誌はいけないんですか」

「あんなもん読む暇あつたら手習いせえてお云やす」

「お手本は？」

「柳春帖」  
りゅうしゅんじょう

「柳春帖？」

「それから池凍帖、——お家流の本どす」  
ちとうじょう

「なる程。——それでは何か、その草双紙でも拝借しましょう」

「名所図会はどうどす？」

「そんなものもいいかも知れない」

「そしたら彼方あつちへおいでやすな、離れの方にもうちやんと支度しとおすえ」

廊下づたいに、お久は先へ立つて行つて、茶の間の水屋の前を通ると、隣りの六畳の間の方の襖ふすまを明けた。暗いのでよく分らないが、中には蚊帳かやが吊つてあるらしく、まだ戸締りのしてない庭からすうツと流れ込む冷めたい空氣に萌黄もえぎの麻の揺られるけはいが察せられる。

「風が出て来たようやおへんか」

「急にひいやりして来ましたね、もう直き夕立がやって来ますぜ」

蚊帳の裾すそがさらさらと鳴つたのは、風ではなくてお久が中へ這入ったのだった。そして手さぐりでスウィッチを捜して、枕もとの行燈あんどんの中に仕込んである球をともした。

「もうちよつと明あかい球持つて来まひよか」

「なあに、昔の本は字が大きいから、これでも結構読めるでしょう」

「雨戸明けといてもよろしおすやろ、あんまり暑苦しおすさかい、……………」

「ええ、どうぞ。いい時分に僕が締めます」

要はお久が出て行ってしまうとともかくも蚊帳の中に這入はいった。広くもあらぬ部屋ではあるし、麻の帳とばりで仕切られているので、二つの蓐しとねが殆ど擦れ擦れに敷いてある。自分の家で

は、夏にはいつも出来るだけ大きな蚊帳を吊つて、出来るだけ離れて寝る習慣があることを思うと、この光景は異様に感ぜられなくもない。しよぎいなさに彼は煙草に火をつけて腹這いになりながら、萌黄の帷まくの向うにある床の間の軸を判じようとしたけれど、何か南画の山水の横物らしいとは思えても、行燈が中にあるせいか外はもやもやと翳かげつていて、図柄も落らっ欵かんもよく分らない。掛け軸の前の香こう盆ぼんに染め付けの火入れが置いてあるので、始めてそれと気がついたのだが、さつきから微かかに香かつてゐるのは大方あれに「梅が香」が薰くじてあるのであろう。ふと、要は床脇の方の暗い隅にほのじろく浮かんでゐるお久の顔を見たように覺えた。が、はつとしたのは一瞬間で、それは老人の淡路土産の、小紋の黒餅こくもちの小袖こそでを着た女形おやまの人形が飾つてあつたのである。

涼しい風が吹き込むのと一緒にその時夕立がやつて来た。早くも草葉の上をたたく大粒の雨の音が聞える。要は首を上げて奥深い庭の木の間を視つめた。いつしか逃げ込んで来た青蛙が一匹、頻しきりにゆらぐ蚊帳の中途に飛びついたまま光った腹を行燈の灯に照らされてゐる。

「いよいよ降つて来ましたなあ」

襖ふすまが明いて、五六冊の和本を抱えた人の、人形ならぬほのじろい顔が萌黄の闇の彼方あなたに据

わ  
つ  
た。  
。



## 青空文庫情報

底本：「蓼喰う虫」新潮文庫、新潮社

1951（昭和26）年10月31日発行

1969（昭和44）年2月10日20刷改版

1987（昭和62）年11月30日53刷

初出：「大阪毎日新聞 夕刊」

1928（昭和3）年12月4日～1929（昭和4）6月18日

「東京日日新聞 夕刊」

1928（昭和3）年12月4日～1929（昭和4）6月19日

※底本巻末の三好行雄氏による注解は省略しました。

入力：kompass

校正：しんじ

2019年6月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 蓼喰う虫

谷崎潤一郎

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>